川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二年四月二十五日 印刷
平成二年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七五六号

日川協加盟

No. 756

五月号

第5回 国民文化祭文芸大会

＜川柳作品募集＞

宿題・選者（事前投句・各題2句）

「動く」　去来川巨城選
「裏」　加藤翠谷選
「門」　片岡つとむ選
「酒」　斎藤大雄選
「指」　竹本瓢太郎選
「帯」　玉野可川人選
「渦」　福田白影選
「握る」　森本医昌選

募集期間　5月1日～7月31日

応募料　1000円（郵便小為替）

200字詰原稿用紙（B5判）を使用。各題ごとに別紙とし、無記名。作品とは別に郵便番号・住所・氏名（雅名使用の場合は、本名併記、ふりがなをつけること）・年齢・性別・職業・電話番号・大会当日と吟行の出欠を明記。

送付先

〒790 愛媛県松山市一番町4丁目4－2
愛媛県庁内　第5回国民文化祭愛媛県実行委員会事務局「文芸大会」川柳係

川柳大会

10月21日（日）午前10時

会場　愛媛県民文化会館サブホール

宿題・選者（当日出句・各題2句）

「馬」　大木俊秀選
「石」　亀山恭太選
「橋」　仲川たけし選
「道」　山田良行選

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上交歓の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人　一口　二、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体　次の四種といたします。

①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　5月25日

〒581　八尾市中田二－三〇二　高杉鬼遊方

川柳塔社　会計室

路郎句碑建立について

このたび、阿部野神社境内に麻生路郎句碑を建立するにあたって、多数の方から浄財が寄せられて完成し、四月一日、除幕式を挙行したことをご報告申し上げます。

川柳塔社

シーサンバンナー 西双版納行

西尾　栞

野越え山越え空翔んで
行ってきました西双版納

一時間の時差で、上海へ着いた。これから貴州・雲南のガイドは、蔣さんという一m八三cmのハンサムボーイである。一行は十二名で、最年少者は看護婦さんを細君にもったNさんで五十代、あとは精巧なカメラを首からぶらさげた六十代、七十代で、私が一番年長の八十一歳だった。元気に皆に負けじと従いて行くのを見て、私と三十歳違いだからまだまだという自信を得たと欣びの対象となった。着いた日と翌日は、上海ホテルに泊って市内見物。

「蔣さん、つかぬことを聞きますが、この上海には銘酒というのがないのかね。先刻から見ているが、電気器具や機械の広告ばかりで、酒の広告がチットもないが……。日本だと、高知なら、『司牡丹』『土佐鶴』という広告がうるさいほど目について、今晩は鰹のたたきで土佐鶴を一杯という楽しみが出てくるのだが。

昔、李白が『長安市上酒家に眠る、天子呼び来れども船に上らず、自ら称す臣は是れ酒中の仙』と詩った李白の呑んだ酒は、何という銘柄の酒だったのか」と問うと、「大体、中国人は酒は余り呑まんようです。老酒と紹興酒があるだけです。貴陽へ行けば、茅台酒（マオタイ）があります。アルコール分六十度という奴で、燐寸をするとメラメラと燃えるきつい奴です。明日行きますから呑んでもらいます」。

そんなやりとりをして上海を後にした。貴陽への道は菜の花の絨毯の上を行くようで、右も左も見渡す限り黄色一色で、こんなに菜の花を作って、刈りとるのも大変だろうと驚く。バスの窓を閉めていても、菜の花の香りが鼻をつく。道端で養蜂屋が箱を並べている。

菜の花に噎せて貴陽の旅つづく

陽がとっぷり暮れて、貴陽市の僑誼大酒店に着く。旅装もとかず、早々に夕食の卓を囲む。ビールでまず乾杯だが、こんなまずいビールをこれから十日も呑まされるのかと思うと心細くなる。やがて蔣さんと添乗員のYさんが、やおら茅台酒をもってきて酌いで回る。僕も軍隊時分、ガソリンをのんだ経験があるから、湯呑に二杯、余りおいしくもない茅台酒を何事も後学のためとあふる。

路郎師は、「旅の句はすぐには出来ない。帰って来て半月程経って、まだ印象にのこるものあればそれが句になる。なければそれまでだ」と言われた。成程と感心して一句も出来ぬ言い訳とする。巻頭言に弱っている自分にこの旅日記でお茶を濁そうと企んでいるのが見え見えである。申し訳ない。

座右の句
嘘と嘘女いよいよ美しく　（路郎）

私の句
露天風呂月に乳房をぬすまれる　桝本蕗児

川柳塔　五月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　西双版納行……西尾　栞……（1）
ご縁……西田柳宏子……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（32）
■川柳太平記(144)　川柳の群像　北夢之助……東野大八……（36）
■連載　柳籠裏三篇研究（三丁）……（38）
日本の最短詩―武玉川調（二）……阿達義雄……（40）
水煙抄……黒川紫香選……（44）
秀句鑑賞「同人吟……宮園射月芳……（43）
　　「水煙抄……山本規不風……（65）
句評リレー　樫谷寿馬・林はつ絵・安平次弘道・玉置重人……（66）
銀河系……河内天笑選……（70）
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選……（74）

ご縁……

西田柳宏子

皆様のご浄財をもって建立された麻生路郎先生の句碑除幕式が四月一日阿部野神社で厳粛の中にも和やかに執り行われました。本当に好かったと感慨ひとしお深いものを感じました。

昨年、高野山大霊園の「川柳塔」碑から今年一月の大阪川柳人クラブ初代会長金泉萬楽氏の句碑に続いて、今回の路郎句碑まで、その何れにも世話役の一人として関係し、正直言って肩の荷がすっかりとれて、ホッとしたというところです。

顧みると阿部野神社にせよ、高野山にせよ目に見えない縁の不思議なつながりを感じます。私と川柳の縁は、阿部野神社に隣接して住んでいた昭和二十九年、神社の世話役の一人として社殿復興の宮大工棟梁として来られた清水白柳氏と話しているうちに興味を覚えたのが始まりです。同氏歿後、子息の健司氏が神社に出入りしていたこともあり、昭和五十七年九月二十六日、白柳句碑「菊活けてひ

「矢」……椎江清芳選…(76)
一路集「振る」……田中笑風選…(76)
「コップ」……森下愛論選…(77)
初歩教室「誘う」……辻白渓子…(78)
■ずいそう　白河夜船……布施幸子…(41)
■川柳こぼれ話　川柳と外来語……田中正坊…(69)
麻生路郎句碑除幕式を挙行……(84)
米澤暁明さんを悼む……月原宵明…(99)
本社四月句会……(80)
■各地句会だより　川柳サークル卯の花……辻白渓子…(98)
各地柳壇（佳句地十選／川竹松風）……(86)
柳界展望……(100)
五月各地句会案内……(101)
■編集後記……(102)

座右の句

人恋し人わずらわし波の音　（栞）

私の句

絆とや冠婚葬祭だけの縁　松川芳子

ととき欲を忘れたり」が建立されました。

平成に改まる少し前から、路郎先生の句碑が大阪になく、また、萬楽氏の句碑もないので是非、建てたいという西尾栞主幹のご発案により、大阪市教育委員会や市公園課などに話をしてもどうにもならず、思い余って阿部野神社にお願いしたところ、中塚昌宏宮司がご快諾下さり、大阪川柳人クラブや番傘本社など各柳社のご協力もあって、二基の建立がほとんど我々の労するところなく、宮司のお計らいで完成した次第であります。

さて一方、高野山の方も昭和六十二年七月五日、普賢院で路郎追悼川柳大会を催し、二百八十名に及ぶ参列を得て、供養並びに川柳大会を挙行したのを契機に、昨年十一月十二日、内海幸生氏による墓域ご提供と栞主幹提唱により『倶会一処』を唱えた「川柳塔」碑の建立除幕式が行われたことは、未だ皆様のご記憶に新しいところであります。

さらにもう一つ、高野山には大きなご縁がありました。今年三月十二日、高野山全寺院の最高権位（弘法大師のお身代りを務める）である第四百九十一世寺務検校執行法印大和尚位の昇進転衣披露式典が挙行されました。福智院住職の静盛晄法印様は、私と同年の初年兵仲間で、親友三人組のもう一人とともに当日、ご招待を頂いたのは感激でした。

ご縁…しみじみ感慨深いものを感じます。

川柳塔

西尾栞選

吹田市　栗谷春子

雲に来てひばりはやっと巣を想う
傷心は片隅に置き花のたね
何ごとも起こらずテレビつづき見る
はばからぬ人待つ時も樹の蔭で
メロドラマ始め終りに駅がある
静かな人静かに逝きし如月よ

和歌山市　西山幸

心機一転が重たい腕時計
散るさくら皆潔い筈はない
収支表ああ生き難き死に難き
残り少ない味方とおもう箸二本
枕の下に今日のノスタルジアがある
晩鐘や罪の一つが鳴り止まぬ

西宮市　林はつ絵

好きなものみんなあげよう影ぼうし
ことごとに夫を貶す愛しよう
気の毒なことへ乗気になる女
かんたんに善処しますと言えますか
すれ違う女女を読みつくす
どんぐりとも粒揃いとも言っている

豊中市　田中正坊

エメラルドすくすく育つ孫ふたり
青春がニックネームに透けて見え
ただ若き日をこそ惜しめ春夫の忌
パレットにまだ原色がある余生

京都市　都倉求芽

春霖やひめゆりの塔ひそと建つ（ひめゆりれくいえむ）
乙女今老いていくさを語り継ぐ
春の気をいっぱい吸うて上る月
目の毒は承知で毒へ目を向ける
信じないお守り肌身離さない
異動期や咲いてまた散る花に似て

これ以上大きな回り舞台はない地球

淡路島句碑の森

師弟とや背中合わせの句碑やよし

和歌山市　若宮武雄

自画像の手入れに余念ない傘寿
春風に握りこぶしも解けたまま
花便り溝の水さえ弾みだす
顔を塗りつぶしピエロに成り済ます
容赦ない灸のおかげと思う今
忠告に来て招かざる客となり

鳥取県　土橋螢

こんなにも惜しいいのちの無駄づかい
かけ捨ての保険ぐらいで死ねますか
おういおおいと田んぼから春の声
贅沢な時が平々凡々と
小説の女と恋に落ちてゆく
君想うことを空しうするなかれ

唐津市　久保正敏

小料理屋「竹」という名の母の味
株下がりオーナーママの無愛想
無記名のアンケートなら「ノー」と書く
ウインクをしている女に借りがある
毒の矢が一本欲しい的がある
松葉杖示談成立まで捨てぬ

松原市　谷垣史好

オーロラの神秘あなたはなお神秘
胸元の水玉模様嘘模様
この国に半分愛想がつきました
外国の街で迷子になった夢
仏壇にお尻を向けて寝ています
仙人の杖軽そうで重そうで

下関市　石川侃流洞

ゴールデンウィーク妻の財布を覗き込み
コンパクト後ろの席が気にかかる
無為無策少し早いが飯にする
キヨスクで証拠の土産整える
瓢箪のくびれ羨む乙女たち
ルンペンに成人病がいる噂

松原市　玉置重人

陸橋でいっぺんしたいことがある
怖いなあ孫が免許を取りました
老人の孤独を鳩が知っている
実力がないので背伸びばかりする
喪の家の金魚のべべが赤すぎる
おばはんに頼りきってるめし茶碗

和歌山市　牛尾緑良

一枚の誓紙女はまだ胸に
故郷の想いが切れぬ流し雛
まあまあの女に見せるカメラアイ
罪少し残して生きる糧にする

石段の長さ祈りをひとつずつ
豆を煮る女は妻であるらしい

岡山市　川端柳子

引き合いにいつも出てくる逝った兄
まっすぐに自宅を目指す旅鞄
照る日曇る日宇宙のくれるカレンダー
一流の腕一流の場所で映え
頃合いをみてさしかける傘を提げ
とり替えてみたい時ある隣の子

黒石市　相馬一花

渋滞が取りもつ縁の夫婦です
騙されてゆっくり開く貝柱
ふんどしを締めて女房ジャズダンス
下心ないからバラの花を買う
篤農家さぼり集まる競輪場

仙台市　川村映輝

鉄のカーテン修繕できぬほど脆し
四代生き明治は日毎消えてゆく
この年になって顔を褒められる
女房が喜寿畳を新調す
寝つかれぬ傍で女房の大鼾

町田市　竹内紫錆

採点は得意もともと無口にて
耳老いてまだセレナーデには酔える
編曲の唱歌に眠るどこでなし
黒電話の頃は要用のみで切り
バス発車までに目薬さす習い

富山市　舟渡杏花

別れた時の傘をたまたま出して干す
女難の相余生にきても沙汰がない
性徴りもなく恋文を練ってます
もうどうにもならなくなった頬被り
たちまちに景色を変えた美女ひとり

名古屋市　越村枯梢

満員電車隣の美女は掏摸でした
嘘っぱち好きだといった夜の冷え
入れ歯ぐらぐら句読点は打てぬ
春あらし花の身悶えなど知らぬ
そこまでは書いてなかった離縁状

大阪市　西出楓楽

春愁へ言わでもがなが多くなる
初孫へ祖父母が贈る銀の匙
ブランドを着込む心が寒いから
夫婦老い禅問答に似る会話
割り算と引き算ばかりして孤独

大阪市　津守柳伸

健康が気になりだした一人の計
雨足へ寝返りつづく一人部屋
主義主張春には春の花が咲く
花博に行く休日が空けてある
気配りが過ぎて冷たい風の部屋

ドアホンへ頭を下げて挨拶し
左遷地で真面目な酒を飲む上司
親を見て育ってくれぬテレビっ子
新婚の頃思い出す転居の荷
単身赴任料理のメニュー増えてくる

大阪市　吐田公一

人は皆終身刑で生きている
生きて来た轍の痕も深々と
投票はしないが握手はしてあげる
我が家では山はしょっちゅう動きます
二階から降りても酒を呑むだけで

大阪市　塩田新一郎

ハミングでよく寝た朝の台所
テレビを消すと自分の頭が動き出す
テレビ故障会話が弾む晩御飯
明日も又普通の朝が来るように
千金の宵に早寝をしてしまう

大阪市　本間満津子

私にもこんな日あった紙の雛
何もかも捨てたら白くなれるかな
諍った夜もきれいな朝がくる
頁数重ね苦しみ消してゆく
一粒の種花博の夢ひらく

大阪市　神夏磯典子

韋駄天の女神美し女子マラソン

大阪市　板東倫子

少年の悲恋も春のファンタジー
仏壇の前を動かぬ拗ねた老母
弁舌と美貌で山が動くかな
幻の銘酒コッソリ嘗めてみる

大阪市　藤田頂留子

生きがいは手を受けないでつかむもの
地球儀の一寸気になる早送り
電子手帳妬いてえんぴつ芯が折れ
電子手帳春の予定が五つ六つ
春本番鶴見は花のネックレス

大阪市　山田妙子

やすらぎを与えてくれる蕗の薹
別れの日良い事ばかり湧いて来る

ロスの旅

はずみから霧のシスコも娘と歩く
アメリカの小さなロスを踏んだだけ
国境を歩いて渡る爽快さ

大阪市　北勝美

借金をするのが嫌で落ちこぼれ
臆病か俺から離れぬ影法師
母の忌へ思いめぐらす猫柳
花好きと花の話で小半日
寺の道歩幅は除ける落椿

大阪市　河井庸佑

髪型を変えたに夫気が付かず
違う趣味持って夫婦のすれ違い

学校で残され塾でまで残る
味方から欺く策をもう読まれ
知っていて聞きに来たなと見透かされ
大阪市　桝本蕗児

難民に夕陽悲しい彩である
莫山の書に温かさ溢れてる
ペン胼胝が消えてしまった淋しさよ
カルテ書くペンが途中で思案する
年老いた文学青年縄のれん
堺市　高橋千万子

はかりごと先ず一献をくみかわし
勝ち取った椅子の深さに負けるなよ
倦怠期浪費承知で切りぬける
景品のタワシに袋大きすぎ
金の要る招待状が又届き
堺市　藤井一二三

株暴落春は曙とはゆかず
バレンタインの包みに過去のほろにがし
一輪の梅に心が浮いてくる
政治家の嘘神様も許される
つい浮かれすぎてポロッとぼろを出す
堺市　中川滋雀

過去の絵にしがみついてる裏表紙
父に似た歩き癖まで影になる
言いそびれた時から時計が進み出し
知らん顔してる情けも持ち合わせ
スリッパが足りない客が来てくれる
堺市　河内月子

正直に言うてしもうて揉めている
仲なおりしまひょあんた春ですよ
子守唄企業戦士にきかせよう
あっさりと煙草をやめてくれました
娘も高三ボーイフレンド募集中
高石市　浅野房子

散策の序に一句拾って来
食べ盛り遊び盛りを塾通い
化粧映えだんだんしなくなる鏡
逆らいはしない無視する事に決め
先頭に立つとつまずく事になる
八尾市　宮西弥生

誕生日重ね自分が見えてくる
お月さま笑うてはります酔うてます
ドクターストップぎりぎり線で酔っている
どんぐりが寄ってどんぐり追い越さぬ
縁あって芦屋で貯めること覚え
八尾市　内海幸生

ダイエット戦時の飢えより色の濃し
僕の居ぬ僕の会社が動きおり
言えば恥言わねば腹の虫騒ぐ
口切ってホゾ噛むことを繰返し
一遍は怒鳴って妻の言う通り

八尾市　鷲見　章

西部劇まだ少年の血が残り
提灯を消して馴染みと友の酒
遠大な旅のプランへ中国語
み仏は女性で在す肩の線
家業継ぐ決意を眉宇に卒業す

豊中市　安藤　寿美子

紅椿三つ四つ咲いた頃がよし
医療費タダ早速風邪をひきました
春の風邪ふつうの風邪と異ならず
過疎の里いいな蛇さえいなければ
残り鴨きっとあいつはへそ曲り

箕面市　椎江　清芳

離島への先生島を挙げて待ち
マンションに馴染めぬ猫が家出する
ポストより近い家から来た賀状
風花の散ればポストも人恋し
背を向けた男を待っている港

箕面市　坪田　紅葉

いつからかぎすぎすして来た金あまり
朝毎におがむ亡夫の若い顔
先行きはどうあれ今日も平和です
気が変り百まで生きる事に決め
バーゲンのはんてんすぐに役にたち

松原市　小池　しげお

何できたのか解らなかった贈り物
参考にならない妻の意見聞く
鳩時計夢のつづきをみてしまい
孫の守り孫と一緒に叱られる
ワイキキで老妻へこっそりアローハー

松原市　佐藤　奏月

こんな頭に整髪料を六種類
儲からぬ仕事だけれど丁寧に
紛れ込んで逃れられないデモの列
評判は藪だがながいお付き合い
本物になってきました肩パッド

藤井寺市　吉岡　美房

策のない男も同じ腕を組む
満開の桜に鬱をうつされる
裁かれて桜吹雪の忠魂碑
葉桜の中で今年も生き延びる
花博の道でたんぽぽ咲いている

羽曳野市　吉川　寿美

風百態夫婦茶碗の古い疵
均等法カット野菜がよく売れる
人様に言えぬ深爪ばかりして
立春の卵転がるジョークだな
耐えてゆくことにも馴れた帯の芯（夫の入院）

羽曳野市　田中　透太

背伸びした分だけ傾斜きつくなる
逢える日はとてもすなおな化粧する
それからは女の方がよく喋り

気がかりは私にもある不整脈
二次会で機嫌直して三次会

羽曳野市　佐野白水

年功序列に押し出された準師範
妻に嘘言うても父母には真実を
うつの子に肝ッ玉女房付いてます
合格の礼　梅咲き揃うまで延ばし
点滴は鼓動のリズムに合せ落ち

河内長野市　井上喜酔

おだてたら一気にあける紙コップ
嫁ぐ娘の部屋で最後のひな飾り
この辺にたしか海岸あったはず
追加して幹事がやっと席に着け
ネクタイを選ぶセンスが妻にない

和泉市　西岡洛酔

春一番妻の謀反に驚愕す
雨三日亡母と別れた日と同じ
雨しとど某月某日無為無策
髭剃りの跡実直という青さ
寅さんの気っぷが欲しい昨日今日

岸和田市　福浦勝晴

プラトニッククラブとは老いのたわごとか
久闊を叙す一杯で絡みかけ
そのうちにがっぽり稼いで月旅行
車イスめおと慕情の医者通い
申告の戻り一パイひっかける

岸和田市　清野こう

両花田花咲く春へ賭ける場所
タンポポの一株残して草むしる
亡師と語る夢よ消えるな目ざめるな
一坪の庭に花芽が競い合い
病む人の安らぐうそは許されよ

岸和田市　古野ひで

不用意のミス　ライバルは見逃さず
久々の着物に心しゃんとする
有難う最後に残し夫逝き
春愁や心の闇に雨しとど
逢いたいと思えば逢える夢楽し

岸和田市　高須賀金太

女から逃げたいまっしぐらに走る
人間を選る目は犬も持っている
夫婦凧ときどき糸がもつれます
角とれた石は流れに逆らわぬ
目的はとっくに見失ってます

東大阪市　森下愛論

内容証明飲み屋のつけでした
甲高い声が続いて学期末
ワンヒント与えて後は突き放し
感情のまんま引きつった顔と声
信念を通せば融通きかぬ奴

東大阪市　崎山美子

生きて行くヒントをもらう蟻の列

心地よい重さうれしいプレゼント
弾んでる足は気付かぬ落し穴
しがらみの重さまぎらす子の寝顔
ふり返るたびに同志の影が減る

高槻市　辻　白渓子

家出する最後の手段友が知り
闘争のチラシ頭を下げて呉れ
もの足らぬ構図助ける空の彩
口重いのが発言をして決まり
世話好きの夫婦の意見くいちがう

高槻市　川島　諷云児

拗ねている妻の背中に齢を見る
うっかりと人の心につけた傷
夜遊びの味を覚えた伝書鳩
一石を投じ味方をたしかめる
いい夢をも一度見たく旅に出る

守口市　結城君子

ウツの時小川のめだか顔を出す
磯あそび桜貝にて終りにす
埋めた恋砂丘を荒らす者はだれ
潮干狩　遠慮した波打ちよせる
つららオーロラ北の芸術すばらしい

守口市　羽原静歩

花は喜び花は慰め花は哀しみの言葉をくれる
一本の煙草と一個のキャラメルと
愚かにもまだまだ旅がしてみたし
挙式を待つ時間にぼろが見え始め
花活けて心を生けることを忘れ

寝屋川市　柴田英壬子

本心と対峙している春の宵
邪気のない女が煩悩かき乱す
老衰の母へ花博語らない
極楽はここに散り初む夕桜
スパッツは穿けない魚の目の靴で

寝屋川市　稲葉冬葉

再会の椿書写山圓教寺
啓蟄の誤算もあって春になり
先輩は偉い人だと思いたい
居留守には犬を叱って帰るなり
我が街に環境大臣在します

寝屋川市　岸野あやめ

ハーシーのチョコで国力知った頃
義理チョコにしても貰えた頃は良い
退職後日替りメニューのよう喧嘩
縫針が折れて老女の気の弱り
豪邸だ炬燵なんかに用はない

京都市　松川杜的

妻ほどに踵が減らぬ僕の靴
昔子を叱った事を母がする
梅だよりＪＲ嵯峨野線電化
おのずから歩調の揃う友でよし
子に残す一枚の画が未だ画けぬ

共白髪もう偽りの無い夫婦
母米寿我が家にもある祝い事
慰めて欲しい私が聞き役に
林真理子可愛い女になりました
一人言上手になって丸く生き

京都市　松川芳子

雪とけて懺悔を許す陽が光る
怖がっているとチャンスが寄り付かぬ
ワープロのキーが疲れを知っている
曇りない空の青さが身をせめる
弁慶を何度も泣かす花粉症

尼崎市　春城武庫坊

春の嵐少し静まるスキャンダル
駐車場に畑が変わる春の雲
人並みに名刺作った頃もあり
その頃をさもしいとみる花の盛り
山つつじ花芽つんつん生きている

尼崎市　春城年代

春風のとても上手な処世術
黙々と憂さを忘れて墨をする
言い勝った空しさみかんむいている
ライバルを心の友にするゆとり
砂時計ひとりの刻が好きである
甘えること知らないままに妻老いる

尼崎市　奥山美智子

西宮市　奥田みつ子

飛行機雲別れる時はいさぎよく
明日逢える別れもやはり別れなり
人生に卒業はなし春巡る
懸命になればなるほどにピエロ

西宮市　西口いわゑ

雑踏の中で別れが言いやすし
別れても花は変らぬ香を放つ
いさぎよく信号青になる別れ
雑巾も女も変る核家族
それぞれにシナリオを持つ指たちよ

西宮市　門谷たず子

孫合格風船飛ばす青い空
付かず離れずいいお姑さんしています
ハンドルの遊びもあって長い道
いい返事ではないな眼鏡を拭いている
残っていたファイトで通うスイミング

伊丹市　樫谷寿馬

トレンディー遍路になって探し当て
白梅を真白に画く濃い墨
厳然と土俵は男女を差別する
反対の痛さを知って来た野党
パンジーで十分私の春である

伊丹市　山崎君子

陶芸品銘たしかめるわけでなし
映画村火消しい組のはっぴかな
梅枯れず亡母の愛情持って咲き

一番機目覚し時計にしています
円安に新婚旅行のびのびに　川西市　松本ただし

どうしても腰だけ残るどっこいしょ
脳の皺伸びて冬眠抜け切れず
網の目が年毎荒くなる篩
運試し元より運のない男
年の所為こんな逃げ道こしらえる　姫路市　人見翠記

雨の日に「雨瀟々」を読み感無量
嫁いでは夫の味老いては嫁の味
消費税女の味方がふえただけ
おりんの音家族の心を引き締める
散る梅や雪と見まがう雪積り　奈良市　宮口笛生

少々は持ち合せあり出しておく
お松明の日から猿沢池の鯉
お水取り終って元気見せる鹿
野仏がまるくほほえむ春の風
手におえぬ悪さも男の子でござい　大和高田市　岸本豊平次

華道展佗びから遠い枝のはり
居る頃と見計らってか食事時
巣作りもちゃっかり早い次男坊
針千本呑ましてやりたい選挙戦
二十一世紀何とか見たい竹を踏み
カラフルな端布で老母へチャンチャンコ　和歌山市　堀端三男

冬眠をさくらめーるで覚まされる
螺旋階段ゆっくり降りて来る主賓
雑所得どころか命の年金だ
配偶者控除があればと思う申告期　和歌山市　福本英子

世界地図少し歪めて見ていよう
掃除機がこんなに軽い春の音
順調にきたから転ぶのが怖い
花束の棘を綺麗に抜いてあげ
小児科の柱にうちの子の背丈　和歌山市　桜井千秀

出ぬ答えもどかしくいる花の下
がむしゃらに走り大事なもの落とす
見返りが欲しいか話ひちくどい
しかるべき人が纏めてそつがない
春うらら孫が受かった志望校　和歌山市　内芝登志代

お濠端しだれ柳の春姿
久し振り故郷の海の美しさ
鶴のひと声明治の威厳まだ落ちず
もらい風呂した頃想うおぼろ月
草や木のように生きたい正直に　和歌山市　福井桂香

待つもよし待たせるもよし春の駅

花あそび少し疲れが残ります
薄れゆく愛しき人か昼の月
胃が痛む何の悩みもないはずが
こんな日は崩れるように眠りたし

和歌山市　青枝鉄治

手懐けた部下に梯子を外される
ご近所が火事と場内アナウンス
白衣見て慌てふためくモルモット
ライバルの上へ重ねて吊す絵馬
誓紙読むときは裏切る顔でない

和歌山市　山田高夫

一口に言う十年の指の節
悔み顔無理につくってご焼香
他所さまの普請ばっかし大工さん
厚く塗る化粧私で無い私
人間の不遜地球を老化させ

和歌山市　山川克子

遍歴の果てのやさしい顔に逢う
限りなくやさしいだけで物足りず
ひとりではどんな美味しい料理でも
目礼をして片付ける聴診器
確実にかつ平等に年を取る

和歌山市　田中輝子

山からの風は鞭だろ微笑だろ
ライバルよ少し休もう春うらら
風騒ぐやたらダイヤル回してる
千ピースのパズルピカソの絵になった
生い立ちの違いどうするパンの耳

和歌山市　木本朱夏

身体中眼にしなんでも見てやろう（オーストラリアの旅）
夕焼けを追いかけてきた岬まで
ゆっくりと傘をたたんだ別れ道
次の世で夢の残りを見るつもり
なにごともなかったように桜散る

有田市　松井かなめ

ぽきぽきと骨を鳴らして威圧する
人に言えず犬に話すと知らぬ顔
満開の花も自分の明日を考える
花鳥風月酒呑めなくて孤独感
灯を消して眠れぬ夜の永い事

岡山市　井上柳五郎

花束のなかの一輪だけ欲しい
特選へ自信ない句がひょいと抜け
折角に整理したのに探しもの
お雛さま飾れ催促祖父が言う
妥協癖ついた男がすぐ握手

玉野市　小谷仙山

喜びを小出しに花の種を買う
雨だれにゆっくり朝を起される
自動ドア戦う意志は更にない
ビール一本せめてと妻の誕生日
転んで一人起きて一人の歯をみがく

倉敷市　田辺炎六

雪解けに罪のひとつが浮いて出る
雪明り明日を透かしている余生
口下手に貧乏くじがよく当る
毎日のメニュー年金枠にはめ
頂上の男に当る流れ弾

倉敷市　稲田豊作

善い事が出来そう今朝の深呼吸
父老いて近頃墓を大事がる
母さんの胸に泪の壺がある
幸せな奴だよ妻に甘えてる
不意の客迎えて妻の才光る

笠岡市　松本忠三

新幹線今日が初めてだった妻
代弁が原稿ぬきでよくもまあ
引込みがつかぬそろそろ幕にしな
餅膚もすこうし年をとりすぎて
相槌の半分だけが味方かな

岡山県　嘉数兆代賀

天地みな生かし万物光り合い
年金のくらしに碧い空がある
八十の靴光らせて風五月
その日ぐらしの二人にいかなごずしがある
振り返る茨の道も花ざかり

岡山県　小林妻子

川柳の余暇で予備役勤めてる
蘊奥を極めて子育てなぞ忘れ
川底の石の丸さが羨まし
耐え抜いて見れば俺にも出来たんだ
間口だけ拡げて雲を追い続け

岡山県　千原理瑛

温い絆で胸の傷癒す
猫なで声聞くと鳥肌立つわたし
雪月花冬から春へ浮かれてる
愛はときめきか目盛りなどはなし
蛇口全開ストレスを流そうか

岡山県　松本元江

人間が嫌いになって花枯れる
脱ぎ捨てて春の陽に酔う老母の背
早春の情けは薄い花びらに
真実が宙に浮いてる四面楚歌
ほんとうのお話でしょうか三面記事

廿日市市　林野甦光

群像の中でひとつの掌を握る
わさびがほろり効いた暮らしのない不満
潔癖が裏目で群れに居座れず
結論を先に言うから皆帰り
特急の窓から気障な目に出合い

呉市　槇田英詩

私のためには太鼓が鳴ってくれません
出しゃばりで便利な人がグループに
鈴の鳴る本を飽かずに読んでます

休日の朝刊妻が読んでいる
蓑虫も蛙も地価に追いだされ　竹原市　森井菁居

銀婚の春ステップに翔ばんかな
現役の詩に生臭さあって良し
草を抜く母の気ままを許しとく

父一周忌

哀しみをファイトに変える春の磯
想い出を戻して開くエビネ蘭　竹原市　小島蘭幸

錠剤ひとつとてもおいしい水で飲む
百年経っても売れぬわたしの句を愛す
ぼくによく似た羅漢に逢ったことがない
幸福な傘が四本干してある
歯医者には明日行くことにして飲むか　広島県　藤解静風

消費者の味方アメリカかも知れぬ

たけはら四百号記念

四百号まずは祝杯酌み交わす
新市長も酒屋の倅酒どころ
菜の花が咲くと亡母が呼びにくる
雨もよし桜へさくら彩の雨　柳井市　弘津柳慶

鍵っ子も春はうれしく砂遊び
春四月ＯＢ会が重なって
平成二年年勘定をまごつかせ
ご機嫌な父お風呂場で進軍歌
おだて上げおだて上げての自治会長　鳥取市　両川洋々

札束を見ると一揆の火が消えた
天皇の恥は右翼が来て晴らす
モンローになる気の妻が化け損ね
喪の帯を解くしんみりとおんな解く
妻が今日見せぬ刃を研いでいた　米子市　小西雄々

千円を上手に使う市場籠
粘っても千手観音向き変えぬ
スピーチへ新語辞典も引いて行き
献血を終え牛乳で気を静め
たてがみをなでて励ます駄馬を飼う　米子市　石垣花子

帳尻は上手に合わせ生き残り
霧の中で病夫は一人迷ってる
死の影を妻は見えない振りをする
死の影へむかって豆を思い切り
七七もまだ来ぬ亡夫は旅半ば　米子市　林荒介

それぞれのおもいを醸す木の楽器
木の器春をそこまで呼び寄せる
白樺の肌から春が匂いだす
賑やかな筒だ仲間がたんと居る
俑の眸に魅せられてゆく深い夜

米子市　沢田千春

春風にのって舞うのは女神たち
日曜日すてきなネジを巻いておく
笛吹けば波が答える春の海
旅に出る一人芝居にくたびれて
突風も菜の花が好きれんげ好き

米子市　木村富美子

色あせた写真が語る恋の色
真直ぐに歩いた道は振り向かぬ
夕ぐれのぐちは短い詩のように
迷い道空まで続くかもしれぬ
待つ事は春を信じたから平気

米子市　茂理高代

捻くれて落ちてはならず藪椿
ストレスは溜まらぬ梨の花の家
疑いが晴れて天までのぼる凧
川柳にかけよと息子言うてくれ
春うらら大きくなってゆく心

倉吉市　奥谷弘朗

失敗を諭して許すお人柄
矢面に立つから男らしく見え
耐えぬいて出来た艶だとほめてやる
了簡の狭い主人に慣らされる
気が向けばおいでと席を空けて待ち

倉吉市　淡路ゆり子

好物の筍はもう歯に合わず
追伸に母の達者が書いてある
仲間とは時に偽善であることも
ひざ枕老いの匂いが鼻につき
平凡でひとつの指輪大切に

鳥取県　松下たつみ

茶舗ならぶここはいつでも初夏匂う
海の詩うみからもらうまで見つめ
石垣の石は哲学者の集い
麦の芽よのびるな出稼ぎもどらない
村捨てる子を育ててる教育費

鳥取県　新家完司

赤いシャツもののはずみで着ています
ダイエットメニューまるめて屑籠へ
宴から戻って元のひとりぼっち
阿弥陀さまわたしに何か言いたそう
思案して首を傾げたまま眠る

鳥取県　林露杖

組閣評片目ダルマが聞いていた
雛壇の二人官女は一度きり
しなやかに迎える古稀の針供養
七十五歳喜寿の章への句読点
敗戦を生きた女の水子霊

鳥取県　羽津川公乃

少年にハーモニカ吹く暇が無い
目を伏せる人生なんてつまらない
生き残る為には何度でも拝む

決断にゆっくり煙草ねじ伏せる
ふるさとの綺麗な川で濯ぐ恥

鳥取県　森山盛桜

空の青少女が目覚めかけている
人間の狭間で酸素欠乏症
白無垢になるまで脱皮くり反す
ひたむきな足跡がある石畳
幸せのパックが売ってある都会

松江市　恒松叮紅

杖一本置きざりにして岳父逝く
電話口袂ひっぱる声がする
後継ぎのない縁先の草の丈
貧乏に育ち厚着の癖がある
年度末の無駄で儲けている企業

松江市　舟木与根一

老齢控除をうっかり忘れかけ
老いらくも春は寝起きが悪くなり
休肝日煮っころがしが見直され
戦争も風化男も風化する
経済摩擦拳国一致を思い出し

出雲市　園山多賀子

椿ポトリ忍び返しを越せぬまま
花博を覗く予定も立ててある
春うらら見返り仏も桜花に佇つ
涅槃会が亡兄の忌となる倶会一処
肩の力抜いたら嫁が折れて出る

冬眠の蛙へ電話したくなる
やさしすぎ夫にいつも借りがある
こっそりと川に流した鬼の面
でんでん太鼓にぎる未来のゆうやくん
ショッピングすこし派手めは春のせい

出雲市　吉岡きみえ

無人駅ほんとに列車来るのかな
よもぎ餅戦中戦後を又語る
使い捨て車自転車親も捨て
花言葉探して便り参らせる
敬老会チークダンスをせがまれる

鳥取県　小砂白汀

鬼百合も咲かねばならぬ五月かな
フルムーンなどと吃驚させるなよ
車庫料だ検定料だ罰金だ
まだ生きて居たかと肩を叩きあい
大物はちらり背鰭を見せただけ

島根県　西村早苗

がむしゃらにリンゴを噛んでる仲たがい
ゆるい歩の二人つつじの白が咲く
かたくなな蝶は生花のほうをとる
春風が飛ばしたまんまのあなたの名
古狸一肌脱がす良い話

島根県　堀江正朗

灯台の灯りの如く点字打つ

苦労かけどおしの妻のいい寝息
小雨しとしと昔話の間をつなぐ
手さぐりの僕にも桜酒とろり
見えた日を点滅させるのは軍歌

島根県　堀江芳子

ここかしこ翔びたつ春の声がする
冷凍魚も故里おもう目をしてる
影法師あなたも涙ためてるの
くす玉を割る日とてなき句に挑む
なんで嫁姑をドラマ敵にする

島根県　小田川智重子

春風に誘われ花粉を吸うてきた
甘酒の好きなお方とティータイム
嫁さんの望みで三代同居した
風向きに洗濯物も嬉しがり
快方に向いたか病母の愚痴が出る

島根県　松本文子

再婚の話へ塩を撒いておく
地味を着て平均年齢ぐらいまで
一日がマンガのようにめくられる
ふっと息かけてマニキュアぬり終り
怠け癖人が嫌いになったりして

今治市　越智一水

水温むそこから人の影動く
春の陽射す農家の障子まぶしすぎ
風の音耳をすませば風の歌
悠々自適うらを返せば明日がない
初孫よ大地はだしでそら歩け

西条市　片上明水

廊下から替わる女中の足の音
避ける場の無いどん底は風が吹く
前進のための足踏みらしく見せ
欺された顔も一緒に笑い出す
眼鏡拭くこれも一つの策なれば

福岡県　横地正好

すし詰めの話みやげに都市の旅
オゾン層壊すフロンを軽く押し
癖のある草書に借りる皆の智恵
売らんかな記念切手に飽きが来る
汗売った身なり感謝で汗を買う

諫早市　原田メイシュン

見る程にわからなくなる前衛書
ホステスの笑顔にほれてるかと思い
ジャンボくじ政府に献金するばかり
つぎはぎを着た百姓が見あたらず
窓口の笑顔に文句つい忘れ

唐津市　田口虹汀

ひょうたんの夢は一人でそっと開け
八十でシュガーカットの世話になり
菜の花の魅力蝶々眠くなり
泥臭い中が花だよ議員さん
菜の花がお膳に上る京の宿

唐津市　山口高明

エンジンが唸り早乙女出番なし
駅長の挙手に北満想い出し
年下の男が好きと聞かされる
もう少しゆっくりください匙の粥
盆栽を愛でてる側で編む毛玉

熊本市　永田俊子

不眠二時間脳細胞が減ってゆく
あなかしこ一匙の粥に天地人
上を向くことに疲れた君子蘭
抽斗に嘆きを溜めるイエスマン
晩節をつらぬき通す梅の花

十和田市　斉藤劣

干し餅を噛むと津軽の子に還る
移り住むバスの色にも馴れて春
懐の芽は出たが若者見当たらず
自らの重さ抱きつつ倒れ花

弘前市　真喜内實

春風にへそくり勇み出てござる
雪消えて夫のひとこと消えませぬ
春が来て出稼ぎに出る雪女
バラ組の恋人も来るひな祭

五所川原市　加藤彩人

出稼ぎへ発つ人送る人無言
老母と子を雪にゆだねて村を発つ
春くれば白鳥発って父還る

汽車よ飛べ故郷の土が待っている

弘前市　小寺花峯

ポスターに笑いを返し朝を行く
その女の薬指には隙がない
女ごころ捨ててしまった厚化粧
娘から貰ったチョコが恐ろしい

静岡市　渥美弧秀

風邪の熱ロマンスとおく遠くなる
孫と弾く〝愛のよろこび〟五月雨るる
風邪の床ラジオと過す春隣

故恩師を偲び

吾が胸に師が生きている遺作展

静岡県　薗田獏沓

天候不順香奠袋減ってゆく
偏差値で抜け出て友と遠く居る
鍋の蓋みな開けて見る妻の留守

父の死

事務的に赤線引かれた保険証

名古屋市　大林曲ん手

やや惚けて同期のさくら一人去り
間引してほうれん草が嬉しそう
清潔な妻物干しにいつも居る
老いさらばお花畑へ蝶がくる

羽咋市　三宅ろ亭

有為転変この目でしかと見届ける
荒天の日静謐と墨書する

一隅を照らす懐中電灯を買う
世の中に面白くないのが幅効かす

七尾市　松高秀峰

観念をさせた無心の子の笑顔
両親と似ても似つかぬ嫁で泣き
二十一世紀担う若人入学式
こころでもいく度も辞表書いている

大阪市　中西兼治郎

ヤーホーとまだ籠が行く映画村
富士山にたなびく雲があってよし
公園で目を伏せ受けたプロポーズ
年金があって仕事に実が入らず

大阪市　江城修史

駄馬生きてひずめの跡も残せない
ボケてない証に暮しの詩綴る
心病む都会に生きて想うこと
妻がいて子がいて三食たべている

大阪市　黒田真砂

夢未ださめず沈丁花が匂う
春一番私をためす風の音
春と共に駈け足でくる良い話
不揃いの値段林檎の知らぬ事

大阪市　井上白峰

押せば退く妻が呼吸を心得る
どん尻も首席も同じ大学出
初化粧女自立の火蓋切る
点と線だけで終ったバスツアー

大阪市　町田達子

古墳の雨貴人彷彿として煙る
鬼瓦小言聞いてる雨宿り
そろそろとらしさ大事に絵を描こう
年金の枠を忘れた目が肥える

大阪市　冨岡温子

平成へまだ前例が破れない
好物が同じで楽し夫婦箸
残された時間へ期待大きすぎ
気付かない振りを装う義理の仲

大阪市　渡部さと美

思い切り泣くには軽い羽根ぶとん
素足から砂にストレス吸い取らせ
砂風呂の指宿ふかしいもにされ
つの欠けて夫婦げんかも弾まない

大阪市　松永すすむ

風格のある猫だった緑の目
盃へ鬼がそろそろ動きだす
夢を買う昔噺がおましたな
古里の匂いだんだんうすくなる

大阪市　神保拓生

祝辞読む代理の声は得意そう
割り勘で消費税分取り忘れ
なんべんも子を叱りつつふとん干す
実る日をひっそりと待つ藪つばき

堺市　柿花紀美女

好きだったキャスター鮮度落ちてくる
亡父匂う蔵書の中の花栞
子の華燭終えて古家で二人酌む
縁日で買った金魚も子も育ち

和泉市　岡井やすお

老人が老人に席譲る景
大病はしたが大過もなく老いる
梅だより五分で出掛ける老夫婦
労わられ労わり梅見車椅子

豊中市　上田登志実

現状にインフレ掛けて知る余命
行き先はもうわかってて慌てない
自由とは考えようで不自由ね
ブラブラと手ぶらで歩く春の街

豊中市　一瀬福一

知識人のもっともらしい講話きく
目から目へ言葉が移る遠い耳
誰とでも握手がしたい皇太子
一坪の庭にも春の芽が動く

豊中市　辻川慶子

猫も座し猫の破った障子貼る
砂時計くるりと過去を裏返す
スイートピーときめいたのはもう昔
熟年の恋はしずかに加速する

吹田市　茂見よ志子

とんちんかん夫婦の会話通じ合う
我儘にしたのはあなた優しすぎ
拗ねたとて可愛げも無い老いの背な
雨雲の過ぎる待つ間の無駄話

茨木市　堀良江

好奇心だけはまだまだ年取らず
小さな足この一歩から行く人生
亡き友の声聞いたよう通夜の道
花博は近し土俵は今日も花

守口市　野呂右近

人情も話題も拾った過疎の旅
風邪で寝る妻の気儘は許しとく
風邪熱が言わすか今日の妻とがる
参加する意義知り応募する愚作

守口市　森川まさお

低い軒の下でほうばる草の餅
ちぎれ雲やっぱり日本の旅はよい
壺焼が並び潮風重くなる
八朔の苦み対岸波が立つ

岸和田市　原さよ子

花を置くただそれだけで春の部屋
半額という字に弱く無駄を買う
毛氈に夜桜散って花惜しむ

きしせん句報三百号

三百号待たずに恩師逝き給う

岸和田市　島崎冨志子

もて余すひまへ仕事は片付かず
六十路きて職場の椅子のきしむ音
旅に出る娘家族と春を見に
古希還暦夫婦二人の祝い膳

岸和田市　芳地狸村

先頭は足弱さんの山登り
幸せを運んでくれたコーヒ店
素うどんの素朴な味を愛してる
雑草も哀れに思う庭掃除

岸和田市　岩佐ダン吉

ロボットもカロウシの日がきっとくる
地上げ屋にもふる里きっとあるだろう
河川改修蜆の意見聞いたのか
うらめしい眼と出合う活造り

八尾市　山下美津留

泣く子より親がつかれた遊園地
馬に乗る銅像さぞや偉い方
一ぱいの猪口で目出たく妻は酔い
石一つ投げて波紋を確かめる

八尾市　宮崎シマ子

妹の死（二句）

梅の香を挽歌に逝った妹よ
かつぎ出す柩へ白鷺の沈黙
鳩の数が増えたと思う春の寺
留守電話なにも聞かずに喋るだけ

富田林市　片岡智恵子

身内なら頭の痛い寅次郎
二十四時間好きに振り分け孤独なり
幼な子の指で夢追う千羽鶴
愛あればすべて良しとは幻想ぞ

富田林市　松本今日子

入院の話に茶柱立っている
都合よい風を吹かした天の邪鬼
カルダンのヒールに踏まれた白い足袋
雲のある景色になって行く車窓

寝屋川市　江口度

試歩の杖蛙ぴょんぴょんついてくる
難局へ貧乏ゆすりとまらない
月曜の朝花を売ってる地下出口
妻の友みんな大きな家に住み

寝屋川市　堀江光子

慰謝料がきまって猫を飼いはじめ
デパートの横に老舗という暖簾
恙ないこと何よりの誕生日
石仏のいわれむかしとある許り

寝屋川市　平松かすみ

母の日の五月は亡母を懐う月
花博の蝶はあなたの化身かも
二冊目は花と語りつ朱印帖
絵日記の雲はいつでも母と子で

桃の花紀子さん雛をお待ちして　河内長野市　植村喜代
足跡を雪に残して隣まで
人生それぞれ崖に咲く水仙
寺よりも花を見に行く寺参り　貝塚市　行天千代

雛まつり外孫ももう大学生
花博へ行きたし腰痛なおらない
歌手の声音痴にきこえる補聴器で
山程の重荷もおろし今の幸　大阪府　坂口公子

春だなァじっと見てたい糸柳
小布色々私の過去と仲がいい
とぼけ上手で四季を通じて丸い風
真実は地獄で鬼に打ち明ける　京都市　山本規不風

混線の受話器真面目な受け答え
紙引いてゆっくりメロディ聞くトイレ
春が来て新宗教とかが踊り出す
魂が喜びますという宗教　神戸市　仲どんたく

啓蟄の歩行者天国虫と人
スピーチは完全無欠のカップルとし
再生紙二度の勤めの味を知る
白鳥がポーズしている水鏡　宝塚市　丸山よし津

保安帽返し無事故で退社する
留守番電話へ用件を言うあほらしさ
角砂糖働き蜂も羽たたむ
後ろ姿は負けた形になっている　西宮市　秋元てる

贈り主はどなた静かにぼたん雪
どんな時も海はやさしくそっけない
灰汁抜けた顔も揃えば盛り上る
コーヒーは冷えて一人は汽車に乗る　姫路市　大原葉香

流行の移ろい年寄り置きざりに
爪切った日に甘栗をすすめられ
大空をカンバス神の見事な絵
車いすだが日本人の一人です　奈良市　天正千梢

鳳凰堂の影定まらず池の面
給料日機械に使われている仕事です
七十を越える仕度に灸をすえ
コンプレックスへ物差しかえてみる　奈良県　長谷川春蘭

狭ければ狭い工夫の雛飾る
老いてなお幼友達つくしの芽
春浅し制服ぬぎし娘の素顔
一鉢の春蘭ひそと咲き初むる　和歌山市　細川稚代

男なら強くおなりと事やすう

こだわりの石もだんだん丸くなり
キラキラと島の瓦はよく光る
歳月がお下げの昔なつかしむ
和歌山市　松原寿子

熱い胸に涙の相手してもらう
恋いこがれガラスの器ぬけ出せぬ
結び目のひとつ覚悟の愛が棲み
胸釦はずして風を受け止める
海南市　三宅保州

お互いに昼寝が好きな倦怠期
満腹になったらお手はもうしない
野次馬にまさる見学者はいない
地図にない道を選びたがる息子
和歌山市　寺田裕美

日本と言う風船をつつきあい
流れ着く浦が哀しい雛のかお
アメリカの手が伸びてくる台所
充電は老母の茶粥があればよい
和歌山県　天満三千代

四国遍路今日満願の春日和
早朝の空気へのった鐘の音
仁王さんを見つめていると笑いそう
栗林公園袈裟も白衣も脱いだ人
岡山県　荻野鮫虎狼

魂の無いワープロの字がきれい
遮断機をくぐった犬は通り過ぎ
やっと根を下ろせば移動の春が来る
年金の僕等に遠い春の音
岡山県　二宗吟平

身を削る思い付き添う子の病
パス通知父の銚子がまたふえる
ダムの底友の先祖へ手を合わせ
病み上がりまたワープロの虫がつき
岡山県　岩道博友

戦の終章喪服が掛けてあり
時間待ち同じ病名らしく言う
干魚になっても目玉は固い意地
追伸で本文判らぬ意味にする
岡山県　矢内寿恵子

つくしんぼ春の宴の三番叟
陽が溢れ情けあふれて過疎の四季
したたかに伸びた枝から背かれる
反省をしてます白紙を敷いてます
岡山県　山本玉恵

生かされて花の雫の仏道
かたくなに孤を守り抜く白椿
美しく老いる話をする美人
よろこびを分け合う人ありがとう
岡山県　池田半仙

古いこと記憶近況直ぐ忘れ
一合を飲むのに肴たんといり
悪い事してない僕で不信心

楽隠居時間あるのに句が出来ぬ

竹原市　岩本笑子

立ち止まると春の香りに包まれる
花言葉貴方は信じないけれど
歩き始めた君よすばらしい愛を
税金を納めて青い空を見る

広島県　田村新造

ぐい呑みが気に入りうまい酒になり
バレンタインチョコより酒の方がよい
にごり酒飲んで左遷の身を嘆く
早春の海トンネルで見え隠れ

宇部市　平田実男

小刀で削り鉛筆喜ばせ
国後で日本の歴史耐えている
仲裁が帰ると傾くヤジロベー
ねじれ現象が国にも我が家にも

美祢市　安平次弘道

澄み切った瞳に偽善者が裁かれる
バカになることを知らない喉仏
定石をおぼえ独創性が消え
米びつを覗いて敵に乗じられ

鳥取市　小谷美っ千

初雛に健やかなれと母になる
情の川をたどると母の海に出る
思春期の娘に見せられぬ難破船
沈丁花咲くのに暖炉離れない

倉吉市　渡辺独歩

うっかりと水玉ネクタイ買っちゃった
相続税屋根で梲が思案する
浅はかと片眼達磨が泣きやまぬ
烏滸がましトイレ日本一の街

倉吉市　渡辺菩句

僕が乗ってる雲と歩調合わしてる
テレビから節分の豆飛んでくる
馬の目にうつると馬の骨の僕
もうひとりの僕におでんにしましょう

倉吉市　野中御前

菜の花の黄色に酔うた小半日
アイクチを隠しもってる週刊誌
みやげ話に露天風呂にも入っとく
鳳仙花はじけて其の後わからない

米子市　林瑞枝

野は萌えて小鳥も恋のルージュ引く
ハンカチを敷くと昔が追うてくる
ベルばらの歌青春を噴き上げる
ベルリンの笑顔が見える地平線

米子市　青戸田鶴

狂わないように私のリズムもつ
切り札がなくて堂々めぐりする
拝んでもどうにもならぬボケ進む
咳の鞭おごり心をいましめる

笑い袋そろそろしめて旅終わる
終章は花敷きつめて寝るつもり
塀ぞいに八雲歩いた道をゆく
私の席母はいまだに温める

米子市　田中亜弥

裏山が父隠したに相違ない
眠そうに念仏唱えている他人
冬晴れは不幸な物をみな隠す
鶴の誇りをわたくしが傷つけた

米子市　政岡日枝子

シャボン玉私の息が空を飛ぶ
父の背が大きく見えた反抗期
月が出ているので桜眠れない
夜桜に袴姿を置いてみる

米子市　菅井とも子

庭の隅もう雪柳打ちとける
花の下翔んだ話がよく弾む
息抜きの切符はいつもふところに
風みどり眼鏡を夏の枠にする

米子市　光井玲子

おばあちゃんが春の小川を歌い出す
今すこし芯の迷える昼の月
純情になって奥さん芋を焼く
花暦うつらうつらと生きのびる

米子市　小村てい子

その深さ知らずに木の葉舞い降りた
くちまねの上手な鳥に遊ばれる
寝たきりの老父にもさくら咲く話
音声をおとして風邪をいたわられ

米子市　寺沢みど里

とりあえず抹茶を飲んで今日の事
わたくしの周り先生多すぎる
胃袋の近くに花を植えておく
杉村春子女の彩が香り立つ

米子市　金山夕子

猫ほどに素直に寄れず花の下
一人では魂魄奪われる桜
花の下少しはずして火の噂
たんぽぽの絮より軽き旅の夢

米子市　川上より子

もう余生でもまだ余生夢を持ち
こわれてもまだまだ飛ばすシャボン玉
もう一度青春しましょう六十歳
愛と憎ぽとりと落ちる紅椿

境港市　細木歳栄

僕のうちは裏口がありません
お天気の日は観音へ命乞い
ボヘミアンの僕にからまる豆の蔓
春になると家を忘れることがある

鳥取県　江原とみお

雑踏の中で哀しみ増してくる

鳥取県　川崎秋女

温泉の街の十階で見る春景色
温泉の宿で老いの乳房が笑い出す
ヨイショヨイショとこの頃夫が口ぐせに

鳥取県　さえき　や　え

合格のしらせ孫よ涙をありがとう（孫　大学受験）
去らぬ冬芽は空想をこえて出る
七七忌梵字に蝶が舞いまする
川柳で心ゆるせる友が出来

鳥取県　津　村　八重子

開拓の二世祖国の夢はるか
パラソルの屋根で牡丹は粋に咲く
減反に落穂ひろった日を思う
催促をすれば忘れた顔できき

鳥取県　乾　喜与志

救急車で入院（二句）

病んでからお面いらない顔になり
あご髭が一度に白うなりにけり
八十過ぎても旅行保険をかけ捨てる
新築をした五十年目の住所

鳥取県　土　橋　はるお

短い脚に似合うわらじをはいている
貧乏神に一言多い癖が出る
先生にすらすら読めぬ本もある
センベ布団の寝言を聞いてやっている

鳥取県　田　村　きみ子

キュッキュッキュッ洗うとコップ笑い出す
水着の夢もう見ています夏が好き
ライバルに五歳の孫も入れている
大正琴玩具と思い買って来た

鳥取県　谷　口　次　男

山見れば削りたくなるニホン人
粗大ゴミやがて車に乗せられる
南極の氷がとける悪い夢
裃を脱いだ途端に友ができ

松江市　柳　楽　鶴　丸

未熟者だから喜びが倍になる
最高の腐れ縁は妻である
興奮をすればカチカチ入歯鳴る
竹光だから思う存分にあばれ

出雲市　板　垣　夢　酔

じいちゃんの頑固が孫に通じない
救急車音悲しみを撒いてゆく
翔ぶ姿勢しては落胆するアヒル
事故記事を見ろよレジャーのはしゃぎよう

出雲市　金　村　青　湖

見たらすぐ焼いてと杳（とお）い日の手紙
水平線日の出月の出夢はぐむ
飽食の果てに喰い花喰える昆虫
遍歴のおわりを飾る鯨幕

出雲市　石　倉　芙佐子

すこしずつ私の夢も花ぐもり
横顔が尖って写る窓ガラス

削るだけは削ってみようおかめの面
山が動いて風の動きが変りだす

出雲市　竹治　ちかし

夢多き娘に明日がある長い髪
子に残す地球は丸い星のまま
他人気にしてから歩調狂いだし
冷静になれば笑って済ます仲

島根県　錦織　文子

肌うるわしく細目美し明治雛
久しぶり百人一首の恋の歌
熱下がり四五日遅れの日記書く
どの手にも雨水受けて七地蔵

島根県　石田　清泉

黄金が天上で右往左往する
うかうかと人の噂に乗っている
無為無策秒針の音胸をうつ
ワープロで下意上達は望めない

島根県　北川　民子

いつからか要らなくなったコンパクト
イソップの話もできぬ孫遠し
ガラス窓小さな手型に春光る
春が来てそっと図鑑の花言葉

島根県　藤原　鈴江

捨て切れぬ欲に生命を支えられ
同窓会長生きしようねばかり聞き
愛したは貴女だけなんて喜ばせ
逢いたくて窓辺に寄れば満月の

島根県　松本　はるみ

我田引水総理うろうろするばかり
天気予報大きな自然にまごついて
古里がここにもあったおきな草
花束をひとつもらって嫁にやり

香川県　松村　迷観子

折返しまではライトを浴びていた
病から逃げれば病追って来る
幸せと思う看護の夫がいる
一票の重さしみじみ負け戦

松山市　谷　真風

ひとまずは押えつけとく腹の虫
速達は着いたか電話かけてみる
傘さしてまで行く用はない菜種梅雨
誕生日トイレの花もかえてくれ

今治市　矢野　佳雲

風邪ひいていますとむこう向いて寝る
試みにかけた老眼鏡があい
会いにゆく気持ちをためす雨になり
青空のどこらが隙か雲が湧き

高知県　赤川　菊野

エアメール干支の切り絵の年賀状
悪女にはなるのはたやすい事ながら
外人のずうずう弁にある人気
またノーと言えず重荷を背負ってくる

唐津市　浜本義美

裸木の一樹が目立つ戻り寒
春は未だ旅館の厨魚干す
蕗のとう十二単衣を脱いでみせ
死に度いと言いつつ飯は三度喰い

唐津市　浜本ちよ

昔々着た服今もよく似合う
山登りの如蛇行ばかりで年古りぬ
置き薬老人保健ありながら
タクシーはほろ酔い機嫌で乗るが良い

唐津市　筒井朴竜

初詣で妻の快気へ鈴を振る
強弓に鏑矢番う鷹矢羽根
禄高が交通保障を差別する
七転び八起きへ蜂が刺す皮肉

弘前市　村田善保

風化した過去美しい未来像
手作りの壺にロマンの夢を活け
いささかの救い病室花一輪

静岡市　安本晃授

人生の一齣渋茶でも飲もう
母の絵はどんな彩にもよく染まる
まだやる気鏡に僕の理想像

大阪市　北山悟郎

冗談を医者石切さんの御蔭だと
仕残した仕事何か有る死を見つめ
法治国抜け穴見つけぬくぬくと

大阪市　冨上光代

人生を卒寿から聞く花の下
火事見舞されて火事など知らずいる
怠けたと見抜く順位を恐く視る

大阪市　坂本仙吉郎

割り込んでみたが車外へ押し出され
雪の道播磨の奥の伊和神社
新しいトンネル抜けて銭とられ

大阪市　大野武太

晩年の誤算亡父の轍ふむ
老いがきて天真爛漫とは哀し
手づくりで名刺がわりと言う句集

豊中市　吉田あずき

種明かししてはならない母の愛
魔女が杖振ったか春の野の緑
豪邸の鯉が一番風はらみ

藤井寺市　福元みのる

無職でないフリーアルバイターなのだ
卒業は出発なのだと言い聞かす
落書きと誰しも思う大家の書

西宮市　瀬尾六郎太

還暦だ真価問われて動と静
レトロ調ひときわモダン見えるわね
お父さんボケの徴候ホラこれも

姫路市　中塚遊峰

朝毎の灯に三巻の般若経
心配を忘れば治る我が病い
楽と苦を五分五分背おう我が六十路

姫路市　丁坪サワ子

合格へ神様お役御免です
駅弁めぐり鈍行旅の好きな嫁
吾が子には何故か曇ってくる眼鏡

奈良市　米田恭昌

警官も人の子私服でポルノ見る
小指出しおかげで馘とテレもせず
賃上げの要求しない招き猫

和歌山県　岩崎瑞穂

デタントへ鉄のカーテン影うすれ
鉄面皮汚職も顔出す組閣劇
標準語ペラペラあの娘里帰り

和歌山県　西口忠雄

児とじゃれる猫踏んじゃった踏んじゃった
まだ新芽出すよな顔で妻が寄り
Gパンは男をだます女を騙す

岡山県　直原七面山

人生は絢爛華麗な底に修羅
独り来て祭囃子の浜に立ち
古本屋で師弟にっこり笑み交し

岡山県　花田たけ志

雪だるま歩いて行きたいとこがある
株上下かかわりの無い身も哀れ
たたかった半生哀れうさぎ小屋

竹原市　信本博子

水溜り捨てていきたい事ばかり
平成二年幾つ渡るか水溜り
水溜りへ道草少し風小僧

出雲市　園山良子

年追って神の石段高くなり
デパートでカードが喋る氏素性
消費税加えてねだる子の粘り

出雲市　久谷まこと

新築の柱で出来ぬ丈くらべ
本心はどうあれ笑顔くずさない
心電図おどしを一つかけておく

出雲市　小白金房子

鍬さげた手に生き甲斐の花ばさみ
藁屋根が見事絵にする春の雪
初年金神仏たむける花を買う

高知市　北川竹萌

花吹雪追い越し好きな先行車
ここらから我が里に入る茶の香り
浜松基地県人会に迎えられ

唐津市　仁部四郎

八方に味方四方に敵がいる
名優の笑み八方にすきがない
ふところに辞表四方は花吹雪

自選集

大礼へ血は滔々として透ける
こけそうになってみっともなくすがり
昨日から明日へたばこの火をつける
雪のせる竹大観に語りかけ
日本の駅に方谷さんが居る

水粉千翁

眉の根に祖国を捨てた影があり
学力の差では抜けないものがあり
自惚れを少し鏡から貰い
手探りで皆生きている顔の皺
女房に脱ぎ慣れている兜かな

有働芳仙

一票を投じて民主主義守る
同じ屋根の下にも保守と革新と
天の下地の上人がいて貧し
亡妻よ亡妻よ亡妻よ亡妻よと恐山
泣く者が笑い笑った者が泣き

工藤甲吉

同姓同名よくも揃うた電話帳
竹光をさも重そうに振るも芸
旅プラン子らの意見を七分入れ
今に見ろ駄馬には駄馬の夢がある
恰好な広場見つけた草野球

本田恵二朗

さっさと歩かんと老化が追ってくる
大手は大手の厳しさで世を泳ぎ
もう十坪欲しいと思う設計図
逃げるチャンスも知っているずるさ
宿命に引き回されて歩く道

金井文秋

年齢の順でなかった死出の旅
不透明な世だが惜しみなき今日を生き
孝行を金に換算して他人
安心は心の広い嫁がいる
受話器持てば何時も喋っている妻で

大矢十郎

ああそうか雨が漏るかと寝てしまい
野放図を笑うて許すほとけたち
ひとことが気つけ薬になるのなら
賞められると思い違いをして困る
晩年の僕を支える仏たち

久家代仕男

やけくそになってる人へさくら咲く
しあわせの予感を抱いて寝るとする
仁丹を五　六つぶ飲んで眼鏡ふく
すぐ解ける謎を大事にしまっとく
ざらざらとしてる真珠の舌ざわり

正本水客

玉砂利を踏む感触に春拾う
祝われる母主役にはなりきれぬ
コーヒーを濃い目原稿書き急ぐ
末っ娘を嫁かせた空虚酒で埋め
気が張っているから涙など出ない

小林由多香

絵ごころへ山の息吹きが納まらぬ
しあわせも不幸もまかせ切って白
残したら駄目お野菜食べなさい
難しい話は横に置いて飲む
完熟のうま味ゆっくり喉を越す

遠山可住

「回り道」という店あり回り道をして寄る
後半は若者主役の披露宴
お隣の分まで妻はよもぎ摘み
茶席から帰れば足を投げ出して
無位無冠になりぶくぶくと太りだし

野田素身郎

峠に着いたら二人で餅をいただこう
ほんの少し皿を汚してさくら餅
血のうすい掌に桜もち乗せている
絵の餅かほんとの餅か見きわめる
やはり餅屋の餅で納得させられる

八木千代

連休のプラン若さに押しきられ
美声もつ自信の顔がにくらしい
碁仇の時々悪友になっている
行楽へ家族の声がこだまする
自分さえよければ世相乱れすぎ

藤井明朗

他人様の悩みでもめてるお人好し
五月には五月の花と風に触れ
いつまでも夫婦が春のラブコール
気がかりな噂を覗いて春の風
積木積むもう少しだけ積むつもり

児島与呂志

男坂つま先登りの七曲り
言い訳をするからうたぐる妻の目だ
つじつまが合ってるきっと嘘だろう
騙されてくれた女の愛だろう
なが生きの知恵を少し貸してやる

岩本雀踊子

なに気なく石をおこせば芽のもやし
またたきをしてローソクのご臨終
春一番ボートは腹を乾している
よく見れば僅かにまわる観覧車
豌豆の芽が覗きだす脱脂綿

月原宵明

烏瓜今は住む人絶えてなし
国境の唄が好きなり叔父と呼ぶ
更年期謀反を起こすこともある
早春の花のはにかみ見てしまう
童謡も演歌も好きな風呂加減

波多野五楽庵

あまりにも閑か拉麺音たてて
山霞むしばらく行方晦まそう
過去を曳きずる丸い背ナまるい背ナ
日本の美　屏風絵の竹撓う
人間の意識を超えてくる響き

野村太茂津

投票がすんだら笑顔消えてゆき
許すことばかりが続く母の海
祖母の袋に数珠とあめ玉いつもある
山びこの空は答えぬままに澄み
つつましい笑顔苦労は言わぬ姑

藤村〆女

本音しか言えず七十四もなって
齢だけは長老　今日生かされて
再入院ピカピカ靴を光らせて
だまりこくった妻の涙には勝てず
一件落着　奥様はご寛大

山内静水

孫曽孫と笑いの絶えぬ日を送る
菜の花が見え出し里が近くなる
飛行機を渓みながら鯉のぼり
返事しているのにでかい声で呼ぶ
まだ恋をしてます籠の鳥でない

黒川紫香

幸せと思うポストの近いのも
木の芽和えその夜夫婦にある会話
うぬぼれて筆を一本買うている
寝仕度をするかけがえのない時間
髪セットするほどのこと何もなし

小出智子

医者もわたしもいのち一つへ手を繋ぎ
負を背なに桜樹の下の犬なりぬ
めだかはめだか群れを離れてひとり往く
人は老いて一夜一夜を追いつめる
長生きをしてすみませんお母さん

高杉鬼遊

口うるさく妻ことごとに齢にふれ
色気ない姿で老妻爪をつむ
背伸びしたつけか株価がまた下る
バードウィークさりとて困る鳩の糞
天王寺さんにチンバひいてる鳩がいた

阿萬萬的

花博と一緒路郎師句碑除幕
爪に火を点した話馬鹿にされ
喋ったらすっきりしそうな内緒抱く
身の証したっても口惜しさだけ残り
家空にしといて隣のお留守番

西田柳宏子

チャレンジ魂心残りのないように
宿酔の目が浮いているしじみ汁
一歩引き下がってきたら要注意
ピーナツをほうばりながら求人誌
枝ぶりをほめれば松は胸を張り

河内天笑

京都市交道局　交柳会
創立40周年記念川柳大会

と　き　**6月10日**（日）
午後1時開場　同2時締切
ところ　本能寺文化会館（河原町御池西入ル）
事前投句「電　車」　吉村エース謝選
投句先　〒610-01　城陽市寺田深谷8-58
中林酔虎
締　切　**5月15日**

宿　題
「おまえ」　中林　酔虎選
「　情　」　上島みゑ子選
「わらべうた」　北沢　尚子選
「乾　杯」　高須賀金太選
「リズム」　土田　欣之選
「押　す」　上田　斗六選
「　舟　」　玉野可川人選
◎各題2句（欠席投句拝辞）
会　費　1000円（記念品・発表誌呈）
主催　京都市交通局交柳会

第12回 津山川柳大会

と　き　**6月3日**（日）
10時開場　11時半締切
ところ　津山市総合福祉会館（JR津山駅）
会　費　1000円（発表誌呈）
お　話　一枚の会　定金冬二氏
兼　題
「硝　子」　井上　虎風選
「　家　」　墨崎　洋介選
「人　形」　石田　寿子選
「　地　」　梅崎　流青選
「　母　」　北村　泰章選
「響　く」　野村太茂津選
「　毒　」　保木　　寿選
「　水　」　安藤まさ代選
「狂　う」　久保田寿界選
「　蟻　」　墨　作二郎選
◎各題2句（欠席投句拝辞）
主催　津山市教育委員会

川柳太平記（144）

川柳の群像

北夢之助

東野大八

「シベリアはどうしてこう寒いのかね」
「神様の思召しでさ」

チェーホフの『シベリアの旅』はこんな書出しではじまる。この作品の舞台は、サハリン（樺太）である。敗戦までこのサハリンを二分した鮭の尻尾みたいな南樺太は、日本の領有地であった。

この日本の最北端の極寒地に、川柳結社が芽生えたのは昭和二年ごろで、札幌川柳社同人北夢之助が渡樺した時に始まる。

斉藤大雄の労作『北海道川柳史』（北海道新聞社刊）は、この北夢之助の動静に詳しいので、以下この好資料を参考としてまとめたい。

北夢之助は本名智之。明治29年2月5日新潟県佐渡に生れた。父母の札幌移住により、同地の北海中学校を出たが、在学中から文学少年で地元新聞に、俳句・川柳を投句、特に川柳に関心を深め、大正六年神尾三休が川柳「アツシ会」を創立すると、最年少同人として参加。同七年夏、街道五十年協賛北海道川柳大会に井上剣花坊を招いた北海道初の川柳大会に参加したのを機に『大正川柳』に投句。同十年函館に転任すると、その頃、勢いのついていた地元川柳社「忍路」に参加、同人として活躍した。

昭和二年春、樺太の大泊に転職した夢之助は、深海小学校校長の柳人高橋遠鳴子に呼びかけ、樺太川柳社を創設した。同時に機関誌『わかやなぎ』を発刊した。これには地元紙大北新報社の印刷工加藤春人らが居たことで新聞柳壇を設けてその選者となり、川柳仲間も増え、阿部乙夜、山中鹿之助などが熱心なことから翌三年『わかやなぎ』を『犬橇』と改めた。北辺の寒冷地という生活環境と、新聞柳壇の恩恵もあって川柳熱も高まり、昭和五年には四六横綴判27頁の北夢之助句集も出した。

人生へあてる定規の右ひだり　夢之助
重箱の隅にかくれる主義を持ち　〃

樺太の夢之助は、昭和四年春『川柳人』（『大正川柳』改題）の新川柳運動の論客島田雅楽王と運命的な出会いを遂げている。

この雅楽王というのは、『川柳人』の中の新川柳運動推進グループ〝沈鐘会〟のリーダーで、そのメンバーは井上信子、三笠しず子、渡辺尺蠖らで、大正13年8月に結成された。この頃から新興川柳運動が台頭し、田中五呂八の『氷原』森田一二の『新生』古屋夢村の『彫像』などが、大正末から昭和の初期にかけ、川柳革新を目指す新興川柳ブームを巻き起こした。雅楽王は『川柳人』に拠って、五呂八、一二、川上日車、木村半文銭、喜多一兒らと新興川柳派が唱える無産派、プロレ川柳を主題に激越な論争を展開する。さすがの『川柳人』の剣花坊も、この若手の確執に手

を焼いた形である。（『川柳人』昭和3年三回連載の〝新興川柳人の資格〟参照）

雅楽王は昭和3年のこうした最中の『川柳人』六月号の〝作家管見〟の末尾に、

「この稿の発表せられる頃には、日本最北端に孤雁そのまま独り旅立つ…」

といった意味の惜別の言葉を残して『川柳人』誌上からもその姿を消していくのである。

この雅楽王と夢之助が、白樺寒き極寒の地でどのような川柳交流を行ったかは、つぎの雅楽王の足どりで推察できる。雅楽王は昭和7年大泊駅長となり、駅員らと白鳥川柳会を組織。夢之助は『犬橇』を廃刊して、『わかやなぎ』再生第一号『若柳』を昭和11年2月に発刊している。この年、雅楽王は樺太庁鉄道課長となって豊原に赴任していた。ここで彼は吟葉社という川柳グループを作っている。

こうした樺太川柳界の実勢を踏まえ、同じこの年、大泊鉄道倶楽部で「樺太全島川柳大会」を開き、37名が参集している。これが樺太における最初で最後の川柳の火となった。

昭和17年太平洋戦争は進捗し、暗い北辺の凍土は川柳どころではなくなり、夢之助の『若柳』もいつか消滅していたが、この年には雅楽王が社長となって樺太通運株式会社が出現しており、夢之助は同社経理課長になっていた。そして三年後、敗戦の樺太はソ連軍の進駐によって敢えなく日本の版図から消滅した。

引揚げて五年の住い干きのこ　夢之助

回るだけ回る命の火取虫　〃

敗戦により引揚げ、帰国した夢之助は、昭和26年新潟の柳都川柳社客員のち同社顧問。越佐新聞柳壇選者、新潟川柳クラブ会長を経て昭和49年新潟川柳文芸社会長となり、昭和54年2月16日老衰のため死去。享年82歳。主な著書には『北夢之助句集』『古川柳抄句評訳』（『若柳』誌連載）『柳の芽』がある。

平成元年四月柳都川柳社から管原孝之助編『北夢之助』が発刊された。口絵写真は三太郎、雀郎と撮したものなどに故人の染筆。大野風柳柳都主幹の序文に「北夢之助と樺太川柳社（注・北海道川柳史抄録）斉藤大雄」「北夢之助と歴史・佐藤岳俊」に、戦前戦後の夢之助作品が三部構成で収録され、夢之助語録九編が添えられた至れり尽くせりの北夢之助伝である。夢之助を師とした編者管原孝之助の熱意のこもった好編である。書家宮川蓮子の題字も秀逸である。以下は同書からの抄録。

「私は夢之助作品の艶やかさよりも、夢之助という人物の洒脱さにむしろ魅かれていった。お惚気も嫌みがなかった。夜の巷を徹底して飲み明かした。酒も、遊びも私は夢之助先生から教わったと言ってもよい。大野風柳」

「日本海に向いた護国神社の砂上、そこには巨大な坂口安吾文学碑『ふるさとは語ることなし』が建っていたが、そこへ抜ける旭町に、北夢之助の家があるのだと聞いていた。（中略）北夢之助の口から、私は樺太の消息を聞いたことがない。影のように酔えば踊ったりしていた彼の老いた姿は、現代川柳の語らぬ欠けた場であったのであろうか。佐藤岳俊」

「夢之助は人間が好きであった。川柳をやる人間が好きであった。（中略）竹久夢二に憧れ、雅号に〝夢〟を入れた夢之助は、私に〝之助〟をくれた。（中略）もっともっと夢之助から聴いておきたいことが山ほどあった。もっともっと先人達の負債を聞き出したかった。歴史という時間は、あまりにも美しさばかり残してしまう。菅原孝之助」

「川柳の風格は高雅で清韻を伝えるものでなければならぬ。俗臭の多い理屈めいた作品は、やがては自然と倦怠のときがくる—北夢之助—」（語録の中より）

★次回は「**菊沢小松園**」

柳籠裏三篇研究（三丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田甫

44　**鉢植へ渡シて水をちょいとかけ**

七久保＝鉢植は盆栽。渡しは渡船場との意であろう。渡しで船が出る間に持って来た盆栽に水をかけて、その生をよくするという景を吟じた句。

西原＝賛。鉢植を商う者が渡しに乗ったのであろう。

佐藤＝表現がややこしいので、ちょっと判りにくいが、夜店の植木屋などが、買い手に鉢を渡し、愛想にちょっと、鉢植の植物に水をかけている図。「たいして手数のいることじゃござんせん、水さえやっていりやァ、四五日で満開でさァ」

八木＝桜草を詠んだ句かと思います。

鈴木＝小生も桜草と解しています。

岡田＝不賛成。鉢植の植物は何でもいい。そんなことは問題ではない。また、佐藤君は「渡して」を「鉢植を渡す」意にとられているが、「鉢植へ渡して」ですから誤り。「鉢植を渡しで」とニゴラねばならぬ。「水をちょいとかけ」は、渡し舟のある岸でもよく、舟中でもよい。小生が不賛成というのは、「渡しで」の表現で、その渡しがどこか、また、月の何日のことかまで明確にできる。そこまで考えねば解になりません。礎稿者はじめ皆さん、もう一度とっくりと考えて正解を出されたし。ここまで書けば直ちにわかるはずです。

45　**尤至極かへさぬをはたる也**

七久保＝座頭を吟じた句である。主として座頭は按摩を主業として、彼らはこの世の唯一の頼りである金には執着心強く、かつ吝嗇で悪辣な高利貸しを副業としていた。そのような性質の人間だから、お人好しで貸し倒れされるなどは、ほとんど皆無だったろう。貸金を催促するのは至極、当然だということ。

恐ろしきしゅもくを持ってはたる也　一七8

岩田＝座頭の貸金の催促は、相当どぎついものらしく、江湖の顰蹙を買ったであろうが、しかしよく考えてみると、返さぬものを督促しているのだから、もっとも至極な事とも言える、という句であろう。

八木＝金貸し―座頭は川柳の約束、とはいうものの、あまり座頭にこだわることもないように思う。

鈴木＝賛。

岡田＝やはり座頭金が強いですね。

46　**玉多葉粉うつかりといてこまつてる**

七久保＝玉たばことは、刻んだ煙草を丸くかためて帯封したもの。一ト玉、二タ玉などと数えた。安たばこのこと。

刻み煙草を売り始めたのは、貞享年間のことで、それ以前は飲用者各自が葉を買って手刻みしていた。刻み煙草の行商があるようになってからも、宝暦年度には五分切とかいう荒刻みであった。細い糸状の刻み方になったのは、安永天明度以後である。

主題句は、その安煙草帯紙をうかつに解いて処置に困っているとこ。

玉たばこ見せるたんびにゆるくなり　二四30

佐藤＝賛。

我もまよふやさまざまの玉烟草　一〇三15

玉に疵つけて一ふくのんで見る　三八6

鈴木＝賛。

岡田＝賛。

47　**がいこつをミるやふなのが楚王好キ**

七久保＝楚の霊王は暗愚な王で、宮中の女の腰の細きを好み、それにあやかろうと官女は食を減じて餓死する者が多く出たという故事による上の好むところ下その意を迎うとの義。

楚の国で酢をひとしきり買いきらし　一七23

今も昔も女性のそれは変わらず、美を追求するあまり命をなくす例もあり。

鈴木＝賛。

岡田＝同。

48　**馬鹿亭主かかあの出るを窓でミる**

七久保＝川柳によまれてる亭主族は、全てあわれな人間として、

①女房にこびを売り、昼日中からさかんに要求する亭主。

②下女に手をつけ、女郎買いをする亭主。

③間男されて取り乱している亭主。

の三通りになる。

主題句のごときは前記の③の場合でしょう。

岩田＝自分が出かけるのならまだしも、女房が出かけるのを、家にいてぼんやり見ているような亭主は不甲斐ない、と解していました。

佐藤＝あまり深くせんさくせず、それまでの句。第三者が見れば、「何て鼻の下の長い野郎だ」と思うだろう。

出格子で女房出るを見る奴さ　安六信4

とにかく甘口の亭主を罵倒した句ではある。

鈴木＝佐藤氏の解が適切。

岡田＝川柳の馬鹿亭主は、十中の九までサイノロです。

49　**孝行は不孝なやつが女房也**

七久保＝孝行とはこの場合、貧しきゆえに口減し、あるいはまた、親の大病の人参代を稼ぐために、遊女に身を落とすこと。

不孝なやつとは、女郎買いなどばかりして、一向に家業など見向きもしない大店のどら息子。

主題句は、親孝行のために売られ、一旦苦界に身をしずめた女が、どら息子に請け出されて女房になったことを詠んだもの。

孝はしづみ不孝ははまるなり　三八23乙

孝行もしたし身請けも猶したし　三六28

岩田＝賛。

孝不孝二ツならべる塗り枕　拾七32

また、『城買二筋道』序に、「孝行に売れ、不孝に受出されとは、実に川柳点の妙なるかな」とある。

佐藤＝賛。礎稿明解。

鈴木＝七久保氏ご明解。理屈句。

岡田＝賛。

日本の最短詩——武玉川調 (二)

阿達義雄

美しい顔、あるいは「美しさ」を狙って詠んだ短句を眺めてみよう。何と言っても、男は意識的に、または無意識的に美しい女に、その心や行動が支配されがちである。ちょっとした用件でも、相手が美しい女となると、少しでも長く自分の身辺に止め置こうとする。

○美しい顔で話が長くなり（武・二）

また、特に美しい娘のお伴となれば、母親や下男などまで我が事のように得意満面で

○美しい女の供のそり返り（武・初）

だが、女が女を観察する場合の採点は、なかなか渋くて、

○女のほめる女すくなし（武・五）

とかくアラが捜し出される。

もっとも、あまり美しくては、その美に圧倒されてしまったり、気がさして、それに対して好意も示しにくいという心理もある。

○美し過ぎて入れにくい傘（武・五）

傘に入れてやるにしても、男の心では、

○傘に入れても損のない顔（武・八）

また、相合傘の二人のデリケートな心理は

○惚れた方から横にさす傘（武・一八）

その傘の柄が、どちらの方へ傾いているかということによって、どちらが惚れているかが知られるというのである。

美人薄命というが、自他共に美人であることの意識過剰から、何事も手軽では済まないようになる。幾人かの恋の対象にされては、事件の渦の中に巻き込まれ、無事には済まないし、ともすると生死の問題に突入せざるを得なくなる。

普通の女ならば、化粧もほどほどにして済ませるが、美人の化粧は念入りであり、着物、装身具のすべてが、それに伴わなければならないので、全身全霊をもって自分の「美しい顔」に奉仕せざるを得なくなり、時としては我が身を犠牲にしなくてはやってゆけない場合も生ずるであろう。

○持って苦にする美しい顔（武・一五）

他人から見れば全く羨ましい苦労であろう。婚期が遅れるというのも、その容貌ゆえに自ら理想が高くなり、適当な相手がないという結果からの場合が多い。

○男選みのいつが葉桜（武・一八）

葉桜ならまだしものこと、運が悪いと姥桜になり兼ねない。

川柳に「眼についた女房近頃鼻につき」という句があるが、

○眼についたほど鼻につく顔（武・一八）

とあり、これは前に美しいと思った点が、却って何となく嫌味に感じられるというのであろう。

○もめた娘に底倉であふ（橘中仙）

底倉は箱根の底倉温泉で、痔に効くという湯である。「もめた娘」といえば、三角関係などで町内でも問題になった娘と見られ、まず、美しい方の女と考えられるが、その名題の娘

が意外にも痔であったとは、何だか妙な感じがし、今こそ、美しい刺繍の裏を見た思いがするというのである。

この句などは、まだ若干俳諧的な感触があるが、次の長句や収月点になると、これを更に極端にしたもので、

○追ひついて見れば不断の女也（武・四）

○後から惚れて前からやめになり（雨の落葉）

後の句は、享保十八年の収月・玉賈評の句で、「わらひこそすれ〳〵」の前句題に付けた川柳的な古句である。

＊　＊　＊

江戸短句に遊里関係の句も見られるが、多くは暗示的含蓄的であって、短詩形のためか、あまり微視的な句は見当たらない。

○三人寄れば毒な夕ぐれ（武・初篇）

○傾城買ひの内のなりふり（武・三篇）

前者は、若者が夕方三人寄ると、碌でもない相談ばかり始めることを言ったもので、後者は遊里に繰り込む時に、随分めかし、通だの洒落だのときめ込んでいても、家庭では貧寒な身なりをしているのが一般だということである。

○夫の惚れた顔を見に行く（武・初）

付き合いと称して、時々吉原へ行く夫、その夫がどんな妓を好んで揚げているかということは、女房の重大な関心事であったようである。江戸川柳にも、「どんなのへ行くへと女房聞きたがり」という句がある。この句は、秋の燈籠見物の時などを利用して、女房が夫の惚れている妓の張見世を見に行くという句であり、安永の頃の句にも「燈籠見に愚痴な女がぞうろぞろ」とも詠まれている。

■ずいそう

白河夜船

布施幸子

紺色木綿の筒袖に、紺がすりの前だれ。紅たすきをかけて足もとは白い脚絆。

あねさんかぶりの頭上に色とりどりの切花をのせ、「花いりまへんかあ」と売り歩いた京の白川女の姿もめったに見られなくなってしまった。

広辞苑の『白川・（白河）』の項に、

〈京都市の北部鴨川以東、東山との間の地域。むかし白河殿、六勝寺があった所〉

と記されている。つまり地名である。

手もとの小さな辞書には『白川』の語はないが、『白川夜船』は出ており、

〈熟睡して何も知らないこと〉

と記されている。

京都を知るふりをする者が、白川のことをたずねられて川の名と思い、「白川は夜船で通ったからわからん」と答えた話が、『毛吹草』という俳諧の手引書の中にあって、それから生まれた連語である。

だが、白川には〝白川〟と名のる川も流れている。ただし、物見遊山の船など通せない小さな川である。

銀閣寺の北東、志賀越えの山中から流れだし、吉田山の麓を通って疏水へと注いでいる。白川女はもともと、この白川の上流で、志賀越えの旅人らに花を売ったのが始まりだといわれている。

吉田山麓を中心とする一帯は、白川石という花崗岩の産地で、その風化した砂が傍を流れる川の底に白く光るカーペットを敷いていた。『白河』の地名の起こりであり、その辺

は古くから花や木のよく育つ美しい土地であった。

白河天皇は、この地がいたくお気に召し、御殿を定め、皇室の御願寺として法勝寺を建てられた。法勝寺は、今の岡崎動物園がその半分という大きな寺で、まさに花の都にそびえ立つ結構善美の名刹だった。

法勝寺につづいて、尊勝寺、最勝寺、円勝寺、成勝寺、延勝寺が、代々の帝や妃によって建てられた。勝の字のつく六つの大寺は、総称して「六勝寺」とよばれていた。その跡地が、平安神宮の南に接する約十万平方メートルの岡崎公園である。このあたりは京都を代表する景勝地、花の名所として文学作品に登場し、白川は全国でも指折りの高級住宅地になっている。

さて、白川夜船（白河夜船）とは、京都を知らぬ者が知ったかぶりをした話であるが、京都に住んでいたくせに〝白河〟を知ったかぶりした話も伝わっている。

「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」

と詠んだ能因法師（九八八―？）である。

この歌の白河の関は、奥州の入口にあった関所だが、能因法師は家にすっこんだまま、想像でこの歌を作り、さも見てきたように奥州のようすを披露したというのだ。

「都を出発したのは春霞のころでしたが、白河の関につきましたら秋風が吹いてましてな。夏中歩いたので日に焼けて真黒になってしまいました」。

大いに『白河日焼け』を強調したのだが、実は家から一歩も出ず、裏庭で日光浴に励んだらしい。今のように家が混んだ京都市中の住宅事情なら、ちょっとむずかしい工作である。ところが、思わぬ手落ちがあった。

わらじくいまでは能因気がつかず（柳樽）

靴ずれならぬわらじずれ、つまりわらじくいまでは気がつかず、きれいな足をしていたので嘘がばれた、という次第である。

芭蕉は、一六八九年三月二十七日（今なら五月半ば）に、江戸を立って『奥の細道』の旅に出ている。四十六歳で〝翁〟などと称し、「宗匠は年寄りぶって句を作り」と詠んだ川柳を見たことがあるが、半年六百里の当時の旅はやはり大変だったろう。

白河の関を越えたのは、出発から二十四日目、そのときに詠んだ

「早苗にも我色黒き日数かな」

は、能因の故事をふまえた句と思われる。

まだ早苗の季節だが、すっかり色が黒くなって旅の日数をかえりみている、というわけである。能因の歌がとやかく言われたのは、歌の姿がすっきりしているためで、能因法師は二度も陸奥へ旅しており、実感の歌だと見る人も多い。すらすらと上手に詠むのも考えものだが、とまれこの歌は、大勢の人に口ずさまれ、親しまれてきた。

みちのくの白河にも〝白河石〟が出て、建築や庭づくりに活用されている。そうして京で生まれたはずの連語『白河夜船』の名を持つお菓子が、みちのくの白河みやげになっているのもおもしろい。

川柳堺二五〇号記念大会

とき 5月6日（日）午後1時開場

ところ 堺勤労会館第3会議室

夜市川柳募集

課題 「ゆっくり」 西尾 栞選

ハガキに3句 **5月31日**締切

〒593 堺市堀上緑町2―9―2

河内天笑方 堺川柳会

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

宮園　射月芳

一喝をして父親にある孤独

矢野　佳雲

父の一喝には千言万言を要する程の気持が込められているが、余りにも短かくて仲々に心情を理解して貰えず、また長上として些かの驕りもあったかと反省もして淋しくなる。

花活けて見ても納まる腹でなし

西口　いわを

まだ修業が足りないと言われればそれまでだが、喜怒哀楽をくりかえし生きていく。

もう一度男に生まれレスラーに

谷垣　史好

努力してもどうにもならないことがある。身体的なことは殊にそうである。病に冒された無念や想うべし。好漢史好さんの一日も早い回復を祈るや切である。

市場籠に家来のように従いて行く

松川　杜的

昔の男として情けないことになったなとも思い、今はこれでいいのだとも思い、やさしい老夫婦の姿が想像されてほほえましい。

六十の妻の口にはもう勝てぬ

宮口　笛生

負ける訳ではないが、戦列を退いた男は妻を愛し、婦唱夫随で心が満たされている。

それからの敷居を高くした啖呵

寺田　裕美

げに口は災いのもと、理はわれにありと思っていても、相手以上に自分が傷つき、世間を狭くしてしまう。何事も辛抱が肝心だ。

芸の無い私こまめに生きている

田中　亜弥

少しばかりの事をすぐ鼻にかけたがる人が多いが、謙虚で誠実な人柄が偲ばれ嬉しい。

一歩ずつ今を光にして暮らす

堀江　正朗

ひとコマずつ大切に消していく余生

野呂　右近

人間はいつ死ぬかわからないのに、先の事をあくせく考え、今を犠牲にして生きて何になろう。ひたすら今を充実させるために生きよう。余白が残り少なくなり尚更そう思う。

環状線ああの時のあの駅だ

松本　文子

同じ所をぐるぐる回っている様で決して同じではない。人生は二度と帰って来ず歳月は走り去って行く。けれども記憶はある時ふっと過去に引き戻してくれる。環状線がいい。

嫌いではないとわからぬことを言い

岩佐　ダン吉

では好きかと言えばそうでもない。暗に本当は嫌いだと言ってるのかも知れない。ほんに日本語はややこしいという例である。

褒められてお世辞と知らぬ丸い妻

井上　喜酔

善人を絵に画いたようなんだ。お人好しというのは少し軽んじた意味合いもあるが、褒められたらやはり素直に喜ぶ方が可愛らしい。

十八で死ぬ筈だった手相見る

茂理　高代

確かに運勢というもあり、星の運行に支配されているのかも知れないが、所詮、人間の浅はかな詮索にすぎまい。これからも悪いご託宣は当るまい。くよくよせずがんばろう。

点滴のように晩酌効いてくる

三宅　保州

嬉しい時、悲しい時、色々ではあるが兎に角今は安らぎの刻がある。一口ごとの酒がじわりじわりと効いて来て、明日もあるいは明日は、と心が充電されていくのである。

大阪の知識で世界を論じ合い

中原　比呂志

井の中の蛙とは言うまい。しかし、とかく人は自分の殻の中で考えがちだ。大阪とヨーロッパではやはり事情も違うだろう。

ときどきは主役を食って生きてます

高須賀　金太

五湖抄

黒川紫香選

底冷えの街で情けが欲しくなる
満ち足りた顔が出て来る美容院
岐路に立つ男を試す向い風
傷心を励ます朝の陽が昇る
公害の街　工場に養われ

東予市　小山悠泉

そよ風が吹くと野草が目を醒ます
知らぬ間に街ができてるここかしこ
周到な演技に面をつけ忘れ
神の声聞くといねむりしたくなる
爪丸く切って眠りを深くする

広島市　流奈美子

坪の値は知らぬ大根出来の良さ
子供部屋もう覗かせぬ年になり
差し向かい思いのたけが語れない
掃除機の音へ鼻唄高くなる

熊本県　大川幸子

試着室おだてにのった春の服
土壇場のストレスを消す庭の花
的外す男に広い視野がある
野に生きる父の丸みの祝い唄
馬鹿正直に歩んだ母がよく似合う
中年の焦りを笑う亀がいる

岡山県　福原悦子

耳飾り私語の余韻へ揺れている
まなうらにかけ橋があり逢いにゆく
ひとまずは主張のみ干すティーカップ
落ち込んだ友へジョークの矢を放つ
海はいつもしっかり包んでくれている

浜田市　中尾まゆみ

シグナルの青にうっかり気を許す
六法を持ち出し脅し掛けられる
意見それぞれ自由な国の家庭劇

佐賀県　寺中三枝子

タマゴ割る指はたくらみなど知らぬ
なにごともなく今日の陽が沈んだよ

今治市　野村京子

淋しくてコーヒー甘くしてしまう
遊び好きなペンが愛していると書く
バンザイで出稼ぎ送ってはならぬ
シナリオは余白が続き恋終る
倦怠期ボタンの穴が伸びたまま

尼崎市　児玉歌子

脱皮した女手紙を焼いている
沢山は語らぬ父で温かい
花博へどうぞと母へ出す便り
念入りの化粧挑戦的になる
小雨降る窓で郵便待っている

八尾市　高杉千歩

爪切ってもらう夫に手を預け
ともだちを招く日母の薄化粧
一円玉平成二年がぞくぞくと
何もかもおとぎばなしにして暮れる
夏桜ひとひら未練絵具皿

熊本市　宇野昭代

花鳥風月寂しがってる暇はない
赴任地の花見に誘う便り来る
言い訳を聞く忍耐も年の功
正直に生きて傷つく事多し

縁談が決り家中弾み出す

名古屋市　藤井高子

風丸し少女の肩を抱く時は
開運のきざし風さえ味方する
韋駄天に駈けてふりむく時六十路
別れともない猫叱る春の軒
本心でないとお顔に出ています

和歌山市　内田結実

命日に気がついたのは花の下
花が咲き花が散っても来ぬ返事
合鍵を埋めてる鉢の実が熟れる
聞き耳を立てるとたわいもない話
大阪で買物するとくたびれる

富田林市　池森子

つながれる絆を咬んでいる子犬
春の嵐にふつふつ命あふれくる
美人画と遊んでストレスが溜り
男の部屋に本音ばかりが置いてある
春風は少し美人にしてくれる

静岡市　沢田きん

思い出を集めて旅の箸袋
愛された束の間の夢信じたい
背伸びして壁に当った日の失意
話題などなくても側に居てほしい
湯上りを小窓へ写す影法師

病む窓に世の中病人ばかりなり（老母病む）　島根県　菅田かつ子

大皿に盛るとパーティーしたくなる
あせっても時刻どおりに汽車は出る
あの人の胸にお邪魔をしたくなる
五十すぎ妻という名で拗ねてみる　尼崎市　的場十四郎

ジャズ喫茶リズムに乗った赤い靴
議事堂は先生ばかりで笛を吹く
窓際に座ると見える人の癖
盃の甘い誘いにのる油断
うっかりを悟った頃にさす西日　大阪市　上田柳影

面倒臭い話は補聴器聞いてない
年金の生活に馴れて世辞嫌い
長命を聞けば歩いて見せてくれ
蘭の花咲かせて吾も老いしかな
癌転移数える指にある命　熊本市　黒田緑

行きづまる完璧主義とは露知らず
余命なお有余るほど想うこと
占いの言葉の端に気を許し
後ろ向きに未来へ入るおそろしさ
味も香も産地直送懐かしい　堺市　楊井二南

実印を押した愚かがつきまとい
両替をしてから羽根が生えたらし
目配せをしたのに定価通り買い
ローマ字で書いて業績上げている
ため息を御幣かつぎが慰める　尼崎市　森安夢之助

それからの心を乱すいい女
政治不信雲の流れが早くなる
頬杖で漫画見ている勉強部屋
トランプを切るマニキュアが剝げている
爪を切って雛人形の化粧する　尼崎市　尾宮弘治

世話させて貰える幸を感謝する
目一杯春陽求めてガラス拭く
つましさを豊かにみかん盛って出す
造花にも水をやりたい受験パス
職退いて家事を手伝い叱られる　鳥取県　西浦小鹿

銃弾に負けない鳩を飼っている
少年のペンが反抗的になる
愛という文字を正しく書けますか
菜の花をつんで娘の里帰り
万歳を素直に言える汗光る　久留米市　鶴久百万両

ある女帝のざんげ他人ごとでは聞けぬ
過去は過去　妻は時効にしてくれぬ
街のカラスは魔女のおしゃれを真似たがる

文通が途切れて思慕のまま終わる
うちの娘も婦警になると慌てさせ
静岡市　永倉柳華

一張羅着て少し豊かな顔で出る
二枚舌持って世の中闊歩する
目が覚めて見れば他愛ない男
灰皿にながい会話のあとがある
追い風に乗れず次点という候補
堺市　桜沢あか里

きれいごとだけで終った片想い
ワンパターンの絵ばかり描いている孤独
擦れ違う車に会釈してみよう
普段着の写真がいたく気に入られ
戸惑うてばかり女の白い指
長岡京市　山田葉子

アンダンテ今年の歩調となるように
沈丁花匂う小道を選る散歩
直感を磨いて女迷わない
追いこみに母も夜食によりをかけ
徳島市　宮武まつ女

着飾って離さぬ夢を買いに行く
人生の哀歌曳きずる長い川
北山の杉へ脈打つ花手桶
責任の強い帽子へそり返る
熊本県　岩切康子

正面に真紅の椿燃えてます

残り飯母ならここで糊にする
上り坂夫に従い息が荒れ
戻り寒木の芽は少し我慢する
米子市　足立由美子

眠ってるペンを起こして磨かねば
息抜きに出掛けてこいと言う電話
春風が吹くからじっとしておれぬ
平凡な暮しいつもの朝が明け
鳥取市　加藤二代

お隣と幸せごっこ鬼ごっこ
人が人裁くミスあり罪に泣く
バリュームを呑む日小さな決意する
あの人に愛のリボンをかけてやる
吹田市　井上照子

梅の香を惜しみ桜の花を待つ
この齢でまだ口紅を持ちあるく
打ちあけて溝すこしずつ深くなる
平常は不仲隣の猫が来る
和歌山市　山口三千子

目の届く距離でときどきためされる
相談にのったつもりが誤解され
よく切れる刀は側に置いておく
自由奔放に生きて孤独の中に居る
十和田市　阿部進

嫁がきて茶の間の話題若返り
御近所へ配る粗品へ笑顔添え

善人と言われて仮面はずせない
日々多忙過去を振り向く暇がない

寝屋川市　宮崎菜月

春菊を菊菜と慣れて大阪ぐらし
母が居て心が足りる倖せよ
束の間の恋の書簡がよく燃える
逝った人戻ってくるよな冬の虹

米子市　新正子

マラソンをテレビで見ててくたびれる
お隣の垣根に刺のない野バラ
くもの巣のインターホンが切れている
水がある橋を渡ってホッとする

尼崎市　山田保蔵

ラッシュアワー鼻息荒くつめこまれ
パチンコ屋首のないのがたむろする
輸入自由化みかんに何の罪もない
言い勝って期待外れてさみしなり

尼崎市　住谷石舟

年毎に母の期待が小そなり
申告に来た税務署の固い椅子
言うなれば高倉健に似た魅力
どうしてもピンクが着たい妻に負け

鳥取県　乾隆風

おもしろい貌して銭を貸し渋る
罪深い爪を真赤に染めている
結婚の面倒くさいおんなかな
道に迷うと向うから鐘が鳴る

大阪市　稲本凡子

サラサラとうす墨にのる優雅な日
宝石に満ち寒い心になっている
チエの輪が簡単に解け過信する
明日に向い走る火種を蓄える

鳥取県　伊吹富恵

捻挫して高い踵に叱られる
ダイエット栄養不良で風邪をひく
お神籤が吉と出た寺信じます
泣きごとは母の両手で枯れました

大阪市　亀井円女

落込むと必ず亡母が現われる
息子らは父を基準にしてるらし
呆けぬよう文句言わせてもろてます
いつまでも笑い上戸で困ります

島根県　高野律子

冬の海テトラポットに陽が落ちる
小回りの上手な母の太い指
拗ねた子の肩に無言で手を添える
水ぬるみ命あるもの皆動く

堺市　宮本かりん

カーネーション今日は主役にすわらされ
不意をつかれて本当の顔が出てしまう

受けとめたうつを洗っている屋台
安心をさせたい嘘が増えていく
和歌山市　堀畑靖子

ペアルック一緒に居たい人に買う
春うらら天に恋をしてみよう
意地という私に強い味方あり
終りではなくスタートにする別れ
岡山市　中嶋千恵子

ライバルへ闘志もやした父の靴
花を賞で土に生かされああ平和
セールスの手腕見事にくどかれる
雛段にケーキを飾る誕生日
摂津市　木下道子

向き合って座ればいかがお雛さま
下手な嘘ついた布団をよく叩き
寝そべってモデル気取りのペルシャ猫
犬連れて探してきたのは蕗のとう
和歌山市　田中みね

正論を吐いて孤独に見舞われる
分厚い文書けばハガキでお礼くる
異常無し癌検診へともかくホッ
不都合へ健忘症という手立て
尼崎市　新井泰子

ヒロインは何故か美人と決めている
朝シャンで流しているのは軽いうそ
テーブルの花と私のお茶にする
同じ水飲んで個性を競いあい
姫路市　松本一郎

指ずもうゼスチャーたっぷり孫に負け
右上り癖字そっくり子に譲る
住む町に人の臭いのある救い
いい夢か孫の寝顔が笑ってる
寝屋川市　太田藍子

お返しは妻がしてますホワイトデー
当分は開店祝いの客ばかり
帰り道噂していた人と会い
神仏へおすがりしたい程困り
酒田市　永澤裕子

饒舌の果に矢っ張りばれる嘘
主義主張持たず機械に使われる
万歩計不足補う月明り
狭い視野突かれてからの強い風
出雲市　金森知恵子

流氷が溶けはじめたという朗報
ここからは妥協をしない線をひく
かあさんのやる気待ってるガスオーブン
自信ある眼鏡は裁くくせがある
島根県　加本義良

花博の夢を待ってる時刻表
総選挙済んで赤子がよく眠り

啖呵切る言葉の裏にある未練
例えばの話に決断せまられる　出雲市　岸　桂子

冬の浜　影ひくものは何もなし
ひと雨が走って春立つ日の匂い
老母の愚痴聞くも孝行だと思う
舌の先こぼれたウソが拾えない　佐賀市　江口　万亀子

筆まめに頂く便りありがとう
戦前も戦後も耐えて少し惚け
紙袋もったいないでついたまり
どこも悪くないと言うので医者をかえ　藤井寺市　高田　美代子

三センチ段差で捻挫した油断
それから先は知らない方がいいらしい
木も鳥も詩う森番目を覚ます
過疎に来て大きな鯉のぼりに出会う　熊本県　高野　宵草

同病ですか待合室で友になる
てのひらが返せないから左遷され
旅行するゆとりが出来た頃病気
梅の香や受験疲れの窓開けて　鳥取市　西村　黙光

石橋を叩いた槌が壊れ出す
借金をしてまで飲ます春の宵

肩書がふえてペン先恐怖症
春風に知能指数計られる　尼崎市　鈴木　良征

片言で喋る異人の瞳が光る
方程式の解けた女と旅に出る
よく聞けばローンで買っていた晴着
火種持つ鬼が土下座をして戦　尼崎市　中澤　向西

うちの祖母小言を言うが無駄がない
むずかしい話になると鼻毛抜く
鼻息も鼾も荒い我が社長
単身赴任窓から見える思慕の念　尼崎市　明壁　敏之

まだ本音すこし残して逢って見る
汁物の料理のうまい雪の宿
探しものするよな顔ではいてくる
油断したつもりはないがまた浪人　尼崎市　新井　朋子

太陽と土を忘れた味がする
休日は猫になろうと決めていた
ブーメランのようには帰ってこない人
多数決にはあわない性格で　岡山県　大石　あすなろ

もういいかい探しに行った鬼が泣く
口げんかしつつ夫と鍬をふる

五線譜に乗ってラララと春が来る
ここまでは順風で来た夫婦舟

摂津市　もちづき　遊　美

桜にも背中向けたい小さい胸
朝のポスト空気柔らか春めきて
大陸育ちは島国根性困っちゃう
愛有れば犬も無暗に吠えません

貝塚市　池　田　寿美子

目的のない目的のひとり旅
新風を求めて今日も吊皮に
何にしようかスーパーの夕方立ち話
逢えるかも花博の風友を呼ぶ

尼崎市　吉　永　伊三郎

止まり木で見果てぬ夢の虹渡る
すじみちを通して男冬の月
れんげ摘むままごと遊びからずっと
凍る川面の下で春流れてる

熊本県　増　田　一　乗

シルバー席表示と違う顔が乗り
胆石を抱えて手術まだ迷い
万円をペットの餌に出すおごり
落選のポスター氷雨に濡るるまま

岐阜市　渡　辺　杏　村

初体験青葉の鬱に悩んでる
家計簿は円安もない暮らし向き

公園のベンチ老人サミットか
家畜輸送みたい満員電車見る

豊中市　三　宅　つえ子

散る花に少し情けの化粧する
偽りを捨てる明日の米をとぐ
もう一度亡母を抱きたい一周忌
さよならの余韻ひとりの夜が長い

京都市　小　林　英　子

別れの構図温めているグラス
ときめきを甦らせる恋日記
片恋をたださりげなく書く日記
浪人の噂あちこち春の町

和歌山市　森　茜

美しい言葉が咲いたさくら草
春一番少し気弱なシクラメン
早とちりしている人が走りだす

鳥取県　黒　田　くに子

墓がある只それだけの里帰り
踏んで踏んで麦へ命を入れてやり
太陽へ今日が始まる手を合わす

兵庫県　森　脇　和　子

カラオケが好きで陽気に生きている
盛装で遠まわりする帰り道
譲り合う暮しに似合うカスミ草

鳥取市　松本伊都子

愛用の茶器湯加減を知りつくし
積もり貯金孫への愛に消えて行き
太陽が昇り万歳して帰る

鳥取県　山内芳江

冗談も混じってうまい酒の席
仲良しになってもけじめ付けて置く
大空を舞って余裕のある翼

鳥取市　武田帆雀

てっぺんへ登ると落ちるから怖い
別れ際だけ手を振って下さった
助かるわなどと貰って捨てられた

尼崎市　佐野六浦

木の芽和え緑を添えて膳に出る
雷鳴が天井からも抜けてくる
横文字で書いてある娘の日記帖

奈良市　米田芳子

船頭が多くて孫の名決まらない
約束を守れぬ友と待ち合わせ
懐石もミニが手頃なお齢です

大阪狭山市　桜井荘次

何事もなかった様に消える影
暗がりの途中で二人の歩が揃う
幸せを気付いていない夫婦箸

鳥取県　西川和子

一病を持って元気に生きている
老眼鏡はずし見てない事にする
一人旅出来ない夫依存症

鳥取県　山根八重

偽善者の心を覗く眼鏡買う
亡き母を慕う涙はそっとふく
主張した頑固な鼻があぐらかく

吹田市　山本希久子

しばらくは借りてきた猫孫の客
気まぐれの旅に気ままな雨が降り
相槌を打って責任のしかかり

鳥取市　森山豊子

良い年へ翔ぶ鶴の軸かけておく
愛したら見境もなく好きになる
伴侶得て門出する船ゆらすまい

鳥取県　太田幸枝

塾の途でガキ大将に憧れる
去る者は追わず男の太い眉
保険屋と条件付きの話する

竹原市　古田比呂子

子と入るおふろたっぷりお湯をはり
ケーキ皿夢を小さく盛ってみる
さあ春だ意欲的にふとん干す

兵庫県　酒井靖子

騙されぬ熟れた女の返し針

半歩だけ先を歩いて見たい朝
気まぐれな風が私を呼び止める
高槻市　芦田静江

水しぶき浄土に近い帰山式
余生まだ解けぬパズルに期待する
手づくりに自信覗かせ派手を着る
鳥取県　石尾かつ乃

まだ惜しい生きる支えの杭を打つ
温室を出て雑草に追いぬかれ
紅白のリボンで余生結びたい
鳥取県　中瀬さつき

浜の畑があっと言う間に大団地
浜砂でそら豆煎ったことがある
霧晴れて合格通知とんでくる
鳥取県　大角正道

新しい出逢いが春を連れてきた
想い出にリボンをつけて封をする
墓のなか元気な父がどなってる
鳥取県　橋谷静江

歯の治療している夫に芋の粥
手づくりの菓子で茶の味ひきたてる
葉書にも仲むつまじい写真入り
和歌山市　前田美子

窓と窓おしゃべりがまだ続いてる
騒音にひとりぼっちで立っている

病みし子の夢に目覚める夜半の月
富田林市　浦田トシエ

合格に絵馬が揺れてる春風に
カーテンを替えて季節を先取りし
ありし日の姑の鋏で糸を切る
京都市　渡辺圭坊

彼岸会の説教春は眠いもの
暖くなれば彼の人訪ねたい
象の綱引いて歩いた花祭
旭川市　朝倉大柏

足踏みをすると男が笑われる
海越えてみてもやさしい風はない
酸欠の街で文化という誇り
熊本市　北川一進

メンバーが揃えば趣味の三次会
噂した美人でなくてほっとする
息抜きの積りパチンコまだ続き
西宮市　菊池富枝

今にしてあれが別れの言葉とは
ありがとう終の言葉は忘れまい
風邪に臥す女は思うこと多く
茨木市　藤井正雄

子の電話小声で話す年になり
本日がもうわずって結納着く
目印にされたポストは凜と立ち

断った誘いに未練増すばかり
仲直りしたい男の咳ばらい
エリートにない雑草の底力
藤井寺市　中島志洋

授乳期へ母子のコントもう芽生え
演歌の炎そのまま女の一行詩
鈍行のメニュー駅弁の旅があり
岡山県　土居ひでの

迷ってる時にも歌を唄ってる
市役所でもたらい回しにされて来た
塾などは無かったころの茜雲
出雲市　森山健歩

お隣の花が淋しく濡れている
平和だな女総理でやれそうだ
プロポーズやっぱり舌のひきつって
愛媛県　八塚三五島

手を振って夫はしばしの旅に出る
唄と句の余生楽しい八十路坂
望郷の歌で期待を呼びもどす
尼崎市　木下義嗣

デブだとは言わず福々しいと逃げ
運がなくチャンス待ってて老いを知る
野次馬がやれやれやれと嗾ける
和歌山市　北山好笑

人気ある先生手品上手なり
ピンチにも笑顔かかさぬ太っ腹
好景気夜間金庫がいそがしい
河内長野市　岡崎実

花爛漫私の心も落ちつかぬ
みんな逝き私一人になる不安
ふわふわと綿毛になってとんでゆこ
米子市　中井ゆき

生きているこのひとときをはんなりと
その道の達人という顔の自負
実を結ぶときを信じて花は咲く
芦屋市　根来敬

ヒナ壇に姫も官女も見当らぬ
紀子さんの挙式身内の顔で待ち
単身赴任して知る自由の不自由さ
奈良市　井上大

公園の隅に疲れた週刊誌
「美人やねえ」急にお客に言われても
四十の手習いラケット振り過ぎる
田辺市　染道佳明

籠を出た誤算は空が広過ぎる
妻の言う通り午後から雨になる
面影はあるある名前浮かばない
今治市　渡辺南奉

菊作り二泊の旅が気をもませ
佐賀市　古川一徳

以下同文わくわく受ける努力賞

一げんの客と見たのか茶が薄い　守口市　森川春子

サーカスのブランコにさえ眼をつむり
しょうむない言葉あとまで引っかかり
筆まめにお誘いうけて断れず　枚方市　森本節子

山本陽子に似てるナースがお気に入り
若牛蒡手のこむ料理は又の事
啓蟄や夫の病気もよくなるか　大阪市　今西静子

人を待つたそがれせまる心斎橋
再会は寒い別居の話きく
花博の花に楽しみ抱いて寝る　静岡市　宇佐美寿美

マネキンの着替えまぶしい春陽ざし
孫の人形抱いて昔がよみがえり
風邪に臥す妻を労る手が温い　堺市　山本半銭

晩学へ間違いなやと辞書をくれ
子のくれた万年筆に励まされ
てのひらの握りぼくろを大切に　米子市　小西五十鈴

嘘だとは分かっていても聞くゆとり
留守番を子供に頼み高くつき
茶がわりに飲む牛乳へ孫達者　羽曳野市　芦田絢子

つまずいた事は子供に知らすまい
つまずいた時から取れた肩パッド
父にだけ頑固な背中見せた母　堺市　井上たかし

親と住むおとんぼだけがでかい夢
パトカーがえらいこっちゃと駆け抜ける
さくらさくら花を辿って回り道　静岡市　柳沢たま

一人居にネズミのかじった壁わびし
影法師話し相手の月夜道
影法師家の中までついてこず　岡山県　後安ふさえ

よい祖父母なるには矢張り金がいり
正直な鏡で顔の小じわまで
お茶漬を食べてくつろぐ旅帰り　羽曳野市　福田満洲

ねんねこが博物館に入るかも
これからも夫のうしろ従いてゆく
消しゴムのかす片付けて今日終る　唐津市　山口ふさ子

失って初めて知った自分の座
気が弱くなれば八卦も信じます
選挙戦遮断機なみに頭下げ

ポックリと逝ってもよいぞ遺書かいた　広島県　森川抜智

街角の地蔵あて逃げされないで

玄関へ賽銭箱を置いとこか　鳴門市　八木芳水

言い訳を教える妻がせき立てる

今日ひと日自由に飽いた妻の留守

人間の誤算金貨のニセがばれ　米子市　小塩智加恵

終電に遅れた言い訳一人言

ハミングは合わないけれど似た夫婦

予定表あいてる土日ショッピング　鳥取県　上田俊路

舞台降り大臣の妻演じてる（司葉子さん）

讃美歌に二人の愛が許される

春近し花万博の誘いくる　岡山県　杉本伊久栄

老いの意地まだまだ旗を振りたがり

三寒四温一枚脱いで風邪をひき

着飾って鏡の前でポーズ取り　青森県　福士トキ

猫柳微笑み部屋に春が来る

おいしいと言われておすそわけとなる

郵便屋さん私の家を素通りし　寝屋川市　豊福路子

花博が近くなったと夫の杖

老いらくへ気兼ねの要らぬ四畳半

日の沈む方へ並べるさくら草　吹田市　西岡豊

有ていに申すとあんた首だっせ

熱燗に野性チラホラ見えてくる

またきてネ出口まぎわで媚を売る　静岡市　大村正雄

大蔵と総理も兼ねて妻達者

雲行きが悪いと急に話題変え

鼻唄で洗濯してる給料日　箕面市　中嶋民子

花色に染まって四月の風が吹く

折れやすい枝を掴んだ坂の道

病弱を盾にいよいよ怠け癖　橿原市　西本保夫

消しゴムでたやすく消せぬボクの過去

友人も来ずに湯が沸く妻の留守

言わずとも妻が黙認するコース　和歌山県　森三枝子

春雨へ絵になる遍路笠が行く

衆院選すめば疲れた二枚舌

当選の舌は議会で黙り込み　八尾市　籾山隆

待たぬ日を生涯かけて待つ定め

父になる産声を待ち白む朝
脱サラに辞表の筆は迷わない
砂川市　大橋　政良

一日のまばたきをするカレンダー
手ごたえは風の流れる音ばかり
愛というコピー一枚渡される
鳥取県　中藤　俊子

食べる前お膳の上にカメラ向け
痛そうな音ばかりする歯科の器具
又一つ薬が増えて悩み抱く
岡山県　牧野　秀香

アルバムの恩師も友も輝いて
寝姿をじっと見守る壁の亡夫
ポタリ落つ赤い椿がいたましい
岡山県　伏見　すみれ

乗りかえて不安が消えた国訛り
山の掟主張している風の私語
ひたすらに売れない富士を書きつづけ
十和田市　阿部　喜久江

古里の面影もないビルが建ち
当選をすれば届かぬ庶民の声
下積みに耐えて咲かせた夫婦花
兵庫県　奥野　テル

平成にやっとなじんだ小銭入れ
カラオケが好きで婆ちゃん若くいる

咲き揃う花にためらう花鋏
出雲市　伊藤　寿美

言い勝って刺は自分に突きささり
振り幅の広い振り子がおこす風
嬉しい日の手紙の文字は丁寧に
鳥取県　米沢　正

朝刊をばりばり破る孫の自我
言い訳を嫁に一言電話する
のびのびと母子寝そべり童話読む
兵庫県　倉垣　恵美

からしあえ話題の糸口出してくれ
つむじ風吹かしたあげくのむくすり
お日様も風邪めされたか今日も雨
枚方市　中山　おさむ

大正の拍手を送る田端節
漫画本むさぼる若さには勝てぬ
額縁に妻のカルチャー跳ねている
鳥取県　中村　幸代

窓を閉めよう良心が流れ出す
ビルの谷間で金魚のように泳いでる
ときめきが空気の中ではじけそう
島根県　松本　聖子

バーゲンを捜し求める家計です
安宿を捜してトイレの遠いこと
良い夢を見つづけました春の朝

同窓会忘れた頃にやって来る　唐津市　福島紀一
何ごとか話しかけたい昼の月
ブランコに揺られ涙をこらえた日　島根県　今川三津江

峰寺坂ここにかしこに蕗のとう
たんぽぽが春一番の旅に出る
横文字がふえて方言影ひそめ　今治市　渡邊伊津志

雪みんな消えて孤独の松の風
真直ぐに素直に雪が海に降り
鴨の目と同じになって雪を見る　羽曳野市　麻野幽玄

何事も無かった不満旅終る
死亡記事歳と病名までを読み
その時が来たらと心残し去り　岡山県　福島辰江

ハネムーンもうばっちりと敷かれてる
押すよりも引くこと知ってる苦労人
女の性ひめた鏡台の小引出し　鳥取県　木下芙葉

リハビリで歩く明日への夢燃える
何十年かけた保険の額に泣き
子に一本杭を打ってもはじき出し　鳥取県　幸家単車

倖せをひとり占めして癌になる
プライドが邪魔して才女恋もせず
愛かれて森のみどりを吸いに行く　岡山県　後安江山

孫の結婚

両親に祝福されて着る晴着
挨拶はよせよと逃げる父の背
有難う行って来ますとハネムーン　大阪市　尾崎黄紅

輜重兵時代の馬の知識なら
生臭い話になってきた帰ろ
何かに使う空瓶が溜ってる　寝屋川市　井上すみれ

ユラユラユラ何か欲しそうイヤリング
鏡きれいになってから嘘つけず
おくれ毛が詫びを聞いてる岐れ道　宇部市　中村三良

男と女の歴史が描いた焔の絵
風の匂い嗅ぎ分けている靴の紐
四捨五入どうせ残ったのは小銭　吹田市　廣屋利通

花喧嘩巡査は知らぬ振りで過ぎ
疎開したお寺の庭が荒れている
ひらめきにふと懐手解いている

愛すれば応えてくれて苗育つ
任された苗にいのちのありったけ
喝采に溺れて苦い水を飲む
鳥取県　久野野草

慰めのその一言で痛みとれ
花博に咲かした労とよろこびと
大臣と握手が出来る選挙戦
静岡市　三浦つね

見栄捨てた日から気持が軽くなり
年度末彼方此方でお化粧す
すぐ馬鹿になれる友達尊し
静岡市　大神静枝

余白の扉あけてくれたは詩の道
一行詩干支に合わせて馬駈ける
カレンダーの矢印旅の夢つづる
相生市　中塚礎石

水割りの中でうつろな蝶の舞い
大の字になって天下の四畳半
街へ出る妻は無言でついてくる
鳥取市　美田旋風

手紙にも書いたと電話かけてくる
相槌を打たれ引き際見失う
静岡市　小木久子

再会の二人女は冷えている
冗談が通じぬ人でもて余し
鳥取県　美浦美代子

氷の様な女の影に道をきく
寒いから温泉めぐる旅誘う
鳥取市　萩原美雪

ほったらかしにされて夫が拗ねている
息の合う人とステップ軽く踏む
米子市　大田みさと

遠くから眺める山が美しい
お粗末な庭でも小鳥来てくれる
藤井寺市　武部敦子

大正の父は木刀振っている
晩酌へコップに印つける妻
寝屋川市　北岡波留吉

山を愛し父は一人で炭を焼く
夢でよい素敵な恋をもう一度
島根県　福間博利

嫁もらう隣は納屋を建てかえる
ストレスがピアノ叩いているような
大阪市　川原章久

脇道に落ちてる温い人情味
フルムーン日毎楽しい箸袋
静岡市　片平静代

宅急便中に菜の花添えてあり
信じ合う絆鍵束任される

片方の耳はあけとくレシーバー　岡山県　江口有一朗

ポインセチア黙ってひとり赤く燃え　神戸市　岩田信義

残り矢を数えて白旗準備する

少しずつ塩水溜めて反抗期　寝屋川市　河合時弘

籠城の書斎へ妻のにぎりめし

禅寺の粥一ぱいにある作法　唐津市　浜本治幸

引き際を見逃し迷路の中に入る

チョコレート孫からもらう齢となり　鳥取市　近藤秋星

当選を境に元の顔となり

真直ぐに生きた人生少し悔い　八尾市　向井しづ子

旅がえりもう戦えぬはりぐすり

スナップの兵隊さんが宙がえり　鳥取市　岩原喬水

狭くても五人育てた母の愛

お天気が悪いと妻は黙秘する　川西市　野村静雄

運がいいだけさと軽く言う衒い

母性愛女は負けたふりをする　鳥取県　浜田民子

忘れたい声が耳もと追って来る

ひさしぶり魚を焼いて見るレンジ　鳥取県　前田嘉津江

補聴器にたよる悲しい耳の私語

看板を揚げるとつむじ風が吹く　鳥取県　中西智恵子

シャッターチャンス花に止まった蝶の恋

盃の底に男の嘘がある　鳥取県　石谷美恵子

正座して水子に悔いの写経する

人許す心野仏から貰う　八戸市　島田昭治

投票をしないで政治の悪口を

いい友はずけずけものを言ってくれ　大阪市　清水絹子

雨あがり家中干せば陽が笑う

水割りもお湯わりも好きレモン汁　鳥取市　前田一枝

声聞けばまた会いたくて胸さわぐ

記念日も何であるかも忘れてる　大阪市　山北三三三

寒いから寒いといえぬよその家

妻の留守食事はしたりせなんだり　弘前市　肥後和香子

みんなみんな美人に見えてロングヘアー

塩辛の出来にこだわる齢となり
藤井寺市　楠　昭子

機嫌よく帰れば妻に疑われ
残り福貰ったような嫁である
富田林市　山原昭水

女房の最初の料理玉子焼
母さんが起きぬとうちは朝こない
八尾市　片上英一

はやる気に軽く一球遊ばせる
右翼ではないが君が代聴いて寝る
唐津市　野田旭恒

走馬灯回る静かな通夜の音
背中から受ける視線は避けられぬ
広島市　名和喜一郎

お互いを大人と認め旅に出る
ジョギングに近道などはせぬつもり
出雲市　高橋きよし

大空に上って迷う放れ凧
手を振って春にさよなら大社線
香川県　木村明人

古里の良さを知ってか鮭帰る
手の内を知られて話少し折れ
箕面市　岩津岳夫

脳ミソを洗いスカッとしてみたい
紙おしめああそのかみの鬼部長
唐津市　入江喜久亭

春一番胸の思いを吹き流し
空に舞う鯉の如くに孫元気
静岡市　青柳金吾

ロボットと言う後輩に追い出され
消費税賛成するに勇気要る
池田市　林すて

春うらら浮かれ心が目を覚ます
こんな時いてくれたらと亡夫想う
大阪市　家村高雄

同期だが序列に差がつく十年目
世渡りに舌の出すこと覚えたり
大阪市　武田昌二

思い出のアルバム夫婦別に持つ
パチンコ屋だけがキラキラ夜の城
泉佐野市　真崎浪速子

ぬけぬけと相槌を打つ天の邪鬼
立志伝暇を盗んでする読書
静岡市　浅子まつゑ

今しがた叱った犬はもう眠り
白髪をすっぽり隠すヘルメット
寝屋川市　坂上高栄

野心家と言われようとも夢を追う
履歴書は各々顔に同窓会

新人類出雲に頼らず結び付き　香川県　工藤吟笑

山裾の家がカスミの中に浮き　青森県　波　ただお

年金の額で暮しが決められる
合格の私の名前浮き出てる　広島県　中村　要

暴落のもとはデマからでたまこと
無理矢理のゴマすり舌がもつれだし　姫路市　谷　清柳

薬石効なくいずれ私もそうなろう
光らないままに終った父の石　枚方市　山崎彩子

インド紀行

冷房完備ホテルの前はスラム街
象ラクダ豚コブ牛とすれ違い　島根県　梅木梅園

夫婦けんかの頃が花だと病んで知る
継ぐ者もないのに田畑守る老い　青森県　荒田つる

ずり落ちる老眼鏡でやっと書き
駐在も駆り出されてる苗運び　大阪市　堀口欣一

民主警察らしく鳥籠掛けてあり
資生堂みな美しい人ばかり

欲捨てた目から鱗が落ちる音
棹ささず流されゆくも老いの知恵　豊中市　田中道胤

嫁貰う系図作りもやってみる
折込みは裏面の白を歓迎す　倉敷市　斎藤進一

着ぶくれて足早に行く詣で道
園児等の紙人形は母の顔　静岡市　増田扶美

書く筈のない遺言の話きく
親亀の背で子亀の青写真　川西市　西脇冨美

乾いてた喉に小言が貼りついた
何だろう引出しのすみこのお金　岡山県　富坂志重

満ち足りて顔も心も丸くなり
新車買い姑も誘って小旅行　鳥取県　荒田花江

傷心の身に春光が眩しすぎ
どちらでもよいことなのに理屈捏ね　羽曳野市　徳山みつこ

八十三を自由に歩け幸せを
生きている喜び胸に感謝して　東大阪市　岡田寿美礼

自分史を語る昭和は生きている　大阪市　乾　哲静

目を掛けた弟子に一杯食わされる　高知市　山崎一求

爪染めて今夜から行くアルバイト

インタビュー人の不幸を追いかける　秦野市　三原浮木

使い捨て時代に背き修理品

オクターブ下げて本音をちらり出し　岡山県　平田たけよ

明日の日を信じ安らぐしまい風呂

電話口声がそっくり三姉妹　藤井寺市　田中孝子

友の訃を聞く落葉の遊ぶ風の街

心豊かに隣人とわけるパン一つ　鳥取県　中澤正恵

救急車どなたの不幸か犬も泣く

迎え待つホカロン一つ味方です　島根県　川津幸夫

忘れ傘雨が降るのに取りに来ぬ

連休のプラン家族がくいちがい　八尾市　橋本信江

菜の花に春の陽ざしがはしゃいでる

花柄にこだわる年になりました　大阪市　清水利武

問題児噂が消えて帰って来

おおっぴらに味見ができる百貨店　出雲市　原　章峰

親切の額たれさがる受付で

尿カップ看護婦さんは「ハイ」と言う　泉佐野市　大工静子

続けよう余命いくばく文の友

年金を生かし夕餉の膳にする　静岡市　大石たき

いい子だと曾孫の頭そっと撫で

悪口は壁に耳あり言うまいぞ　島根県　岩田三和

仏壇のオヤツちょうだい手を合わす

遠まわりすれば梅花見えたのに　豊中市　村上とく子

息子の嫁にほしいあの娘の薄化粧

宮水もくんで帰ったピクニック　豊中市　滝北博史

五票ある家二票だけ自民党

若葉してひときわ赤い大鳥居　八尾市　橋本龍典

雑草だ思いついつか枯れてゆき

犬公方ペットブームに苦笑い　富田林市　加藤ミツエ

尾道や島を取り持つ定期船

今年も元気手作りヒナを飾ります　泉南市　坂根流水

霞む空　丘にたんぽぽ菜の花も

歌碑句碑がやたらにふえてちと迷い　米子市　服部朗子

本人は一大事だと意気込んで

八十と見えぬ写真の穏やかさ　東大阪市　大平太一郎

華々し世界平和を花の博

ライバルに待たれた時が華だった　大阪市　平井露芳

気象台花粉症にも気を使い

島民に気がね急がぬＪＲ（瀬戸大橋）　岡山県　森下正子

満潮に産声高く後継者

ある日妻観音様に見える日も　島根県　渡部好栄

孫の後仔犬は護衛のように付き

老人にいつも笑顔の聴き上手　米子市　池尾保子

還暦へ夫と二人赤を着る

似顔絵と写真をならべ見くらべる　岸和田市　三輪通彦

同居しながら老いは孤独をかこってる

新学期また懐が寒くなる

ティッシュ一枚恋の涙を拭くことに　鳥取県　西原艶子

佳句ならば拡大鏡で読んでいる　松江市　原長三

一と月を十日とちぢめ日記帳

目をとじて耳たのします孫の唄　鳥取市　中居武士

拝まれるほどの政治家出ぬものか

気になるよ受話機にひびく息づかい　島根県　兒玉幸子

かまくらの中の童話に孫さそう

白梅の香りただようおぼろ月　岡山県　三村美恵子

見た夢の話二人は膳かこむ

気にかかる一日棒に過ぎてゆき　島根県　山根峰雪

涅槃会に涅槃の掛図ないお寺

気がつけば雲雀も来ない田や畑　藤井寺市　菊地繁男

フウフウと熱いお粥へ誘われる

おじいちゃんの声で玄関開けて来る

◆ジュニアの部

十時までゆっくりねてたい日曜日　大阪市　福西範子

ピカピカのセーラー服よ一年生

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

山本規不風

川柳占いの匂いがありますが、よろしくお含みおきください。川柳からの幸せがさらに増すでしょう。

運勢を信じ切ってる父の背　的場十四郎

運命は宿命で静。運勢は動で前進です。即ち必ず幸せが来ると信じてる姿です。人生の波乱と苦労を乗り越え、やっと安定を勝ち取られたご自分を「信じ切る」が素晴らしい。

自由にどっぷり浸っていて欠伸　池森子

一読羨ましいと思うが、よく考えると不幸な事です。好きな事をし尽して退屈。一度そうなってほしい希望か。複雑な心理表現。

弁解無用あらぬ願いかも知れず　高杉千歩

男も女も愛する人への理解があれば、決してあらぬ願いではないでしょう。「かも知れず」は不安の中に強さがあります。

柵の外不協和音を聞いている　松川芳子

隣近所の人がどうして我が家の事をこんなに知ってるのでしょう。雑音は捨てて進軍ラッパです。「不協和音」が幅広く効いて佳句。

ためらいにいつか指紋がすり切れる　流奈美子

決断がつかず迷うている間に指針が鈍って予定が崩れて不満。先が不安だ。指紋を効果的に生かされた。苦の後は楽。明るい句。

占いが好きな女で婿出来ず　渡邊伊津志

男前、金持、親切で優しい人がきっと見つかります。ただし百点は無理。80点位で手を打ちましょう。女心を鋭く突いた非凡の句。

見破って欲しいひとことだったのに　中尾まゆみ

こんな時はズバリ直言を。聡明で謙虚であっても決断がない。後悔よりも今後は決断。

にっこりと迎えてくれた妻の策　内田結美

ご主人はお見透しでしょう。貴女の強引さ機転を楽しみに次の幕を待っておられる。

だんだんと芝居が多くなる看護　児玉歌子

思いやり。気が利く。ソツがない。患者を安心させる演技が素晴らしい。心優しい人。

地ごく耳良からぬことはよく聞こえ　小五　今本尚子

文才あり末頼もしい。強い賢い敬服の句。

夢積んで崩して夢に憧れる　森脇和子

家族や近親に関する夢でしょう。貴女の親切が邪魔して崩れます。しかし憧れは必ず実現すると信じ持ち続けてください。楽しい句。

好奇心人の噂がねり歩く　沢田きん

人の心のよく読める人の句ですね。小耳に挟めば、楽しい好奇心で色々な脚本ができる。

お伽ばなしとっても好きなさくらんぼ　小林英子

いつまでもさくらんぼのような若々しい気持で、好きなお話を聞く楽しさ、長寿の秘訣。

許そうと心に決めてつのる憎　松本一郎

未練と共に憎も捨てましょう。新しい日に又新しい事が生まれましょう。大人の寛容を。次に楽しく鑑賞させて頂いた句。

諦めに徹する老父に寄りつかず　上田柳影

それっきり亀は頭を出し忘れ　菅田かつ子

未だスネをかじられている手内職　大川幸子

焼石を入れて浜辺の鍋が煮え　永澤裕子

逢えばすぐ崩れる髪をセットする　阿部喜久江

句評リレー

一・二・三月号から

樫谷寿馬
林　はつ絵
安平次　弘道
玉置重人

愛千語吐いて昨日の刺を抜く

辻　文平

寿馬　愛する人からの刺であるので右から左へ抜きっぱなしにはできない。さりとてそのままでは、傷みだけが残る。捨てたくない刺をそっと抜くには、好き好きと言いながら刺の痛みに耐えるのが一番、としか私には分からない。

はつ絵　寿馬さんとは逆に、「刺」は自分から好きな人へのものと思うのです。少年が好きな女の子だからいじめるような。「愛千語吐いて」を愛の告白と思うからですが、どうでしょうか。

弘道　「愛千語吐いて」は愛の告白でしょう。「昨日の刺を抜く」は、今まで愛の告白ができず、もんもんとしていた気持がやっと晴れた、と言うことではなかろうか。素晴らしい表現力に感服。

重人　愛の告白と見るはつ絵さん、弘道さんに賛成。何べんも愛をささやかねば抜けない刺とは、よっぽどやましいことをしたのであろう。男心が哀しい。

寿馬　愚鈍な者が老化すると、ピントの外れたカメラになってしまう。このカメラを修理せねばと、反省させられることしきり。ただ抜いた後は快感なのか、疼いたままなのか。私はその傷味をじっと持っていたいという心情を優先したいと思う。

はつ絵　この「刺」は弘道さんのとおり、今まで告白できなかった自分の胸の疼きととるべきで、激しい愛の表現と思います。

弘道　皆さんの解釈どおり愛の告白の句です。「愛千語吐いて」の表現につきると思います。

重人　愛の表現句として、大方の意見が一致した。愛千語吐いてとはちょっと堅いし、「吐いて」を省いて他の言葉にと考えたが、繰り返して読むうちにやはりこの表現がベストと言う弘道さんのご意見に賛成。

火種くすぶるやがて私はばらを買う

澤田　千春

寿馬　くすぶっていた火種は、愛なのか憎なのか。ばらは美しくもあり、また、とげも持つ。

はつ絵　くすぶったのはもちろん愛。買ったのは、真赤なばらだと思います。デリケートなこころの中をよく表現されていると思います。

弘道　「火種くすぶる」は焼け木杭に火がついて、そして「私はばらを買う」は彼に真赤なばらの花束を捧げるということかな。愛一途の女ごころがよく表現されている。

重人　この句も又愛の句と見るのが妥当でいろいろあったけれど、結局は受け入れる女心がいとおしい。「くすぶる」と「バラを買う」で、愛の過程が見事に表現されている。

寿馬　くすぶりからバラへの急転回か、必然の経過と捉えるかがポイントのような気がする。重人さんに賛成。

はつ絵　重人さんのご意見のとおりで「ばらを買う」は表晴らしい表現と思います。

弘道　前の句と同様に表現の素晴らしい愛の句ですが、前の句に比べてこの句には不倫めいたものを感じる。

重人　弘道さんのご意見のようにあるいは不倫かも知れぬが、間違いなく愛の過程の表現句でいろいろ悩みながら受け入れる気持を下五「バラを買う」で見事に締めくくった。

君少し動きすぎると山がいう

矢野佳雲

寿馬　今は選挙の真最中。このままオバタリアンと称する党首にそっくりそのまま差し上げたく思いますが、作者の意図や如何に。

はつ絵　あれだと言われればその方に動きこれだと言われればまた動く。結局、虻蜂とらず。そうです。目の前のあの山のように、泰然自若となりたいものです。山を見て悟ったことを「山がいう」としたところに敬服。

弘道　はつ絵さんの解釈どおりだと思います。しかし、最近、「山が動く」という言葉がよく使われている。「山が動く」方がスケールの大きい句ができそうです。

重人　擬人法を巧みに駆使した手法である以上、「山」を先輩・上司・教師と置き換え、後輩・部下・生徒の落ち着きなさを注意している図と解釈したら面白いのではなかろうか。

寿馬　全くはつ絵さんのとおりでしょう。動く方も山だと思っていましたが、やはり人間なんですね。

はつ絵　読む人によって、この「山」を大人物ととってもよいと思います。

弘道　重人さんの言われるとおり、「山」は擬人法で、これで良いと思います。しかし、今は「山が動く」時代です。やわらかな頭で対処したいと思っています。

重人　弘道さんの言われるとおり、今の時代動いた山に逆らったらヤケドするかも知れません。ただしこの句、時事吟の匂いがしないでもないが、堅くるしく考えず、「山」の言うこともすなおに聞きましょう。

いい話風に任せてなどおけぬ

西口いわる

寿馬　例えば縁談と見れば女の意地、商売なれば男の欲。優しい女性の方だからきっと情緒のある話でしょうが。

はつ絵　悪事千里を走る。好事門を出でず—などの諺があるが、それとはあべこべに、いい話を喜んで電話などしている微笑ましい情景を思わせるうまい表現に感心します。

弘道　はつ絵さんの解釈どおりだと思います。しかし、風もお喋りですよ。その風にも任せられないとは余程いい話なんでしょう。

重人　いい話をいたずらな誇張、好きな風に吹聴されては大変。流れるようなリズム感で、川柳が楽しくなるような句です。はつ絵さんの解釈に同感。

寿馬　意志と期待の何れを中心に置くか。「おけぬ」という意志と「風」という一見定点のないものとの比。川柳はやはり自然より人間臭さを表現すべきものでしょうね。

はつ絵　巧まず、すらりと気持を表現したいい句だと思います。

弘道　近頃はむずかしい句が多い中で、さらりと気持を表現された手腕はお見事。

重人　読むほどに見るほどに、川柳眼がすばらしい。こんな句に出合うと、自分自身の表現力の乏しさがなさけなくなってくる。読後のコーヒーが香ばしい。

子離れの帽子中々戻らない

吉川　寿美

寿馬　父親の帽子か、それとも母親のそれか分からないが、丸でそんなこととは無関係な抽象か、何れにしても哀しく、はがゆい情景が想われるのが、私のせい一杯の想いです。むずかしい。

はつ絵　寿馬さんのおっしゃるように「帽子」が何かによって、句意がきまると思います。私は上五によって寿美さんの帽子を察し、私も同感です（私の帽子は戻りっこないと諦めていますけど）。

弘道　母親にとって子供は分身である。しかし、子供はいつか、親の元を離れてゆく。「子離れの帽子」は、子離れに揺れる母親の心、気持ではないでしょうか。中々元に戻らない母親の気持が、よく表現されている。

重人　「子離れの」を「親離れ」と置き換えてもよいような気もするが、こういう心象的な句は、下手に解釈するととんでもない方へ流れてしまうのでたいへんむずかしい。

寿馬　弘道さんの言われるとおりでしょう。帽子というものは、頭を保護するとは逆に頭にとっては、邪魔なものでもある。

はつ絵　私はこの「帽子」を（子離れしたらと心に温め描いていたことをやり始めた。そしてこれが私のものですと人にも見てもらえるものになりたいと思っている）。それを帽子ととったので同感と言いましたが、弘道さん、重人さんのご意見を聞き、動揺しております。重人さんのおっしゃるとおり、むずかしいですね。

弘道　十人十色。いろいろに解釈すればいいのです。だから二人選や三人選の場合、一つの句が特選と没に分かれるのです。

重人　やはりこの句、親心と解釈するのが妥当だと思う。「帽子」が考えている数倍も今の子供はしっかりしています。「スパッ」と子離れしてナウイ「帽子」になりたいものです。

肩に手をおかれて星がすべり落ち

土橋　螢

寿馬　星はロマンか、希望か。UFOならばどうしましょう。

はつ絵　素晴らしい夜空に独り美しい想いに耽っていると、急に誰かが肩に手をかけ、現実に戻ったのかなどと思いますが、私には難しく、みなさんに教えていただきたいと思います。

弘道　はつ絵さんの解釈どおりだと思います。現実に引き戻されたのを「星がすべり落ち」と表現された手腕に感服。

重人　「星がすべり落ち」とは、スケールの大きな表現。肩に手をおいた人はなんとも罪なことをしたもので、はつ絵さんの解釈に賛成。

寿馬　「ハッ」とした時、理屈をあれこれ述べるまでもなく、素直に感動しておく。特に小さい事ながら美しい感動はこのように軽く述べるのが最高。こんな句が沢山ほしい。

はつ絵　私も「星がすべり落ち」は素晴らしい表現だと思います。

弘道　素晴らしい表現の句ですが、ちょっと意地悪く読むと、星空の美しいのは愛する人と見るからです。その場合、誰が肩に手を置くのかなと思った。（理屈は止そう）

重人　ハッとした時にすべり落ちた星をいろいろ憶測するのも、この句をより楽しくしてくれる。作句のヒントだとしたら、よっぽど大きな星だったのかも知れない。いずれにしても「星がすべり落ち」に改めて脱帽します。

川柳と外来語

川柳こぼれ話

田中正坊

最近のカナ書き外来語の急増ぶりは、すさまじいものがある。「今、世の中を見ていると日本語で言えることをカタカナで言うことがずいぶん多い。なぜ日本語があるのに使わないのだろうか」（『川柳春秋』15号・〝わたしの川柳作法〟）、「現代川柳を標榜するからは現在の感覚にダイヤルを合わした作品を志向するのは当然であるが、その現われの誤解からか無闇やたらに外来語を用いた句が多いのに目を見張る実情である」（『番傘』平成元年10月号・〝編集手帖〟）と、川柳界でも問題となっているようだ。

それではいったい、外来語とは何だろうか。『外来語辞典』については前回に書いたので重複を避けるが、この問題については私が愛読する岩波新書でも、矢崎源九郎著『日本の外来語』、石綿敏雄著『日本語のなかの外国語』、鈴木孝夫著『日本語と外国語』の三点が出ており、さまざまな角度から現状を分析し、問題点を究明している。

そもそも漢語も外来語ではないか―と言い始めると議論ははてしなくなるので、これはしばらくおくとして、外来語の大半が英語からのもので占められているのは明らかだが、フランス語起源もかなり多く、医学ではドイツ語、音楽ではイタリア語関係が多い。また最近では、ギリシャ語、ラテン語まで登場し始めており、古くはポルトガル語、スペイン語、オランダ語から入り、タバコ、メリヤスなど、すでに日本語化したものさえある。

つまり外来語とは、「外国語から日本語にとり入れられて、日本語として日常で用いられている語」ということになるが、数量的にはどのくらいあるのだろうか。大型の『外来語辞典』では一万語以上を収録しているが、石綿氏は前記の著書で、『三省堂国語辞典』の見出し語総数六五、〇〇〇語のうち、一〇・九パーセントにあたる七、一〇〇語が外来語で占められているとしている。また、国立国語研究所の一九五六年調査では、雑誌九〇種で語彙の九・八パーセント、新聞三紙で一二パーセントが外来語という結果が出ているが、少し統計が古いので、現状はこれに数パーセント上積みしなければならないだろう。

そこで川柳では―ということになるが、手近なところで『川柳塔』四月号の川柳塔欄掲載の五〇〇句（九五人）について見ると、句中に外来語を使っている人は五五人で、使っていない人（四〇人）をかなり上回る。トータルすると八七句（一〇〇語）で、外来語の比率は一七・四パーセントとなる。句数と語数が異なるのは、一句中に二語または三語の外来語を含む句があるからだ。

さて目を俳句に転ずると、この分野ではかなり肯定的らしく、「外来語を詠みこなすために」という副題がついた大野雑風子編『俳句外来語事典』（博友社刊）まであり、人名・地名を含む外来語二、〇〇〇語と現代俳人による参考作品が示されている。

摩天楼より新緑がパセリほど　鷹羽狩行

ここであえて結論めいたことでしめくくるつもりはないが、作句にあたって立派な日本語の一つである外来語を頭から毛嫌いすることがあってはならぬと思う。和語・漢語だけに頼らず、美しい外来語を発掘し、詠みこなす努力を怠ってはならない。ただし、まだ市民権を得ていないことばを新奇をてらって乱用すること、十分に調べないで一知半解で誤用することだけは避けたいと思う。

ほんとうはそうでなかった外来語　白虎

銀河系

河内天笑選

和歌山市　後藤　正子

いきなりの涙を春のせいにして
恙なくわたしを畳む灯を点す
いくつものおとぎ噺が流れ着く

大阪市　小出　智子

春宵一刻夫はテレビばかり観て
シナリオをどんどん変えてゆく次男
何時の間にやら人形も齢をとり

豊中市　田中　正坊

発想転換ピグミーは森を出る
ニッポン過労死　豊かさとは何か
青年の大志庭付き一戸建て

尼崎市　春城　年代

真実をあやふやにして老いたのし
ふまじめに生きてみなさい春の闇

米子市　林　荒介

四ッ手網まぶしいものを踊らせる
宴果てて一人ひとりとなる電車

宇部市　中村　三良

ピーマンの空洞にある世迷い言
温室の花で如才のない笑顔

今治市　矢野　佳雲

楢山へ行くまで見てるあさきゆめ
重荷にはなりたくないのさようなら

米子市　八木　千代

枕が固くて夢を置かねば眠れない
逃げも隠れもしない夜店の金魚です

西宮市　奥田　みつ子

魂の綻びを縫うショパン聞く
虹色のセーターを買う春の午後

鳥取県　新家　完司

弾まない男ばかりの宴かな
魚たちよ阿呆な男に釣られるな

和歌山市　堀畑　靖子

胃カメラを飲む順番を待っている
新しい私発見したい春

藤井寺市　福元　みのる

猫好きのお客を猫はお見透し
夢抱く流民に法は容赦なし

姫路市　大原　葉香

湯煙の旅をゆめ見る車いす
気休めに食後のくすりのんでます

兵庫県　酒井　靖子

愚痴みんなぶっちゃけられる友の籠
矢の如く敬語で急所せめられる

兵庫県　遠山　可住

笑うたら済むことだったなあ昨日
銀行は外車で借りに行くところ

米子市　光井　玲子

熱燗で心の襞が伸びるなら
今過ぎる時間にはっと追いすがる

広島市　名和　喜一郎

ぴったりの演歌を聴いて思慕つのる
気がつけば味方ばかりと飲んでいる

鳥取県　さえき　やえ

婦人科で春の安心もろてくる
聞かん子に三重丸をつけてやる

堺市　小西　小雪

ぼたもちを二つだけ買う春彼岸
自我の芽を大人が摘んでいませんか

羽曳野市　田中　透太

過労死を知っていますかお父さん
スピードの出し過ぎですよお嬢さん

砂川市　大橋　政良

あっという間の一日の鬼ごっこ
嘘少しまぜると書ける私小説

黒石市　相馬　一花

帰宅してボロに着替える美人妻
上戸より下戸の悪酔い恐ろしい

豊中市　滝北　博史

美人秘書社長夫人へ辞表出す
仲直りして布団干す五月晴れ

堀市　桜沢　あか里

余裕ある仕切り直しをしてみよう
一夜漬のがんばり侮ってはならぬ

米子市　政岡　日枝子

ライバルにうっかり見せた足の裏

花も疲れて夜はひっそり休みます
堺市　高橋　千万子

人生のあやとり遊ばす指がない
渋滞に銀行のドア降りかかり
川西市　松本　ただし

運のない汗ふきとっているタオル
亀よりもとぼけた兎好きになる
和歌山市　田中　みね

意のままに雑魚が動くと見た誤算
冬眠から覚めていっきょに翔ぶ構え
出雲市　森山　健歩

もう少し落ちてみないと悟れまい
寝屋川市　堀江　光子

女王にかしずくに似る蘭の世話
鳥取県　上田　俊路

ストロボの一瞬笑みが凍りつく
大阪市　町田　達子

B面は語らぬままのお付合い
岡山県　富坂　志重

思うこと言えずに苺つぶしてる
田辺市　染道　佳明

自転車をぎこぎこ漕いで午前様
和歌山市　寺田　裕美

別れ道軽い荷物と持ちかえる
米子市　金山　夕子

大切にしたいあなたとの共感
大阪市　渡辺　さと美

幸せはあなたと響き合えるから
西宮市　西口　いわゑ

遠眼鏡別れた人を映し出す
名古屋市　藤井　高子

ハンカチの汚れ渡世に疲れたか
鳥取県　江原　とみお

春や春男結びがゆるみだす
米子市　茂理　高代

考える人で話が進まない
奈良市　米田　恭昌

音量がやけに大きい新世帯
名古屋市　越村　枯梢

断末魔のうめきも五七五でゆこう
堺市　井上　たかし

神さんが寄付せいなんて言いますか
松原市　小池　しげお

口裏を合わせに来たがそれっきり
大阪市　家村　高雄

こんな人親戚かいな披露宴
和歌山市　堀端　三男

お愛想をするのにコツの要るお方
羽曳野市　福田　満洲

風邪の神あほもかしこもなぎ倒し
大阪市　宮本　欣史子

バンザイで島を出たから戻れない
堺市　近藤　豊子

見送ってポストのように佇ってます
海南市　三宅　保州

待合室が特効薬のおばあちゃん
有田市　松井　かなめ

よう喧嘩するが気の合う友がいる
堺市　宮本　かりん

引き算ばかりしてきた母のわらべ唄
米子市　服部　朗子

風を切る青さがとても魅力的
鳥取県　西浦　小鹿

真っ白いノートの中で夢をみる
大阪市　富上　朝世

雨傘を開く私の空ひらく
尼崎市　春城　武庫坊

少年と話すと腹がすいてくる
寝屋川市　坂上　高栄

温めてかけてあげたい甘茶かな
秦野市　三原　浮木

童心に帰り老婆の露天風呂
静岡市　大神　静枝

ねそびれて柱がきしむ春の闇
堺市　山本　半銭

傷心へ黙って盃を持たす
岸和田市　島崎　冨志子

救われた輸血にひそんでいた悪魔
岸和田市　古野　ひで

雛祭る家からおすし届けられ
大阪市　板東　倫子

閑居して謀反の虫を抱いている
出雲市　小玉　満江

くず籠に寒い手紙は捨てられる
京都市　松川　杜的

スランプを生きる尺八吹いてみる

米子市　小西　雄々
蓮根の穴から世間見て飽かず

倉吉市　奥谷　弘朗
聞く方に回ればきっと楽になる

岡山県　矢内　寿恵子
したたかに伸びた枝から背かれる

熊本県　立道　英子
すみませんただこれだけが何故言えぬ

和歌山市　松原　寿子
時間よ止まれもすこし傍にいたいから

倉吉市　渡辺　菩句
君から見れば僕などきっと馬の骨

宝塚市　丸山　よし津
ダイヤ狂うてわたしの貨車がやっと出る

大阪市　山北　三三三
美しい黒髪を持ち苦が多し

大阪市　稲本　凡子
ああ誤算年金だけで暮せない

姫路市　中塚　遊峰
嫁とらぬ息子へ老母のひとりごと

京都市　山本　規不風
飯十杯痴呆集中治療室

和泉市　西岡　洛酔
意地悪婆さんの翳り妻もそんな歳

弘前市　真喜内　實
腰掛けた椅子に極楽ありました

和歌山市　桜井　千秀
おおまかな歩幅で目安つけておく

和歌山市　西山　幸
発車ベルがいつも心の中にある

米子市　足立　由美子
小雀が大きい話ばかりする

鳥取県　土橋　螢
有難いはなしにいつも負け惜しみ

倉吉市　淡路　ゆり子
一言が飛んで来そうな夫を避け

大阪市　中西　兼治郎
税務署へ行くとは見えぬ飾りよう

和歌山市　古久保　和子
おばちゃんと呼ばれてつくり笑いする

大阪市　亀井　円女
大事な老後もう面倒はお断わり

米子市　林　瑞枝
嬉しさに微熱つづきの昨日今日

竹原市　信本　博子
子の便り無い文字までも母は読む

姫路市　丁坪　サワ子
年寄りが出るとむつかしなる話

和歌山市　山田　高夫
立ち話他人の傷に触れたがる

羽曳野市　高田　美代子
無理したらアカンと神の声がする

寝屋川市　江口　度
失恋の箸ほど重いものはない

寝屋川市　岸野　あやめ
さりげなく別れ再び逢わぬ人

大阪市　尾崎　黄紅
二十一世紀を見たい老いの欲

笠岡市　松本　忠三
お昼だと言うにテレビの不作法な

米子市　新　正子
ビール三本許されている世帯主

豊中市　辻川　慶子
伝言板は丸文字ばかり春の風

大阪市　北　勝美
お水取り風が運んでくるくしゃみ

和歌山市　山口　三千子
院へまだ二年行くのよオッホッホ

和歌山市　田中　輝子
滑り込みセーフで生きる楽しさよ

和歌山市　山川　克子
叩かれる前にゴンタは逃げていた

和歌山市　青枝　鉄治
逃げる手を先ず考えるお役人

出雲市　竹治　ちかし
子の未来託す地球が病んでいる

守口市　結城　君子
あかり消しオーロラの美にため息す

今治市　越智　一水
二種農家趣味でやってるのでないぞ

町田市　竹内　紫錆
快眠につなぐタイマー付きテレビ

茨木市　藤井　正雄
白魚の郷土料理をビルの地下

寝屋川市　稲葉　冬葉
三浪へひげの手入れは行き届き

岸和田市　三輪　通彦
儲けには国境はなしニセ金貨

出雲市　吉岡　きみえ
合掌していただいてます白いめし

岡山県　千原　理瑛
保護色はもう要りません晒し首

米子市　中井　ゆき
昇華して恋も貴方も星になる

鳥取県　西原　艶子
夫には見せてはならぬ預金帳

東大阪市　大平　太一郎
還らない今を大事に種を蒔く

弘前市　波多野　五楽庵
踏切りの貨車を見ているノスタルジア

大阪市　桝本　露児
ビロードの黒に思考がとけてゆく

唐津市　山口　高明
妊って妻の嗜好がかわり出す

唐津市　福島　紀一
卒業式別れたくない人がいる

広島県　田村　新造
ささやかな打上げだった紙コップ

米子市　小塩　智加恵
手作りの味噌開禁日あと十日

羽曳野市　吉川　寿美
怖いもの見たさで覗く古い井戸

和歌山市　木本　朱夏
流すには想いが残るお雛さま

兵庫県　倉垣　恵美
意地のあるしじみで砂をはきませぬ

富田林市　松本　今日子
専業主婦　辞表出したい時があり

和歌山市　内芝　登志代
花咲けば栄転左遷の風が吹く

和歌山市　福本　英子
逢うてきて今朝の茶柱信じます

奈良市　米田　芳子
フルムーン今日おだやかな東尋坊

鳥取市　小谷　美っ千
菜の花とうぐいす餅に満たされる

香川県　木村　明人
梅一輪部屋に飾って春を呼ぶ

鳥取県　土橋　はるお
ぷっつり切った女の寝言言ったとか

木次町　小砂　白汀
対岸の山が金冠つけはじめ

唐津市　田口　虹汀
梅は茶に桜は酒に馬が合い

広島市　中村　要
大根の白さよ妻のふくらはぎ

米子市　田中　亜弥
春が来る模様替えなどいかがかな

大阪市　塩田　新一郎
花楽しかれば蕾は尚更に

鳥取県　乾　喜与志
手ぶらの俺を鹿はきょとんとした顔で

岡山県　松本　元江
菜の花に昼間の話聞く銀河

唐津市　入江　喜久亭
病む父に安心させる嘘ひとつ

鳥取市　武田　帆雀
歯車を替えても職場よく軋む

鳥取県　近藤　秋星
落選の上に逮捕者たんと出し

吹田市　栗谷　春子
はぐれ雲はぐれながらもついて行く

奈良市　井上　大
花博の花より話題先に咲き

岡山県　福原　辰江
大物を引き込む蟻の心意気

岡山県　伏見　すみれ
約束をお風呂の中で思い出し

鳥取県　谷口　次男
楽しくてやがて寂しくなる祭

大阪市　津守　柳伸
おふくろの味エプロンのバイタリティ

茨木市　堀　良江
芽吹く音木々にもうちの息子にも

静岡市　渥美　弧秀
終章を飾るピアノに精を出し

香川県　工藤　吟笑
帰り道心を読まれそうな月

和歌山市　森　茜
輪をそっと抜けると匂う沈丁花

青森市　工藤　甲吉
空空漠漠訪ねくる人もなし

▼投句先＝川柳塔社事務所（3句連記）

女性コーナー

黄香の花

八木千代選

凜として猫にも親の顔がある　茨木市　堀　良江

人間だって哀しい動物ですが、親となってからの動物は、自立させるまでに、深い愛情をこめて生活の知恵を繰り返しくりかえし教えこみます。親と子の睦まじい暮らしの中でも、やがての別れの近いことを本能で察知しているからでしょう。「凜とした親の顔」を持たねばならぬのは人間の方でしょう。いい句に出逢えました。親になるということは、大きな愛と説得力を持つ努力が要るということでしょうか。

誰よりも好きで嫌いなのが自分　西宮市　奥田みつ子

すらすらと言い切ってあるように見えますが、ここに気がついたということは、どれだけの思いを重ねられたことか。気がついてもなかなか書き切るのはできないものです。誰よりも大切な自分を愛しそこねて、憎まねばならない場合の私を許してしまって、そんな自分が嫌でたまらなくてかわいそうで、そのジレンマから来る心の葛藤が、みつ子さんを川柳に向かわせます。

火柱を握りつぶしたのはこの掌　島根県　松本　文子
薔薇も老いて激しきものをもう追わぬ　名古屋市　藤井　高子
梨を剝く私　わたしを剝くように　米子市　林　瑞枝
振り逃げたあとの夕日が赤すぎる　富山市　舟渡　杏花
辻褄を合わすと　ひとり行方不明　和歌山市　福本　英子
うちの墓　身元不明の骨がある　大阪市　田中　弘子

枯れ葦は枯れた誇りで立っている　西宮市　林　はつ絵
大きい山を越える明るい道にでる　米子市　政岡日枝子
山の向うはもう春ですか雪菩薩　藤井寺市　高田美代子
待っていた春とはこんな春じゃない　吹田市　栗谷　春子
花寒むのあとさきにある迷い癖　和歌山市　後藤　正子
一生に一字が書けぬ愛という　倉吉市　淡路ゆり子
北側の四畳で本を食べている　尼崎市　春城　年代
許す気の電話へ誰も出てこない　八尾市　宮西　弥生
わたくしだけの人生ならば存分に　堺　市　板野　美子
足してまた足して負数がつきまとう　和歌山市　西山　幸
ロッキングチェアー楽観論もほどほどに　大阪市　西出　楓楽
生き恥を知るのも知恵のうちだろう　米子市　茂理　高代
真実一路感情線が切れている　寝屋川市　稲葉　冬葉
正調のつもりアレンジしてしまい　和歌山市　松原　寿子
偽証罪いくつも咲かす赤い花　羽曳野市　吉川　寿美
身の程にあわせた池を掘っておく　米子市　寺沢みど里
泣きたくば勝手に泣けと聞いた耳　寝屋川市　岸野あやめ
ほっとするわたしの部屋の落とし蓋　兵庫県　倉垣　恵美
着地する下が芝生であるように　和歌山市　田中　輝子
かけ離れた立場が語る面日さ　貝塚市　池田恵美子
納豆にまで命乞いするわたし　米子市　田中　亜弥
ゴム紐の要領ですというけれど　和歌山市　山川　克子
イヤリング春爛漫と行きましょう　大阪市　上江洌勝子
恋人がいなくて春も近寄らず　富田林市　池　森子
階段の歩幅が合って知らぬ女　和歌山市　砂山千枝子

薔薇の匂い言葉にすれば嘘になる　鳥取市　小谷美っ千
女系図に蓑虫ぶらりぶら下がる　出雲市　園山多賀子
革命もならず小っちゃな鐘鳴らす　富田林市　片岡智恵子
たまに弾くピアノへ猫が寄ってゆく　大阪市　堀　いくの
胸襟を開けばきっと笑われる　鳥取市　西原　艶子
ちちははの願いは神に届く頃　米子市　川上より子
川の音　娘へ送るものばかり　倉吉市　野中　御前
人のいない時に咲くのは白い花　米子市　沢田　千春
鬼の面借りて自分に勝ってゆく　大阪市　神夏磯典子
他人様にどんなに写っている私　和歌山市　内芝登志代
袋縫いがきっと上手なカンガルー　米子市　新　正子
間違って針のむしろに座らされ　松原市　佐藤　奏月
春の闇深まるなかれ友が逝く　大阪市　島村美津子
足も手ものばしてごらん良く伸びる　田辺市　染道　佳明
花の名を三つ覚えて春といる　倉敷市　田辺とし子
自尊心桐子は檻を出たがらぬ　大阪市　津守　柳伸
自転する地球にいつも乗り遅れ　出雲市　吉岡きみえ
髪染めて黒くするとは限らない　堺　市　山本　半銭
初彼岸好きなお酒でございます　鳥取県　さえきやえ
いぬふぐり一途なこころつたえよう　米子市　青戸　田鶴
ピーマンも春を身籠もるいい匂い　大阪市　冨上　朝世
許されて許して会話途切れない　堺　市　高橋千万子
耕した土壌が笑い吸うてゆく　和歌山市　桜井　千秀
銭湯で逢わなくなったおばあさん　大阪市　鈴木　節子
夫似の子がやさしくてやさしくて　京都市　本荘　福子

疵口の一つとわたし添い遂げる　米子市　光井　玲子
病む月のわけて雨降る日の多く　枚方市　森本　節子
さわやかな風が迎えるいろは坂　岡山県　矢内寿恵子
大内人形　仲良くおしとすわり込み　米子市　小村てい子
間題を掘って穴ぼこばかり出し　大阪市　向井しづ子
水源の小さな流れに嘘がない　和歌山市　古久保和子
友のピンクをわたしも買いに春の街　西宮市　門谷たず子
淡雪も短い手紙もたよりなげ　和歌山市　森　茜
桜が散らないうちに逢いましょう　米子市　金山　夕子
三っ目の角を曲がって走り出す　堺　市　桜沢あか里
熱湯にお水を入れて味気ない　米子市　服部　朗子
埃まみれでも居座っている造花　宝塚市　丸山よし津
いつでも鬼は胸に涙を溜めている　大阪市　本間満津子
わたくしを庇ってくれた傘がある　和歌山市　木本　朱夏
迷い筆幸せいろを黒くする　竹原市　信本　博子
お食い初めすんで他人の好ききらい　寝屋川市　平松かすみ
あんず咲き私もじっとして居れぬ　米子市　中井　ゆき
人を待つあいだの長さ風の櫛　岡山県　山本　玉恵
切れそうな糸で逢いたいまだ逢えぬ　佐賀県　寺中三枝子
母を看るふと私の行く末を　豊中市　辻川　慶子
生き続けて金ですむこと八分ある　有田市　松井かなめ
ジグソーパズル埋める虚しさを埋める　羽曳野市　芦田　絢子
森の声春が来たよとこだまする　鳥取市　前田　一枝

◇

投句先　〒683　米子市花園町14の8　八木　千代

矢

椎江清芳選

通し矢を競う成人式の顔　通彦
飛んで来る矢は前からと限らない　京子
妻の矢の防ぎ方なら知っている　喜一郎
老妻が矢鱈やさしく無気味なり　恭昌
親の矢は急所を外ずように射る　ちかし
まだ俺もまんざらでなし白羽の矢　章久
ライバルへ一矢報いる策を練る　芳水
放たれた矢は後戻り叶わない　ちよ
春の風キューピーの矢も乗せてくる　みつ子
帰心矢の如く出稼ぎ荷をまとめ　佳雲
つがえたる矢に標的が見当らず　あずき
矢印があっても迷う地下出口　義美
七人の敵に射る矢をかくし持つ　彩子
ハートに矢刺さって笑うキューピッド　あやめ
でしゃばって流れ矢もろに受ける羽目　高子
矢絣の亡母の古着が手離せぬ　テル
白羽の矢受けた男だ背は向けぬ　シマ子
どん底で矢尻を研いで刻を待つ　清柳
細くても我が家の宝矢が一つ　智加恵
矢印を頼りに歩む風の中　豊
為朝も与市もロケットには勝てず　やすお
矢面に立つなと妻が袖を引く　高明
矢絣のモンペが母の青春期　宵明
矢の届く位置に影武者置いてある　しげお
忍び返し越えて矢文が跳んでくる　多賀子
折れた矢をそっと包んで温める　玉恵
盛り場でライバルの背に矢を向ける　路児
甘く見た亀に不覚の矢を射られ　寿美
受けた矢の数だけ男太くなり　たつみ
通し矢のドラマが続く二十四時　愛論
羨望の的へ嫉妬の矢が刺さる　高夫
アドバイス無視し不覚の矢を受ける　〆女
三男に立った白羽の矢は養子　兼治郎
折れた矢を砂丘で拾うサスペンス　雄々
正論を通し左遷の矢が刺さる　諷云児
昇進の椅子の手前で矢が落ちる　明水
矢をはずす恋の奥義を教えられ　螢

佳

矢車がとまると鯉がぶら下がる　倫子
返し矢を放つと罪が重くなる　元江
英雄の壁画矢の来る死角あり　四郎
矢面に立つネクタイを締めなおす　重人
喝采の矢の一本が背に刺さる　裕美

人

矢印へ喪服が急ぐ風の町　新造

地

矢玉つき太郎が帰る五月闇　正坊

天

籠(ふご)にはもう矢が見えぬ敗けいくさ　妻子

軸

三本の矢を語るにも子はいない

振る

田中笑風選

振り向くと夫がそこにいる安堵　サワ子
一枚の辞令男を振り回す　鉄治
振り向けばたしかにあった青い鳥　幸子
無い袖を今日も振ってる父の塔　妻子
残念ながら私も尾を振る術がない　枯梢
振り上げた拳の中にある情　雀踊子
振り返る顔憎しみは消えて居た　右近
振り向いたばかりに渦に巻き込まれ　よし津
首を振る張り子の寅と話する　規不風
お膳立て振られる役で良いピエロ　ただし
振り逃げということもあり運を待つ　可住
振り切って出たと思えぬUターン　雄々
振り切って明日を見つめる束ね髪　輝子
タクト振る母真ん中にいる平和　和子
振り分けの荷物が軋む夫婦坂　玉恵
棟梁の眼に狂いない下げ振子　早苗
ペンライト振る青春が欲しかった　あずき
棒に振る椅子へ他人が来て座り　高夫
振り上げたこぶしに野心などはない　たつみ
サイコロを振る才能は持ってない　美津留
振り向けば種火が疼く沈丁花　京子
手を振って少女楽しい別れする　杜的

嫁ぐ娘へ母の振り子がとまらない　度
振り向いた般若の面が笑ってる　俊路
腰振って毎日うまく生きている　小鹿
手を振って別れる花の散らぬ間に　螢
仮病まで使い一日棒に振る　木魚
尻尾振ることも覚えた処生術　通彦
手を振れば支持者と思う選挙カー　義美
ゴム風船一つにバイバイしてくれる　迷観子
白旗を振って男が生き残り　清芳
マドンナが旗振りだしてややこしい　喜一郎
敵だけが拳振るとは限らない　狸村
母が振る鈴は私を庇う音　美代子
一寸賢くて出世を棒に振り　みつこ
振子時計亡父も聞いてた同じ音　みつ子
黄色い旗振って今日も無事でした　路子

佳

いい縁というのに父は首振らぬ　佳雲
振り返る事のみ多き老いの坂　ちよ
鈴ひとつ振って一つの願いごと　正坊
幸せのリズムは妻が振るタクト　ちかし
振り袖がひとり成人したように　良江

人

無い袖も振らぬば長女二女三女　南奉

地

ハンカチを振って未練はないですか　多賀子

天

父の振る旗を信じてついてゆく　諷云児

軸

日の丸をいっぱいに振る山男　多賀子

コップ

森下愛論選

噂ならなんでも好きなコップ酒　喜一郎
コップ酒ロレツに傷をうめている　〆女
コップ酒黙ってグチを聴いてやり　次男
コップ酒今日一日の愚痴流す　富恵
出稼ぎの苦労いたわるコップ酒　サワ子
立ち呑みの口が受け取るコップ酒　高栄
本音をば聞かせてくれるコップ酒　有一朗
コップ酒男に逃げる場所がある　三千子
コップ酒親父今夜は荒れている　虹汀
肩書は知らぬ同士のコップ酒　保州
コップ酒一気に煽る訳がある　重人
毒舌がますます冴えるコップ酒　諷云児
コップ酒酔んで裸のお付き合い　やすお
コップ酒次から次と喋るネタ　浮木
雲つかむ話がつづくコップ酒　壽恵子
コップ酒話の種をたんと聞き　志重
コップ酒思い思いの鬱を注ぐ　彩子
造花でもいいなコップに花が欲し　きみ子
ささやかに打ち上げしよう紙コップ　新造
乾杯のコップに妬心沈ませる　よし津
乾杯のコップ味方と限らない　寿美
乾杯の力に凹む紙コップ　宵明
コップ持ったままの挨拶まだ続く　哲静
乾杯のコップ一つが様になる　杜的
かくし芸コップ一つの置き処　高子
コップ一杯シュワッと初夏の涼を飲む　元江
ビール注ぐコップに愛を入れましょう　小鹿
コップから朝のハミングこぼれ出し　希久子
キャンドルがコップに写るフルムーン　章久
うつくしい別れにしたい紙コップ　雀踊子
定量の寝酒のコップでもう鼾　隆
空っぽのコップが知っている家計　笑風
紙コップの底に不安な尿の色　裕美
一ひらの花が彩る紙コップ　俊路
それからの出会いを待っているコップ　可住
酒で死んだ男の墓のワンカップ　しげお

佳

コップ一杯に思い浮いたり沈んだり　玉恵
言い過ぎを後から悔いているコップ　正坊
呑み干したコップの底に浄土みる　露児
バラ一輪コップで思案して暮れる　雄々
華やいだグラスの底にある謀反　敬

人

夫婦喧嘩コップの中の嵐だな　みつ子

地

水入れたコップ並べて歌が出る　保夫

天

紙コップ内緒ないしょの糸電話　清柳

軸

交番もコップに時季の花を挿し

初歩教室

題 ― 誘う

辻　白渓子

今回の課題は、平凡なだけに軽い着想の句が多く、それだけに新鮮味に欠けていたように思います。また、上五を下五に置きかえてみるのも、大事なテクニックです。

南座の見納め総見義理はたし　明吉
（南座へ誘うて義理が済む総見）

誘われて軽い気持で共白髪　高栄
（あの時の誘いがもとで共白髪）

口笛で出て行くことを友と決め　春風
（口笛が誘いの合図だと分り）

誘い合い行ったバーゲン目の保養　志重
（目の保養するバーゲンに誘われる）

露天風呂女五人が誘い合う　金吾
（ギャルたちが誘うてはしゃぐ露天風呂）

旅籠と言う看板誘うバスに乗る　美代子
（バス誘う旅籠中仙道の旅）

誘われた梯子酒にはわけがある　小鹿
（梯子酒へ誘い本音をやっと聞き）

人の世なのに涙を誘う記事がある　艶子
（その記事が涙を誘う朝刊紙）

お誘いの電話で親友と長話　好花
（お誘いのついで電話の長話）

誘われてその気になってはぐらされ　サワ子
（誘われてその気になった悔い残る）

誘惑に乗っても見たい若い寡婦　ふさ子
（誘惑をさせる魅力を持った寡婦）

お茶だけと誘い長居の客になる　絢子
（お茶だけの誘いへ長居して困り）

お誘いがかかればいつも飛んで行く　円女
（お誘いを待ってたように付いて行く）

定退の夫を句会に誘う幸　彩子
（定退の夫誘うて句座にいる）

悪友誘い会席膳を囲む昼　彩子
（悪友と誘い合わせて蟹の膳）

暖かさ病人戸外へ誘い出す　秀香
（病人を戸外に誘い出す陽気）

旅行好き誘わるたびに行きたがり　姫女
（旅行好き誘いカタログ見せておく）

今日も又旅の誘いのビラ貰う　(二)和子
（ポスターが春の南紀に誘うてくれ）

誘われてお彼岸参り友多し　織
（お彼岸へ誘い仲間の多い連れ）

うっかりと乗った誘いで恥をかく　芳水
（うっかりと誘いに乗ってしもた悔い）

断わって欲しい誘いに汗が出る　保夫
（お誘いを断わるつらい汗を掻く）

誘い水少し振り掛け本音聞く　(古)和子
（誘い水やっと本音へ辿りつく）

二次会に誘い割り勘払わされ　呼風
（二次会の誘い割り勘とは知らず）

事もあろうに老人会へ誘われる　時弘
（老人会へうっかり誘い嫌がられ）

甘すぎる誘いの舟に乗る不覚　静子
（うっかりと甘い誘いに乗った悔い）

安心を買うて保険に入会す　君江
（安心にふれて保険に誘い込む）

あのわるが誘いを掛けて来なすった　敬
（悪友の誘いと勝手に妻が決め）

誘いかけ二つ返事に迷い出す　隆
（誘うたらのってこられたので慌て）

好きな人誘われてみたい梅の頃　昭子
（梅を見に誘うてくれた好きな人）

出不精の夫を誘う孫の声　義
（出不精も孫が誘うと腰を上げ）

誘われていつもの愚痴を聞くベンチ　美子
（愚痴聞かすためにベンチへ誘われる）

簡単に誘われて慎重な悔いとなり　すみれ
（簡単に誘うても返事してくれず）

五時終り仲間誘うて赤のれん　繁男
（五時からの誘いいつもの赤のれん）

不登校児それでも誘いを待っている　みつ子

（登校拒否悪い誘いが来て困る）
広告のツアー停年誘われる　㈤美恵子
（定年を誘う手頃なツアービラ）
誘われるうちが華だと独り言　幸枝
（お誘いがかかり善人人気者）
電柱にこわい誘いの高利貸　しづ子
（電柱に高利へ誘うビラがある）
誘うだけ誘うてみるのもお付き合い　高雄
（本心でないが誘うておくお世辞）
友達の親に誘われ塾通い　春子
（塾通い友の親にも誘われる）
老夫婦誘い合いつつ病院へ　侑里
（病院が好きで老人誘い合い）
空の旅誘うチラシに夢を描く　敬子
（空の旅異国の夢へ誘う文字）
ランドセル誘う相手が出来る春　露芳
（誘い合う相手が出来た一年生）
そもそもはあなたがかけた誘いなの　岳夫
（責任の回避誘うたのは貴方）
断った誘いに未練まだ残り　一枝
（お誘いを断り未練が残る悔い）
気の合うた友誘い合いカニグルメ　ミツエ
（カニグルメ弱味をついて来た誘い）
彼氏には彼女を誘う人の良さ　太一郎
（友達の彼も誘えと無理を言う）

誘われた旅の相部屋火種つけ　芙美子
（誘われたツアーの相部屋も楽し）
湯上がりで色気ぷんぷん匂ってる　昭治
（湯上りの色気誘うているタオル）
禁迫る人を誘うてカニ喰いに　章久
（蟹食いに誘われ貯金おろしに来）
薫風に誘われ山を散歩する　三千子
（薫風に山にお出でと誘われる）
買物を誘う子供の強かさ　方子
（買物を誘う子供に当てがある）
呑み仲間誘うた罪をかばい合い　一乗
（悪友の誘いに乗った事にする）
誘い出す言葉を選っている刑事　純子
（誘い出す刑事のゆとり煙草くれ）
バーゲンに誘惑の手が買い漁る　志華子
（誘惑で来たバーゲンの手が絡む）
読んでやる祖母が夢路に誘われる　芳枝
（絵本から誘う神話にある興味）
誘われて来た湯けむりに亡夫をみる　豊子
（湯けむりの思い出変らぬ露天風呂）
大安売り勧誘のビラ見て走り　㈢三恵子
（安売りのビラに誘われ足を止め）
還暦になりましたなどと老け始め　隆雄
（還暦になって誘いをうるさがり）
部下誘い結局お邪魔虫になる　㈥和子
（迷惑な誘いを上司強いたがる）

一番風呂誘うて始まる旅の朝　章久
（朝風呂へ老人誘い合うた宿）
誘われて誘って友の輪の中へ　君江
（誘われて友と入った踊りの輪）
花博の世界の花が誘い来る　ミツエ
（花博へ誘い世界の花が待つ）
浪費好き誘いさそわれ行く巷　ふさ子
（浪費癖直らぬ妻を連れ歩き）
送別会課長誘うと一封出し　繁男
（気の利いた上司で誘うと出す寸志）
誘われて遅参は彼の生きる知恵　太一郎
（誘うてもおくれる癖が彼にある）
新免許誘われたとて乗りません　侑里
（取りたての免許へ誘うので弱り）
今回の着想・表現が秀れている句　春風
花博の誘い孫から切符くる　志華子
誘われて公開録画の裏を見る　呼風
ジョギングに誘って煙草止めさせる　彩子
嫁いだ娘誘って春の色を買う
私の句
二次会の誘い新婚抜けたがる
善人を誘うとことがばれやすい

◇

題「**先走り**」**5月15日締切**（7月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3―19
ハガキに**3句**以内　辻　白渓子

羽原静歩句集発刊記念

本社 四月句会

四月六日(金)午後五時半
メンズファッションセンター

しばらくぶりの句集発刊記念句会とあっていつもとは少し違ったふんい気で、参加者全員に豪華な句集が贈呈され、兼・席題と選者もはるばる新宮市から来られた大矢十郎氏はじめ著者の要請をいれる布陣となった。

はじめに一路賞・各地柳壇賞の表彰式が行われ、一路賞の牛尾緑良(野村太茂津代理)・各地柳壇賞の吉岡美房両氏に西尾栞主幹から賞状と盾が授与され、ゆかりの句会から花束などが贈られた。

おはなしは吐田公一氏。昨年の十月句会に続く宝石の話パート2、石の多孔質を利用して染色したり、放射線処理で変色させたり、カットの仕方によって輝きが異なるなどの珍しい話をたっぷり。要するに素人では分からぬことが多いので、購入店と別の所で鑑別してもらうなど、念には念を入れて鑑定することがアドバイスされた。

続いて羽原香苗さん(静歩氏夫人)が本人に対する柳友の友情に感謝するあいさつを述べられ、城北川柳会と本社常任理事会からそれぞれ夫妻に花束が贈呈された。

初出席は、小糸昭子・板東倫子(大阪市)荒川みよ子(堺市)の三氏、月間賞は橘高薫風氏が獲得した。(正)

(進行—天笑)(受付—美代子・昭子)
(記録—射月芳・月子)

出席者—薫風・美幸・満津子・典子・小糸昭子・達子・節子・紫香・美智子・悟郎・萬的・白渓子・太茂津・凡九郎・杜的・武庫坊年代・柳宏子・雅文・十郎・敏・ただし・倫子・射月芳・みつ子・静歩・香苗・安藤寿美子・東雲・章久・狸村・房子・しげお・眉水すすむ・静子・勝美・トメ子・小林英子・千秀・寿子・二南・喜風・悦郎・いわる・はつ絵・結実・笛生・公一・規不風・重人・諷云児・利武・三男・小路・洋敏・正坊・福本英子・たず子・柳伸・幸・恭昌・楠昭子・美代子・柳影・岳人・楓楽・亜成・美房・栞・文秋・愛論・寿美・透太・鬼遊・吸江・みよ子天笑・月子・憲太郎・英壬子・一二三・庸佑元紀・頂留子・吐来

席題「出逢い」　西山　幸選

花博の出逢い西から東から　静歩
この出逢いふたりの恋のプロローグ　寿美
ライバルに出逢い人間磨かれる　悟郎
出逢いから天ぷらうどん好きでした　岳人
地下鉄で出逢い花博で出逢い　三男
よき出逢いいきなり眼鏡外させる　薫風
出逢いから間違いだった夫婦箸　福本英子
初めての出逢いに揺れる丸木橋　諷云児
出逢いまでナンデ話さないかんのや　凡九郎
ある出逢い二人でのった渡し舟　たず子
妻よもう二人の出逢い忘れたか　吸江
別れようとひとりで決めてきた出逢い　しげお
出逢いから互いに好かんなと思い　柳宏子
山門をくぐって出逢う弥陀の風　正坊
ねんねこの出逢いこどもを一人ずつ　静歩
もうすこし早かったらという出逢い　射月芳
偶然に出逢ったことにしておこう　美代子
つばめ飛ぶ思わぬ人に逢えそうな　みつ子
てのひらで一つの出逢いあたためる　美智子
師の句碑に出逢うた杜に桜散る　太茂津
一瞬の出逢いが赤い糸となり　愛論
出逢い以後ハイネの詩がわかり出す　楓楽
真っ直ぐに歩いて三叉路に出逢い　満津子
私の生活を変えにきた出逢い　月子
出逢いから好きになれずに夫婦です　狸村
人妻の出逢い重荷になってくる　洋敏
それからの味方も敵もいる出逢い　美幸
味のある言葉に出逢う花の芯　太茂津
出逢ごとにうろこが一枚ずつ落ちる　規不風
出逢から池の波紋がおさまらぬ　たず子
あの日の出逢い潮騒が未だ残る　杜的
さくら咲く頃に出逢うと決めておく　しげお

佳

春風に出逢うと恋がしたくなる　武庫坊
あなたとの出逢い矢印見失う　結美
満開の桜が待っていた出逢い　笛生
出逢いから鼻緒が切れていた暗示　英壬子
いい出逢だったと言おう死に際に　福本英子

人

目のうろこはらりと落ちたある出逢い　楓楽

地

吊り革が揺れて出逢いが深くなる　結実

天

人生に水の出逢いと火の出逢い　薫風

軸

さくら散る出逢いひとつを温めて　幸

兼題「縁」　羽原静歩選

たんぽぽの土手でまた逢う偶然か　はつ絵
縁談の聞き込み役に母がなる　狸村
浅からぬ御縁でコーヒー飲んでいる　月子
縁あって看護婦さんの手を握る　福本英子
縁の無い諭吉ですぐに旅に出る　美代子
褒めといて御縁なかったことにする　美房
捨て犬の縁一匹が拾われる　雅文
すぐ切れる縁に札束が動く　松本文子
縁とや一会の風にもある情け　元江
流し雛しばしの縁を振り返る　信義
あきらめた矢先の縁に結ばれる　結実
縁かいなこのブラウスもスカーフも　年代
親子の縁薄いと手相にある恐さ　勝美
縁あってポチも金魚も家族です　新正子
手を触れただそれだけの縁でした　小鹿
悪縁も良縁も消え老夫婦　すすむ
縁あって夫婦になって喧嘩して　岳人
妙な縁で造り酒屋の娘を嫁に　眉水
縁あってふたりで乗った花筏　たず子
縁あって掘っているのは同じ穴　重人
縁結びそれから耐えることと知る　楠昭子
出世には縁がなかった父の靴　透太
合縁機縁夜が明けました暮れました　凡九郎
水子塚薄い縁の亡子を思う　寿美
石仏の縁をたしかめ春を訪う　美幸
仏縁に縋ってみたい遍路笠　洋敏
竜宮と縁をたち切る玉手箱　しげお
長い縁よ泣くも笑うも夫婦独楽　年代
おたまじゃくし取って貰ってからの縁　みつ子
あれも縁これも縁と生きている　敏
何もかも不思議の縁でめでたがり　笛生
一線を越えぬ縁で長続き　千秀

佳

一年一組席を同じくした縁　鬼遊
まとまらぬ縁談花は散り急ぐ　幸
縁を頼って遠い国からきたつばめ　しげお
陽気ぐらしで合縁奇縁深くなる　太茂津
別れたい別れたくないくされ縁　諷云児

人

縁あって今日も走らす縄電車　ただし

地

糸電話通じた縁で添いとげる　楓楽
夫婦という縁で喜劇を演じあう　楓楽

軸

金婚のえにし一枚の写真から　静歩

兼題「宝石」　神夏磯典子選

薬指に幸せのせて旅に発つ　敬
宝石の似合わぬ指がよく稼ぎ　武庫坊
宝石に縁遠いけど値札見る　トメ子
宝石に女の夢は果てしなし　文秋
宝石に遠慮をしつつ通す指　信義
宝石が増え夫婦の仲が冷えてくる　房子
宝石がおりなす悲劇たんと見る　三男
小粒でも貴方がくれた温い石　恭昌
宝石箱詰ってるのは妻の私語　正坊
宝石に見向きもしない母子手帳　岳人
金剛石花嫁の無垢そのままに　公一
耳飾り男の自慢聞きあきる　吸江
宝石に貧しい心うばわれる　年代
輝きに哀しみ見えているダイヤ　小鹿
宝石が愛を代弁してくれる　悟郎
宝石は女の弱さ知っている　洋敏
王子さまからのダイヤを待っている　幸
見栄捨ててイミテーションに満ち足りる　静歩
宝石は女の吐息聞き飽きる　達子
宝石に殺し文句が載せてある　諷云児
宝石のきらめく彩に騙される　美智子
もう一人のわたしがルビー一つ買う　はつ絵
母ちゃんの指にダイヤが染まらない　月子

宝石に勝る宝を持ち合わす　元江
愛あればイミテーションは気にしない　静子
宝石の似合わぬ指を恥じてない　倫子
宝石の輝く指が語る過去　ただし
宝石買って心の隙間埋めている　楓楽
宝石はないけど幸せしています　笛生
宝石もかなわぬ花の首飾り　はつ絵
宝石は手のとどかない値がよろし　寿美子
宝石の値段をだれも聴いてない　鬼遊

佳

宝石の大きい話聞き飽きる　しげお
手袋をしようかダイヤ嵌めようか　満津子
挙式からドラマを共にする翡翠　雅文
半世紀みがいた僕の宝石だ　妻子
宝石にもてあそばれていませんか　元江

人

掌にある宝石に気がつかぬ　緑良

地

宝石をはずしてからにしょう話　凡九郎

天

宝石の向うに笑顔見えてくる　東雲

軸

宝石のように輝く海を持つ　典子

兼題「雪」　大矢十郎選

一票の重さは雪に土下座する　一二三
雪がもつ美しい顔こわい顔　静子
凜として梅は名残りの雪に咲く　眉水
親不幸詫びに戻った雪祭り　悦郎
雪国の雪の自慢を聞いてやる　吐来
決心をにぶらす峠の深い雪　悟郎
初恋の人の訃をきく春の雪　たず子
降る雪を黒く溶かしてゆく川面　ただし
雪の夜のいろり民話を続かせる　武庫坊
雪解けと共に流そう恨みごと　理瑛
燃えている二人に雪は美しい　千万子
鬼瓦やさしくさせる春の雪　典子
陰膳の母の祈りへ雪が降る　雀踊子
好きな子にばかり投げてた雪の玉　公一
手のなかの雪がだんだん重くなる　小鹿
雪解けの水にたわむる北の春　理瑛
疑えば雪の白さが汚れだす　緑良
三寒四温花のさなかのぼたん雪　元江
街の子にうれしい雪が降りつもる　重人
雪解けを待ってた様に来る小鳥　紫香
雪おんな春の瀬音を聞きもらす　年代
ぼたん雪温い話が聞きたくて　しげお
北の海雪は妥協を許さない　吸江
別れの日雪は天から渦になる　いわゑ
雪国の空気が重い雪もよう　重人
春の雪ひとの情けに似て溶ける　三男
雪景色だけでは出来ぬ村おこし　楓楽
思い出はみな美しい春の雪　幸
ときならぬ春をまどわす雪景色　頂留子
雪解けに私も古い殻を脱ぐ　みつ子
雪解けて水はゆっくり春になる　美代子
花見酒変って雪見の宴となる　すすむ
雪が消す大阪城の青い屋根　小路
雪止んで一気に喋り出すカラス　月子
山男雪の誘いを断れぬ　文秋
雪解け水の音にあしたが見えてくる　幸
子等の声此処大阪の雪景色　凡九郎
北の宿雪でも女別れゆく　抜智

佳

白雪であなたを埋めてしまいたい　松本文子
雪が降る少女のように妻多弁　静子
雪しきりゆっくりはずすイヤリング　栞
もう過去の話はよそう雪の宿　柳影
出稼ぎの父を迎えた名残り雪　千秀

人

越後から嫁いで雪に泣いている　太茂津

地

雪すこし載せるとみんな美しい　満津子

天

積らせて雪の名所が生きてくる　柳影

軸

初めての雪なのにお昼寝のタイム　十郎

兼題「月」　橘高薫風選

お月さますべて告白いたします　三男
月見草悲しい時の友でした　理瑛
荒れ寺に月が射すのも風情かな　紫香
夜桜のぼんぼりいらぬ月の丘　どんたく
鵜飼い果てやがて川面に浮ぶ舟　恵空
月の砂漠を全部唄って寝るとする　緑良
三日月に天女は衣掛けてくる　東雲
女ごころを知らぬ男と月を見る　美幸

月冴える貧しき村へことさらに　楓楽
鉄格子月の光へ懺悔する　しげお
お月様が右に左に高速路　典子
もうみんな見向きされない月の石　憲太郎
パチンコに負けて仰げば昼の月　十郎
一生を地球に月が添う如く　文秋
紅を刷く月がとっても蒼いから　正坊
水たまり月がきれいで跨げない　杜的
月の暈少し雑事にかかわりぬ　寿美
三日月に突っかれているあかんたれ　松本文子
プロポーズお受けしましたお月さん　重人
お月さんがきれいと電話かけてくる　洋敏
おぼろ月老眼鏡を買い替える　福本英子
二人して歩けば月が目に止まり　十郎
月の出ぬ夜で落ちつかないふたり　月子
満月の夜が楽しい共稼ぎ　静歩
大阪の橋から愛す十三夜　元紀
迷路から抜け出たように月が出る　いわゑ
忘れもの捜しに月が降りて来る　新正子
山小屋の月へ大きくうなずこう　はつ絵
ひとり見る月母さんの顔になる　新正子
だまされて帰る女にまるい月　笛生
昼の月お前も停年だったのか　妻子
おぼろ月わが歌の師も老い給い　一二三
佳
月拝む形家風としてのこる　規不風
株を追い久しく空の月を見ず　鬼遊
老人病棟誰も月など振り向かぬ　緑良
燃えてきたファイトへ細る三日の月　千秀

おやすみなさい今夜は言えるお月さま　松本文子
人
月の無い夜は自分が見えてくる　典子
地
難民船淋しい月を連れてくる　白渓子
天
地価高騰兎が月を売りに出す　信義
軸
月に立つ人類最大の踏み絵　薫風

兼題「花」　西尾栞選

振り向けば全く曼珠沙華の中　恵空
花と掃除好きな女房に春麗　章久
狂えたらわたしはきっと花になる　松本文子
明日逢う約束などはせぬさ、く、ら　寿美
花粉症になる四ん月の野の仏　雀踊子
花愛す人の心を疑わず　理瑛
ライバルに花をもたせて席を立つ　敬
少し歩幅をおとして歩く花の下　緑良
再縁の返事ためらう花曇り　房子
義理一つ済ませて帰る花祭り　太茂津
留守頼む隣に花を褒められる　二南
花の名を知らぬ男が恋をする　年代
花冷えの町で拾うてきたえにし　月子
花束へ女呪文をかけている　月子
大輪が咲く大輪の花の種　正坊
坪庭に亡母が残した花暦　たず子
母からの四六時誓う仏花　喜風
花束の数を味方と見た過信　諷云児

音もなく陽は落ちてゆく花の下　いわゑ
どの花も一輪でよし母の部屋　岳人
夾竹桃咲けば路郎の忌を想い　雅文
嫉妬する男を捨てたチューリップ　しげお
ミヨちゃんと外で遊ぼう花いちもんめ　敏
花博の浮かれへ釘をさした事故　柳宏子
福寿草今日は許してもらえそう　しげお
花博へ行くと実家が言うてくる　白渓子
花の浄土に夫婦でうつらうつらいる　規不風
花ふぶき智恩院では御忌さ中　はつ絵
わき道のここにも桜花ぐもり　頂留子
雪月花何れも酒があればよし　眉水
花咲いて花に縁ない百度石　勝美
梅雨椿そんな名でよし沙羅双樹　杜的
佳
花菜漬京の便りが添えてある　透太
ひねもすのたりのたりかな桜散る　美智子
夕ざくら未来の中に居るような　いわゑ
補陀落や石段ごとの花吹雪　福本英子
花咲いた郵便局がくれた種　トメ子
人
花時計賞罰なしの陽が昏れる　荒介
地
後継ぎができましたのよ花菖蒲　結実
天
花が散る弊衣破帽にふさわしく　薫風
軸
独り居のたそがれ時を藤の花　栞

（清記―楓楽）

麻生路郎句碑除幕式を挙行

麻生路郎先生の句碑除幕式が四月一日午前十一時から大阪市阿倍野区の阿部野神社で行われ、川柳塔社同人・誌友や路郎ゆかりの人たち五十二人が参列しました。

当日は夜来の雨も晴れ、境内の桜が満開という好天候に恵まれ、まず神社本殿で句碑建立報告祭が挙行されました。開式宣言、修祓に続いて神官が祝詞を奏上の後、参列者一同が玉串を奉奠、西田柳宏子氏が「夕桜とんぼがへりがしてみたし」の句を朗々と奉唱しました。

西尾栞主幹はあいさつの中で、路郎先生は玉出に在住されたことがあり、散歩の折り、しばしばこの神社の境内に立ち寄られたこともあるゆかりの地であることを紹介、大阪川柳人クラブ、月原宵明氏の祝電披露、神酒拝戴、弥栄斉唱の後、句碑建立の場所へ移動し、栞主幹、紫香副主幹らが幕を引くと御影石の真新しい句碑が姿を現しました。

一同、献水を終って境内の北畠会館で建立を祝う直会（なおらい）が開かれ、路郎先生の古い弟子の一人である楊井二南さんの師を偲ぶ回顧談もあって和やかに懇談しました。

次に当日の献句を紹介します。（正坊記）

献　句

（50音順）

筆跡を凝視める碑文に散る桜　愛論
師の句建ち弟子に孫弟子花の下　射月芳
遠き師の句碑の前にて近くなる　英一
エイブリルフール真実のあるひとところ　恵美子
満開に恩師を偲び神酒拝戴　越山
句碑建って今日を盛りの花吹雪　㈱英子
句碑に佇ち一字一字に偲ばれる　勝美
ほろ酔いで水かける除幕式　花代子
孫曽孫浪華に仰ぐ雲の峰　可住
目出度さへ路郎師の句碑除幕され　客遊子
師の句碑へ桜みごとに彩を添え　金太
ひとつ世を生きて一会を行き違え　鬼遊
夢の世に残る不朽の路郎師碑　吟平

路郎句碑建立募金

ありがとうございました

阿萬萬的・宮口笛生・川島諷云児・河内天笑・河内月子・田中正坊・西田柳宏子・野村太茂津・藤井一二三・神谷凡九郎・塩満敏・吐田公一・玉置重人・里小路・板尾岳人・辻白渓子・小出智子・西出楓楽・吉岡美房・高杉鬼遊・野田素身郎・児島与呂志・植村客遊子・新家完司・天正千梢・高須賀金太・松村迷観子・松永すすむ・中西兼治郎・渡部さと美・北田綾子・井上照子・上田登志美・米田恭昌・奥田みつ子・片上英一・堀良江・稲本凡子・阿上美代子・林野甦光・吉川寿美・松川杜的・松川芳子・清水利武・黒川紫香・正本水客・安藤寿美子・稲葉冬葉・岩本雀踊子・千原理瑛・松本元江・谷信夫・松下たつみ・坂部紀久子・月原宵明・藤村〆女・丁坪サワ子・小島蘭幸・竹原川柳会・山内静水・久保田敏一・工藤甲吉・佐藤奏月・谷垣史好・羽

師の声を阿部野の杜に聞きに行き　恵二朗
蒼空の句碑にあやかる花の宴　憲太郎
皆んなみなとんぼがえりを見に集い　幸生
師の句碑がひときわ映える夕桜　弘道
御拝眉はなくとも御遺徳偲ぶ日々　サワ子
頃はよし桜もよくて路郎句碑　紫香
さくら咲く社に眩し路郎句碑　正坊
花博の豪華と競う句碑一つ　新一郎
除幕してパッとあたりは花の春　春蘭
先輩の髭が闘志をかき立てる　二南
花見頃句碑から左手が出そう　小路
師の教えいのちある句はまだ遠し　宵明
師の影をはるかに偲ぶ夕ざくら　寿美
かえりきて花と語らう路郎句碑　節子
碑の命仰ぐ路郎の花ひらく　千翁
師に会えるよろこび春の杜に来る　太茂津
夕桜常世に匂い漂わす　千代
まご弟子にひまご弟子来る除幕式　千万子
路郎句碑周りはいつも温い風　千寿子
路郎師をとんぼがえりの句にしのび　頂留子
孫弟子がたくさんふえて句碑除幕　天笑
満開へとんぼ返りがしたい句碑　笛生
いしぶみへみんなうららか花吹雪　登志代
万感を込めいしぶみに立ち噤む　冬葉
恩師の句眺め昔が偲ばれる　利武
花の下とんぼがえりの句碑と酔う　吐来
今一度恩師の叱咤聞きたくて　杜的
師の句碑へ折しも花は盛りなり　智子
師の灯り慕い掲げる孫ひまご　はつ絵
師の句碑へ献句足跡偲ぶ今日　白水
花が咲く阿部野神社に句碑が建ち　敏
夕桜かしこみかしこみ句碑除幕　一二三
満開のさくらに映える路郎の碑　諷云児
幸せな石路郎師の句碑となる　楓楽
さくらかてことしの花を咲かせてる　凡九郎
柳の芽吹きそろいたり除幕式　芳仙
さくらさくら陽も暖かく句碑除幕　萬的
句碑生きてあでやかに舞う夕ざくら　幸
夕桜初心にかえる句碑の前　みつ子
懐しい阿部野の森に師の句碑ぞ建つ　迷観子
春うらら柳聖ここに建ち給う　三男
咲いて待つ句碑を寿ぐ夕桜　元江
路郎師の句碑へ阿部野は花ざかり　雄々
師を偲ぶ句碑に春風あたたかし　(松)芳子
想い出は繰り返しつつふり返り　与呂志
浪速に句碑　炯眼の師も莞爾たり　代仕男
花博もオープン路郎句碑除幕　柳宏子
花に酔う一会の絆句碑の庭　理瑛
句碑前にとんぼがえりがしてみたい　柳慶

(清記—幸)

原静歩・内海幸生・大矢十郎・佐野白水・竹内花代子・原章峰・久保田以兆・黒田真砂・久家代仕男・江口有一朗・橘高薫風・辻川慶子・堀江光子・横山為子・小畑よし子・奥田良子・金崎峰子・二宗吟平・津村八重子・河井庸佑・後藤正子・小西雄々・津守柳伸・松尾柳右子・川柳塔きゃらぼく・金井文秋・春城武庫坊・春城年代・北勝美・堀端三男・福本英子・富上光代・桜井千秀・山本規不風・奥谷弘朗・内田結実・安平次弘道・有働芳仙行天千代・森下愛論・平井露芳・小林トメ子森田熊生・内芝登志代・坂口公子・木本朱夏中島正博・麻野幽玄・渥美弧秀・弘津柳慶・岡井やすお・林花仔・松井かなめ・高橋操漕宮園射月芳・森川まさお・小糸昭子・城北川柳会・結城君子・森本節子・久米奈良子・栗谷春子・笠原吸江・山本半銭・桑原喜風・森中恵美子・寺井東雲・やまと番傘川柳社・古川一高・山本憲太郎・芳地狸村・古野ひで・植山武助・島崎富士子・清野こう・原さよ子高橋千万子・西原艶子・大塚節子・米澤暁明楊井二南・藤井高子・石川侃流洞・黒田能子小林由多香・佐野卜占・渡辺圭坊・渡辺独歩本田恵二朗・久保田敬一・上原逸・近藤一途山崎彩子・安藤寿美子・塩田新一郎・武俊春中島小石・大坂形水・藤井明朗・和田春風・水粉千翁・原仙波・染道佳明・田中弘子・小谷仙山・西山幸・林はつ絵・山内香住・福田満洲・木戸喜代子・高尾京子・垂井千寿子・中井栄美子・榎本吐来

(四月一日現在・一七八名)

花地抄壇

1人1句、1か月分、30句以内。各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月**23日**締切。　担当・玉置重人

川柳 大阪　中原比呂志報

新聞がニュースと夜明け告げ走る　喜楽
やるせなさ抱いて走る暴走族　鈍泉
座布団も茨の筵マイク来る　亮太
我が意志はこんな程度か禁煙日　正之
若草の山焼き火付けは消防士　柳弘
内政の危機強腰のゴルバチョフ　酔舟
灰色もまた出るという衆院選　しげお
裏までは読めずでしゃばる正義感　希久志
適当に忘れたそぶり偉い母　美津留
七人の敵を蹴とばす靴光る　敏
甘く見た音痴に女口説かれる　本蔭棒
音痴にも唄う権利があるのです　権八
御意見はと聞くから言うただけのこと　凡九郎
意のままに生きて窓際悔いはない　一歩
ワンテンポ遅れで音痴の歌になり　天平
恙ない一日だった灯り消す　重人
ライバルは意外な方から矢を放つ　鉄心
偉くなれ偉くなれよと樹がのびる　金太
意に反しやっぱり鬼になりきれず　笑風
義理だけの返事とわかる用が済み　与呂志
僕なりに今日は絵になる音痴節　司
一枚のガラスが仕切る別世界　洛酔
足音は良かったらしい今日の首尾　雅巣
小数の意見に真理潜むかも　比呂志

川柳たけはら　森井 菁居報

うまにのってゆめの国へいきたいな　小二歩美
新学期きっと成績アップする　小六晶美
野性味が失せてレールの上を行く　菁居
いっせいにみどりの中へみどりとなる　蘭幸
死にそこね花に囲まれ癒えてます　静水
師の全快願って初日深く拝す　麻代
言いたいこと思い出せないリンゴ剝く　喜久恵
八十の歳を拝んで屠蘇に酔い　浪子
覚めやらぬ麻酔の中でお念仏　房子
ジョーカーをつかんだ孫は顔に出る　愛子
風鈴に自作の短冊付けてみる　俊夫
喜寿になった平成二年どう歩む　ヤスエ
外孫の姓が変わった賀状来る　喜美子
心経をなんぼ書いても悟れない　勲
何もかも諦め齢かなと思う　清水
もつれ糸ほぐれて嬉し春の宴　栄恵
七転八起今年は起きる年　光子
今にしてやはり他人と悔いありき　一枝
おおらかに山の緑を溶かす湖　博子
水仙にたしなめられて朝を出る　淑子
いつまでも輝くように靴を買う　令子
手のひらの豆腐やさしさしか知らず　比呂子
ヤジロベエそろそろ誰か来てほしい　笑子
ペンだこよまだまだペンが離せない　一路
老いてなおやっぱり海が性に合い　美佐雄
冬の駅さようならがよく似合う　貞子
妻のサインは直球ばかりだから好き　節夫
民主化の嵐こたつの中で見る　伸子
踏みつけにされても草は春に萌え　新造
性格の違う大事な友が居る　静風

川柳 後楽　従野 健一報

問答無用その一発に背が寒い　義親
逆転の火種鞄に入れてある　健一
ゲンコツの父が笑っている仲間　浄美
ゴルバチョフくしゃみをすれば株が揺れ　博友
叱られに来た警察の寒い部屋　秋月
夫婦箸寒い世間に馴れて住み　鮟虎狼
レコード針から父の鞄が渇きだす　桃風
げんこつの味を知らない子の哀れ　美智子
気楽そうに見えて脱毛症になり　佐加恵
口下手がまた問診へとまどわせ　柳五郎
一年の計は節酒と決めて飲み　哲郎
冷え込むと焚火を囲む輪が太る　金吾
句読点気ままに打っている余生　たけ志
心地よい包囲の中の手負い獅子　草風
焼酎の味を覚えてパート妻　青銅
思い出をかき消す様に雪が降る　拓治
金魚一匹老い路も冬を生き残る　みよ子
犬公方顔まけ都会のペット様　紫峰
六十路きてまだ自分の顔もてず　玉水
世話される世話を習っている老後　正秀
想い出せば先生のゲンコあたたかし　清三
げんこつにならぬこぶしを握りしめ　文平
草笛をめだかに吹いてふる里よ　照路

川柳クラブわたの花　片上　英一報

娘は二十歳ピンクの風がたちのぼる　シマ子
ベルリンの壁　新風が通り抜け　章
悲しみが風に向って歩かせる　春子
わたり鳥旅券もなしで風に乗り　その
花の香を書斎に運ぶ風も春　君江
風が来てコスモスの色重ね合う　幸枝
風花に梅一輪が匂いたち　弘直
風は友だち凧は大空漫歩する　楽天
すし飯の湯気を団扇で散らす風　みき子
木枯しへゲートボールの声高し　一風
北風を小僧と呼んで日向ぼこ　能子
ベルリンの壁を崩した時代の風　市子
春風に花の便りを乗せて来る　信一
春一番　黄河の土を持って来る　美津留
積もる音消ゆる音なく初雪は　信江
冬くれば雪降る　あたりまえだけど　久美子
柊のいわし怨念わすれまじ　英一
鬼は外　豆で追えない鬼が来る　龍襄
回るすし手巻きの皿で邪気払い　隆
年越しの豆ころころと古希の数　初子
僕んちに鬼はいないとてこずらせ　友甫
物価高陰であやつる鬼は外　泰成
握手する一票の手が冷えてくる　鬼遊

川柳化粧櫓　植村客遊子報

ゲートボール　ドリンク飲んでから出かけ　岳詩
気がかりが三つかたづく寒の入り　輝月
食欲へ皿に溢れる母の愛　サワ子
玉垣があるふる里に家が無い　大鷹
一日の汗をいたわる茶碗酒　葉香
それぞれの歩幅で男女坂　礎石
二次会は陽気な人について行く　悲子
予備知識なしで見合いの席につく　奮水
人間の予想は神の意にそわず　三青
弱い子に育てたくない薄着させ　和笛
里帰り世代交代の実家へも　美代
追伸に本音が少々顔を出す　朱玉
鬼退治神話ますます生きて来る　茂章
飽食を少し狂わす旬の味　嘉
北の旅明日発つ寒波気にかかる　姫女
古日記想い出せない○に、　好花
この報い何時か来そうな今の倖　はる子
世話の無いおせち買うても又作り　遊峰
郵便さん素通りされて老い淋し　永楽
ひばり節しみじみ聞いている手酌　客遊子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

温めて食えとレンジに置き手紙　つた子
セットして置いたレンジの餅が焼け　邦人
露天風呂一杯欲しい雪見酒　江山
岩風呂に疲れをいやす山男　美恵子
露天風呂かじか鳴く音に岩枕　秀香
露天風呂夫婦他人の顔になり　伊久栄
露天風呂月の隠れを待って脱ぎ　保恒
何に効く薬か知らぬ露天風呂　山人
露天風呂天下を取った気にもなり　半仙
地の息のやさしさに逢う露天風呂　吟平
真夜中の露天の湯あみ雪女　恒心
満年齢の還暦もすみ少しふけ　賛平
さりげない仕種に友の温かみ　ふさえ

川柳東大阪　森下　愛論報

お年玉を数える夢がまだ続く　作二郎
早よキスをすればよかった朝の夢　不二夫
道匂う森の精たち生きている　隆
近道を知らない父の定期券　孤舟
興奮とスリルに道をはずしかけ　真柳
一筋に歩いた道に嘘はない　勝美
妥協せぬ男辞表書いている　雀踊子
浮世絵の姿に四季の風がある　湖風
先代に負けぬ劣らぬ舞い姿　恒明
苦労人後ろ姿ににじみ出る　百合枝
四度目に流石の母も声尖る　柳宏子
見事に騙されて流石だなと思う　文秋

佳句地十選（前月号から）

川竹松風選

野仏の雪を払って話しかけ　一風
花鋏花の命を切る宿命　辰子
友達がいっぱいきっと母ゆずり　伴子
満点の嫁では同居遠慮する　トミ子
一行詩鋭く僕を突いてくる　杜的
植物は鉢の広さに似て育つ　三代治
脇役もきっちり化粧して斬られ　白渓子
ローンまだうさぎ小屋でも私の巣　真
目が笑っていない一物ある笑顔　重人
どの音が欠けてもならぬ朝の音　由紀子

生真面目が溢れて一途一つ道　しんじ
真面目さを風が逆撫でして通る　章久
姿見がやつれたなと言うている　慶三
手を振って後ろ姿は駅に消え　頂留子
ささやかな夢へ必死の共稼ぎ　美子
夕焼けヘロマンを誘う道があり　愛論

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

車座の話がはずむ鍋の湯気　のり子
使い捨ておしんに悩みふえてくる　静江
ひとつ憶えのテーマソングで粗大ゴミ　礫
老夫婦いたわり合っていい景色　遊美
今だけと思えば頭下げられる　恵美子
盆梅をいとしんで見る老いの花　越子
当選をしたら路地裏忘れられ　石舟
観光のコースに夜景も折り込まれ　花代子
禅堂に雪こんもりと灯がにじむ　英子
住み馴れて京の底冷え気にならず　杜的
おふくろの味に馴染んだ鍋の艶　(松)芳子
洗剤で資源をよごす暮らしぶり　スミ子
諦めることにも慣れて鍋磨く　正坊
首塚は椿の森に冷えている　作二郎
欠かさない朝が冷え込む百度石　しげお
長いながい戦争だった母の墓　〆女
絵ハガキにつられて行けばゴミの山　京童
いつか見た景色と夢の中に居る　よ志子
迷いから覚ませてくれる冬景色　美智子
碁会所へ麻雀好きが呼びにくる　春風
本の山眺めて今日も無為でいる　行平
ブルドーザ山の資源を根こそぎに　百合子
ふる里の景色を変えるブルドーザー　栄

底冷える祇園の裏の焼芋屋　とおる
親友の意見に冷えるすまし汁　勝一
二杯酢で食べよと土筆少しくれ　多賀子
擦れ違う夫婦に夜が底冷える　諷云児
菜の花の道に遍路の鈴が鳴る　鬼遊
過ぎてからガイドが喋る景色かな　紫香
同じとこカメラが狙うている景色　白渓子

倉吉川柳会　渡辺菩句報

尻もちをついた形で家にいる　とみを
平凡に生きたい鍋の落し蓋　瑞枝
ほのぼのとした遠景に縄電車　千秋
寝て待てど物価の下がるめどもなし　ひろし
物価にも優等生という玉子　雄々
旧友とほのぼの過ごす雨の午後　満春
ほのぼのと障子に朝の陽がはねる　螢
平凡が幸せと父言いはじめ　柳風
嫁かぬ娘がいてうっかりはしておれぬ　和枝
政治よりビール値上げが気にかかる　喜美子
凡々と昨日に続く靴の紐　荒介
大家より高い処に住んでいる　石花菜
わが家にも春が来そうな今朝の風　次男
春ですね宛名も書かずポストまで　完司
平凡な川でも雨が狂わせる　康志
春闘のしっぺ返しのくる物価　独歩
デパートにうっかり子供置いて来る　ゆり子
平凡と言うしあわせに気が付かぬ　秋女
半分は嫁にきかせる物価高　御前
家毎にそれぞれ違う風が吹く　秋人
呆けた父がほのぼの笑ってくれました　京子
ほのぼのと春待つふとん軽くなる　小鹿

我が命値段はいくらなんだろう　康子
平凡で素朴な父の底力　とめ子
千円の長靴なんとぶっかぶか　菩句

岩見川柳会　羽津川公乃報

苦労人どんな空気も吸っている　照女
思春期の耳がころころ笑いこけ　賀津江
バーゲンのその又値引き待っている　公乃
バーゲンに出しても売れぬ古女房　芳江
バーゲンで仏壇求め亡母に詫び　美恵子
人様の決断待ってるやさ男　長治
決断に愛する妻の知恵も借り　單車
決断は俺より妻が先にする　大漁
平成の乱看板の半裸体　螢
看板は煙突の文字寒造り　美代子
金看板背負って足がもつれだす　忠良
針程の光が強く心刺す　民子
汗で得た万札とてもよく光る　きみ子
風の街希望が少し光ってる　幸代
窓光る私は春をつかまえる　小鹿
よく光る星が亡父ですただ祈る　由多香

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

割烹着つけると私の顔になる　スミエ
大船に乗った気持で舵をとる　マサエ
はぐくんだ愛を積荷に船出する　ひかり
老人の顔で並ぶに気が引ける　伽名子
笹舟を共に流した友は逝く　白柳子
七色の風船夢を運んで来　よしみ
背のびした顔で出掛ける見合席　明人
船酔の薬片手に母の旅　放任

連絡船化粧直して又出番　チカエ
好きな人見れば素顔が美しい　いさむ
出来事を顔でおさめる人が居る　迷　貫
夫婦して陽気に暮す渡し舟　吟　笑
合格を喜ぶ顔と曲がる顔　迷観子

南大阪川柳会　中川　滋雀報

平静に戻って雨音聞いている　寿　美
平静を装うグラス揺れている　柳　伸
束の間の平静ほしく鶴を折る　和　子
平静な目で復讐を考える　信　治
平静になろうなろうと渉る橋　シメ子
懸賞になると名案寄ってくる　文　秋
名案があったら聞きに来まへんワ　凡九郎
触らぬことが名案に違いない　智　子
名案を出しても握りつぶされる　冬　葉
名案も部下からもらう回り椅子　勝　美
名案は湧かず吸いがらばかり増え　新　造
名案はないけど希望にもえてます　三恵子
偉い人が座る椅子だけ空けてある　滋　雀
偉ろなって来いと一本杉が言う　重　人
偉人伝貧しき家庭の子にされる　覚然坊
姑の偉さは一パイの匙加減　真　柳
偉振らぬ世話で近所の的にされ　喜　風
人相はもひとつ偉い人らしい　千　梢
流氷の起伏に風が冷えてくる　作二郎
あの時の冷たい仕打ちバネにする　恒　明
冷や飯を食べた苦労が生きてくる　庸　佑
冷えきった心をほぐす梅だより　憲太郎
手のひらを返す女の冷たい眼　頂留子
置きごたつビールは冷えた方が良い　度

手が冷える肩が冷えると父の齢　正　好
無人駅春には春の花が咲く　透　太
時刻表に私の終着駅がない　雀踊子
鼻欠けた地蔵見守る無人駅　柳宏子
海鳴りの無人の駅へ浪の花　章　久
駅員に会釈して出る終電車　しんじ

三幸川柳教室　桜井　千秀報

櫛使う娘に恋のきざし見え　鉄　治
富士額すっきり見せて梳き上げる　重　次
遺伝とも言われて櫛に縁がない　金　一
櫛目通して深呼吸する今日の席　三千子
黄楊の櫛タイムスリップする記憶　敬　子
ばあちゃんの櫛が泣いてるオモチャ箱　千枝子
べっ甲の櫛が泣いてる海の詩　靖　子
はがきまで腰低うきたお詫び状　茜
パパの腰小さい足でほぐされる　由　梨
愚痴ばかり出てくる母の腰蒲団　親　踏
かがめてる腰の辺りに出る打算　千　秀
自営してはじめて低くなった腰　孝　子
腰据えて我が身を賭ける弓を引く　芙美子
丸腰になると世間が見渡せる　高　夫
腰の物あれば抜きたい時もある　保　州
弱腰になれば北風攻めてくる　桂　香
世渡りの武器にして来た低い腰　結　実
若い日の橋は思い出持っている　利　子
メガネ橋出逢いをくれたキューピッド　み　ね
許されぬひとと渡った丸木橋　朱　夏
二人ずつ橋に佇む夕景色　和　子
この橋を渡れば別れ待っている　幸　子
また猫が何か食べてる橋の下　智水庵

城北川柳会　神夏磯典子報

それぞれに居場所の決まる炬燵かな　みさ子
消費税どちらが勝つやら負けるやら　午　郎
成人式午後の日の丸淋しそう　春　雄
あら玉の恩師の賀状温かし　寿美礼
人間がおめでたいので春が好き　ふ　み
父恋し母恋しきこたつかな　輝　子
寒い日は猫といっしょに掘こたつ　仙吉郎
花一輪置いたこたつに春をみる　きくゑ
失せ物が春に出てくる掘ごたつ　新一郎
菩薩にも鬼にもなって子を育て　静　子
掘こたつひとりの夜を深くする　テルミ
風雪に耐えた老舗の鬼瓦　白　峰
鬼の面借りて自分に勝ってゆく　典　子
すがりたき心を絵馬に寒詣り　ふさ子
福々と三代家族の長で居る　温　子
福笑い孫が笑うて並べ替え　登美子
寒さ耐えけなげに咲いた母子草　久留美
定退の父が外した鬼の面　公　一
口喧嘩してもこたつが治めます　昭　子
民宿のこたつで民話生きつづけ　文　子
今日無事に過ごした鬼の靴の音　麻　黄
親に似ず鬼子といわれ出世する　眉　水
お多福を男は胸の底で恋う　倫　子
掘ごたつ足から夢が這い上る　達　子
原稿用紙の枡目を埋める人生か　静　歩
優しさに鬼も降参してしまう　満津子
吹き止まぬ寒風はない路地の奥　ただし
終章を飾る亡母に紅をさす　純　子
百年の知己の顔して鬼がくる　史　風

三面鏡ある日写った鬼の顔　右近

川柳岩出　小倉アサ報

心には私を叱る鬼が棲み　昌子
春めいて無情男もひげを剃る　義美
こぼれ水溜めて潤う暮しむき　和子
さり気なくこぼした言葉覗かれる　春子
おこぼれで泣かされている小企業　永年
子を叱る心を鬼に父の愛　喜市
貧しさの中で零れている笑顔　アサ
落ち零れ集めて飯を炊いたっけ　千代子
春風と知って待ちます花時計　愛子
わたくしの中に一匹鬼が棲む　精子
鬼の面はずしなさいと言う鏡　綾子
言い出せぬ秘めた思いが掌にこぼれ　瑞穂
傷のない男に届かぬ春の風　忠雄
つののない鬼にみやげを買って来る　与呂志

川柳塔鹿野みか月（三月）　土橋螢報

二泊三日たのしいことは早くすみ　富恵
叱られるときは短い方がよい　早苗
気短の私も魚つれるかな　敦子
がっしりと太く短い指のさが　喜与志
俺が吐く短い息が雲となる　大全
隠された短所ちょろちょろ顔を出す　幸枝
二世誓う人のいびきに悩まされ　きみゑ
向う岸ばかりで魚釣れている　さつき
捨て去ったプライドが芽を吹きだした　百合子
指切りの誓い夕焼雲赤い　八重子
創造の世界黒雲かき分ける　智恵子
うれしくて金魚が尾鰭振っている　八重

去ってゆくことは告げずに米をとぐ　三千代
気短を男らしさと惚れている　くに子
春の風旅旅旅と急きたてる　節子
高価だった派手さこらえている晴着　孔美子
孫去んでゆっくり昼寝でもしよう　芙美
ロボットの肩を叩いて職を去る　忠良
許そうか釣った魚の目が動く　かつ乃
マドンナは空気になって去ってゆく　石花菜
産声よ娑婆の空気はうまいかね　きみ子
住めば都自慢してます現住所　和子
織り上げてみれば短い紐ばかり　公弘
北風が去って乙女は春を着る　正恵
誘惑に負けてしまった魚です　隆風
面倒なこと嫌って風と共に去りぬ　菩句
短夜へ恋の呪文をいいあぐね　幸代
去る人を振りかえらない風見鶏　正道
去ってから味の沁みでる友もいる　和枝
あなたには魚の涙がみえますか　小鹿
冬去って誰かが桜つれてくる　夕峰
始めから騙すつもりの兎とび　幸子
スカートの短いだけのひとでした　汲香
掴みどり短い指に負けました　はるお
われにかえると母が世俗を立ち去った　諷人
惚れたはれたと春の嵐は去ってゆく　螢・

川柳塔唐津支部　久保正敏報

忘れ得ぬ痛手を癒すコップ酒　旭恒
行楽の帰り電車で肩を借り　高明
へその緒にラジオを頼み風邪三日　四郎
家の嫁悪じゃないけど良く睡る　虹汀
吉野ヶ里遺跡で拾う石矢尻　朴竜

タンポポが光の春をつげにくる　ハル
コップ酒立ち食い立ち飲み天下様　紀一
声だけを聞けば美人のようであり　治幸
再婚はやっぱり薩摩の女が良い　喜久亭
老後みるロボットならば買いにゆこ　ふさ子
絢爛と寡婦が着飾るバスツアー　順子
後押しの頃の元気は妻になし　ちよ
算盤を知らぬ男の電算機　義美
ポリシーを持たず土下座の神頼み　正敏

京都塔の会　松川杜的報

義理チョコの数だけ噂持っている　諷云児
Gパンで花嫁が発つ成田　〆女
紅殻格子京の二月は底冷える　萬的
六十路には六十路の化粧紅をさす　正坊
タンカーの座礁でゆれている漁港　芳子
見直しも廃止も公約立派すぎ　栄
この命縮めても良い肝移植　福子
冬の日に煉炭火鉢踏切小屋　圭坊
冷やかに女は口紅引いて去る　京童
中年の恋口紅がきつすぎる　紫香
紅だすき絆へ似合う茶摘歌　花代子
Gマーク最高品という誇り　英子
グランド去る男が砂を詰めている　葉子
口紅をぬる手も馴れて妻パート　巨詩
因習が今も生きてる紅格子　武庫坊
ネオンの紅が流されてゆく京の雨　年代
空手部の紅一点はうちの孫　倫子
手加減でグラムがわかる妻の匙　求芽
海峡を縮めて世紀の橋渡る　ただし
縮んだのと背がのびたので合わぬ服　美穂

一秒を縮めた記録へ大げさな　白渓子
ちりめん雑魚のかなしいいのち食べている　礫
不器用なパパだと知った犬の小屋　飛鳥
兎小屋だけどやすらぐ席がある　百合子
山小屋の夢コスモスに包まれて　杜的
撞く人の心によって鐘が鳴る　水客
新年をいつものとおり歩く幸　はつ絵
ハイハイ、聞かぬ積りの返事する　しげお
こぼれ梅に酔う初春のたあいなさ　達子

川柳藤井寺　高田美代子報

横顔が似ているだけで尾行され　宗一
横向きのまま冷戦がつづいてる　一屯
横顔は笑っていない三枚目　志洋
横に居るだけで安らぐ老夫婦　吸江
横道にそれた分だけ増えた友　修六
水仙がつんつんみんな横を向く　治
トラブルへどちらも折れぬ悪い癖　末一
どうしようもない癖を認める親子です　寿美子
死ぬ死ぬが口癖結構生きている　和美
盃を持てば明治の歌の癖　義一
木の癖を直すと風が突きあたる　政代
変なくせそのまま延びた庭の松　須美
振り向いてばかりいるのも癖だろう　美代子
もう明日にしたらと妻も寝ていない　みのる
明日から貴男の色に染まる宴　婦美枝
夜の潮みちて明日の桜貝　雅美
いい事がありそう明日へ空が澄み　信子
周到に明日の絵具を溶く女　正枝
明日は明日今日を豪華に生きてやろ　三郎
明日信じ花咲く種をまいておく　敦子

今日の思慕明日へとつなぐオルゴール　彩
明日では遅い手形を持っている　透太
ピカピカの靴は明日を向いている　昭子
行きずりの女に明日をのぞかれる　与呂志
窓磨く明日がくもらない様に　治子
どこまでもついて行きたい明日がある　美房
あんかけが好きで住んでる新世界　祐二
雪化粧我が家も捨てたものじゃない　伴子
人間も背中も丸くなりました　たかし
休息か試行錯誤か缶コーヒー　比呂志

堺川柳会　宮本かりん報

仕舞風呂あしたの欲が浮いてくる　満洲
体臭が少し薄れた天下り　千万子
うすいいろ重ねわたしの彩にする　都
うすうすは感ずいている猫の耳　あか里
日記にも自分をかばう嘘がある　柳宏子
都会の隅で薄くスライスされる夢　森子
横車押してひとりが浮き上がる　庸佑
幸うすい涙でマンガ描いている　一二三
お迎えを待っている等嘘を言う　美房
カーテンを替えると心浮いてくる　東雲
花さそうその芽はぐくむ雨ならば　春香
バカ正直に生きてるうしろ姿だな　かりん
堅物のメッキがはげた浮かれすぎ　頂留子
定年の父よ下着がうしろ前　彗梢
父さんの後であかんべーをする　小雪
いとおしい限りのうしろ姿かな　半銭
私色つけてこの世に浮いてます　楓
旅に出て薄いえにしを置いてくる　紀美女
後ろから目隠しすれば人違い　凡子

一坪の庭に花芽が競い合い　こう
春の芽を小鳥が先に見つけてた　冨志子
父の身を案じる母の薄い味　ひで
大阪のうどんの味は薄かった　狸村
芽が吹いていたので助かる樹のさだめ　二南
三年目芽吹かぬ花を抱いている　泰子
ドレミファソ春待つ空へこぶしの芽　豊子
そのうしろついてゆかんと駄目な人　凡九郎
ふと見たり土手の草むらつくしの芽　春蘭
親方は背中にも目を持っている　天笑
僕ひとり浮いてしもうた隅の席　月子

ささやま川柳社　遠山可住報

疵口が未だに癒えぬ破れ恋　素水
猫ちゃんが陽気に狂う屋根の上　貞子
欲望の皿へころがる口車　とみ子
速効の薬となった子の笑顔　靖子
快方もむなしく薬抱いたまま　和子
口止めの紐を引いたり緩めたり　ヒサ子
狂い咲く花の心も知らず剪り　つや子
点滴に命をつなぐ虫の息　百合子
肩書が付いて歩幅が狂い出す　千代子
狂えない位置に女の椅子がある　テル
入口が広くてみんなよく集い　きし江
つまずいた石を薬に抱いている　冨美
口添えの蟻まっすぐな途をゆく　エキオ
太陽と遊ぶ子薬などいらぬ　越山
片寄った食事を叱る聴診器　文平
口車うかつに乗れぬ落し穴　まさの
世の中が狂てることにして老いる　可住

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

ひと声をかけて垣根を低くする　裕美
泣き声をたてぬ負けたくない意地で　紀久子
腹からの声で嘘がつけますか　正博
群衆へわたしの声が紛れこむ　信秋
春霞澄んだ声聞く梅の花　和子
濃い目濃い目に塗ってピエロの顔になる　萬的
いい色に塗ってもらえと旅に出す　忠雄
上塗りの下に貧しい顔がある　紀美女
詫びながら父の古さを塗り替える　保州
壁を塗る度に女は走り出す　アサ
恋心すべてを愛で塗りつぶす　瑞穂
背信の上塗りをする彩を選る　与呂志
老醜を塗りこめて立つ舞扇　呑天
腹立ちを塗りまくってる幼稚園　登志代
ぬるい茶を出されてわかる僕の位置　精子
三度目も手ぬるい母の叱りよう　高夫
手を出さぬ人と静かにぬるいお茶　忠
水温み老母も金魚も生き返る　結実
手ぬるいが何時か来た道陽が長い　綾子
このまんま別れともないぬるいお茶　武雄
午後からのぬるむ授業に鞭がほし　繁子
他人にはぬるい躾が丸見えで　豊太
手ぬるいと生きてはいけぬ自然界　輝子
小布色々私の過去と仲がいい　公子
どの柄も想い出ばかりぼろの山　英子
呆け除けと老母は端布でよく遊ぶ　三男
スキンシップ昔おむつは布だった　金太
真白な布巾に意地が見え隠れ　千寿子
布巾真っ白主婦の自覚も冴える朝　光代
夫とは妻とはやがてぬるま湯に　緑良

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

期待せぬ握手に信用してしまう　柳影
七人の敵とは別の手で握手　杜的
引き継ぎの握手定年晴れ晴れと　きよ子
また来てね　孫が離さぬもみじの手　江美
ポケットに母の甘さが詰めてある　年代
もみくちゃにしてもポケツに入れてある　凡九郎
義手の手をポケツに夕陽を見てる人　萬的
ポケットに火種隠しているピエロ　佳秋
卒業のない人生の夫婦独楽　武庫坊
卒業に父の晩酌少し増え　英子
悪友となって卒業からの縁　白渓子
青春はもう卒業と言うおんな　京童
妻の座に卒業はないかっぽう着　園歩
バッジ付けると会社の顔になる夫　いわる
片へりの父の靴から社が臭う　春蘭
妻や子に言えないこともある会社　正坊
カタカナに社名を変えてビルが建つ　よし津
会社では笑顔絶やさぬ人と言う　てる
小っぽけな会社へ命かけてます　はつ絵
油断すな言ってる親がスリにあう　保蔵
ニコリともしない税吏と差し向かい　石舟
春の絵になろうなろうとつくしんぼ　芳子
赤い靴少女は春の貌になる　みつ子
皆塾へ行ってかごめの輪ができぬ　たず子
会社へは電話するなと言うてある　紫香

いさり火川柳会　尾崎三代治報

喜びは伏せて謙虚に立ち向かう　伊都子
娘が嫁ぎ小島の餌をよく忘れ　由多香
ライバルの飼ってる小鳥まで憎い　孝人
鳥肌が立つほど嫌な彼が来た　武士
青い鳥逃げないように抱きしめる　八重子
大きいの狙って子らの目が光る　智恵子
ちょっとでも大きい方へ手が伸びる　豊子
体より大きい餌を蟻が引く　三代治

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

退院は未定乱れる心電図　登美也
水面下だけは未定で動き出し　ちかし
夕暮れの空は未定の彩をぬり　文子
未定だが旅のプランは立ててある　満江
伴侶まだ未定で肩書ばかり追い　妻子
パンフレット旅の未定を掻き立てる　友子
未定だがいずれ阿弥陀の手にすがる　房子
千の罪抱いて写経の墨をする　早苗
墨すって世間にうとい人と知る　たつみ
友の訃におもいこころで墨をする　きみえ
ゆっくりと墨すり構想練っている　秀子
遺跡から墨のロマンが目を覚ます　清志
かくし芸ピエロのような眉を書き　静江
子の抱負親の筋書きどおりです　登志子
平和守る抱負披爆者手をつなぎ　舞吉
目を貰うダルマの抱負確かめる　多賀子
世間の目甘く見すぎていた抱負　雄々
老人の抱負余白は知れたもの　操子
懐の抱負が刃物持ち出した　小鹿
どん底で抱負投げない男意地　芳枝
春の抱負につば広の帽子買う　博子
職退いて去年の税が追いかける　寿美子

税金を払いたくない無駄使い　鶴丸
税金の話になると弾まない　静恵
税金を納めてうまい割子そば　章峰
大勢して袋叩きにあう抱負　代仕男
白けてた席とりもどす大笑い　長三
大笑いしたのが偏屈気にいらぬ　与根一
親馬鹿の自慢まわりは大笑い　日出子
養毛剤買った話で大笑い　叮紅

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

信用をしろと言っても過去があり　林太郎
好きという言葉信用してしまう　艶子
信用に比例借金ふえました　圭一郎
信用をして捺したハンコに悔い残り　喬水
適当に妥協の線で酒になり　友夫
適当に後始末する幹事です　秀和
適当にあしらわれてるとも知らず　一枝
適当に聞いてて思い出せずいる　粗粒
適当でいいという目が光ってる　由多香
適当に義理チョコだから撒いておく　大漁
不合格張りつめた糸切れて泣く　呼風
娘等よりも派手に見栄張る姥桜　美津枝
お隣と見栄張りながら背伸びする　山人
大卒と張り合う倍の汗をかく　帆雀
緊張を医者の笑顔でなごませる　俊路
見栄張った付き合い息が切れてくる　旋風
臍までも氷る寒中初泳ぎ　新風
流氷に閉ざされ漁港春を待つ　侑里
国交が北の氷を解けさせぬ　砂山花
花氷終身刑の涼となる　忠良

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

バンザイと親子が嬉し二次もパス　朗子
仁王様赤い花緒をうれしがり　てい子
占い師うれしい事を言ってくれ　花子
産声に嬉し涙が頬つたう　玲子
七五三写真が出来て持ちまわり　冨美子
本日は亭主達者で留守である　正子
足し算になって嬉しい子の稼ぎ　登栄
ひとり飲むお茶に茶柱うれしくて　夕子
嬉しくて箱の中での大笑い　日枝子
嬉しくていつかかごめの輪の中に　恵子
クレヨンの絵にうれしさがはねている　ゆき
嬉しさは八分位が丁度よい　八重子
うれしくて仏に話し子に話す　亜弥
母さんの嬉しい嘘に救われる　智加恵
百姓になれてうれしい花咲かす　やえ
嬉しい絵心にためて橋渡る　千春
胴上げの嬉しい眼鏡拭いている　瑞枝
うれしいが返事はあとにしておこう　千代

川柳はびきの　塩満　敏報

報道のカメラを逃げる座頭市　志洋
墨吐いて巨悪の逃げた総選挙　一屯
花便り聞いているうち春逃げる　たけし
失って大きさを知る妻の席　かつみ
失った日を呼び返す雛飾り　みつこ
礼節を失う衣食足りた世に　淑子
失った若さを包むたとう紙　泰子
予定には入れたくないが更年期　伴子
失った父は大きな傘だった　悦子

逃げ道はちゃんとありますだまし舟　一枝
逃げないでじっと見つめて下さいな　志津江
目標へ高くかかげる父の旗　金太
壁取れて地球も少し広くなり　蛙声
アンテナの先で小鳥が夢を見る　美津留
おしる粉のお替りをするええ話　重人
アンテナを張りめぐらしている商魂　利武
失恋の痛手露天の湯に流し　白水
逃げ道はないと知ってるコップ酒　吐来
アンテナに集う雀は噂好き　絢子
お互いに盗み読みする通勤車　ダン吉
生きている限り未練はつきまとい　与呂志
美しい涙拭かない方がいい　美代子
寒鰤はやはり煮凝りで酒うまし　繁男
選挙戦ダルマの顔も緊張し　敦子
花博へまだ雪の日も風の日も　トミ子
目標が次第に褪せてくる余生　シメ子
女しています残り火燃えてます　比沙胡
目標へ汗を惜しまぬ亀の自負　寿美
アンテナの無礼をにらむ鬼瓦　敏

川柳泉尾　吉川　寿美報

雪降って人間の音傘の音　弘子
苦労した母の人生幕閉じる　まち子
雪タルマベそかきながら痩せてゆく　靖子
初対面ボロが出そうなほど喋り　満洲
銀世界昔話がよく似合う　伴子
初春の庭に一輪梅薫る　シマ子
花博に見せたい浪速の通り抜け　美南子
娘の縁談すんなりきめて春の雪　美津子
初恋の夢が破れて雪こんこ　途子

初夢は一億円の高枕　悦子
初対面一瞬火花散る値踏み　トミ子
初めから筋書き見えた恋終る　まり子
初心に帰れ帰れと自分に言い聞かす　はつ子
初々しさを忘れた森の雪景色　美子
見栄を着て王様裸気付かない　美代子
アロハ着るハワイの旅を夢に見し　義一
つぎはぎの作業着高く干す誇り　昭子
着倒れの京の暖簾がまだ消える　淑子
和服着て女の戦始まりぬ　敏
水仙のように清楚な人に逢い　良子
早くおいで春を手まねく芽水仙　三世
水仙のひっそりと咲く無人駅　文子
水仙の雪をおろして朝を剪る　シメ子
水仙が匂い人柄が匂う　三千代
水仙に無口な訳を聞いてやり　和子
水仙の薫りをつつむ真の闇　洋子
福耳をほめられている病みあがり　きよ子
水仙の便りチラホラ淡路島　敦子
春のミューズと契って蕾む黄水仙　寿美

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

花嫁に沢山もたす親の見栄　保蔵
沢山は言わず明日から出直そう　芳子
沢山は語らぬ父で温かい　歌子
郷土雛テレビの上に愛らしく　正子
落ちぶれていても一対雛がある　紫香
屈託もなく一対の箸を割る　嘉矩
一対のひいなと夫婦老いてゆく　年代
利休忌は雨一対の花は黄に　作二郎
漫才師夫婦ひとりが風邪をひき　水声
古い殻脱ぎすてる日の靴をはく　敬
姫鏡台蝶の脱皮を待っている　曲ん手
脱皮した女は故郷を語らない　武庫坊
海外旅行少うし脱皮したつもり　萬的
脱皮した尼僧を囲む普茶料理　〆女
脱皮して昨日と別な風に逢う　定人
脱皮するときめき少女美しい　英子
あき缶を蹴って少年脱皮する　正一
少女から脱皮口数減ってくる　園歩
早起きが貧乏くじ引く寒い朝　文夫
ゴンドラの唄に大正揺れている　伊三郎
ダイエット用の食事をしてる犬　石舟
職退けば義理チョコさえも縁がない　みち子
まだ売れぬ作家がひとりめしを炊く　静夢
筆立てに戻す耳かき春炬燵　栄
遠い日がほんのり灯るひなまつり　美智子
どの辞書も同んなじとこにつく手垢　杜的

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

蛇口から春を知らせる水温し　すみ
まだ未練抱いてベンチを温める　歌子
コーヒに誘われ温い話する　寅之助
お勝手の窓から母の朝が明け　〆女
単身赴任窓から見える思慕の念　向西
富士見えて話題が変わる窓になり　紫香
どの窓も幸せらしい灯があかい　弘治
いい天気窓開け風と対話する　夢之助
窓開けば春のいぶきが顔をなで　義嗣
やけくそで踊るカッポレ馬鹿受けし　敏之
久しぶり息子と飲んでうまい酒　石舟
忙しくて忘れられてる昼の月　定人
白い手が油断を誘う下心　六浦
親切な美人の声に油断すな　保蔵
京訛りやんわり男油断さす　佳秋
緊張も油断もいらぬ母の膝　澄子
油断では済まぬ命の車事故　いわお
春うらら懐うっかり油断する　十四郎
青春に少し油断が過ぎた悔い　武庫坊

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

土足でも飲めるわたしの席がある　早苗
席蹴ってみたが誰あれも引き止めず　雄々
末席でこまめに動く妻がいる　寿美子
席順を新人類は気にしない　みほの
極楽に席があるとは限らない　典子
ゆずられた席に小さく座ってる　いわ子
食卓に亡母のおわした席が空き　勝見
末席は気取らないから本音です　玲子
七光無風地帯に席がある　節子
中座することを考え末席へ　ひさ子
出席と書けぬおんなのクラス会　きみ子
かたくなに父が守った席を継ぐ　宗光
席順を狂わす風に追われそう　幸子
席を蹴り突っ放すのも策のうち　邦俊
うしろから来る若者に席ゆずる　小鹿
世渡りのうまい男の指定席　仙岳
逃げやすい処に席をとっておく　とみお
後断きの席を囲炉裏が待っている　螢
気が向けばおいでと席を空けて待ち　弘朗

川柳高知　川竹　松風報

代償を問わない母の背の丸み　有佳

言いすぎたらしいお酒に気がとがめ　竹萌
割り勘を払う女で隙がない　和広
反論も言わせて聞いて多数決　春枝
白線を跨ぎダンプに狭い道　朱坊
歳時記は不用となった市場籠　一求
憧れと不安を積んで船出する　千恵子
正夢で不安がつのる母の顔　恒子
新婚へ不安がつのる赴任先　憲一
付き添いを特別室へ呼ぶカルテ　節子
灰色の議員手袋白すぎる　高重
手袋の穴を見つけた祖母の針　功
血の通う軍手にもある右ひだり　春童
ペンキ屋の軍手その日の色になり　佳風
自画像を画くのに彩がまだ足らず　松風

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

合格のボート一気に春が来る　信治
雪解けの誘いは春の東風　しんじ
春夏秋冬四季それぞれの詩がある　英一
ドラクエの虜となった春灯下　章
愛を得て少女に春の羽根が生え　悦郎
局面へ一喜一憂するファン　頂留子
局面を上手にそらす消費税　柳伸
局面の打開に邪魔な石頭　年人
局面の打開に走りまわされる　和子
局面はどっちも強気というねじれ　勝美
対戦の局面見える段違い　東雲
局面がくるくるかわっておちつかず　弘直
誘い水二つ返事は意外なり　隆
犬猿の仲に意外な思いやり　朝子
おとなしい姉が駈け落ちしたロマン　シマ子

意外にもけちんぼうからおごられる　美津留
私大合格意外に細い父の脛　春子
この人も淋しい酒を飲まない人と添う　泰
次の世は酒を飲まない人と添う　三男
もう何も言うな言うなと酒を注ぎ　一高
月見れば月と飲みたくなるお酒　柳宏子
長生きを考え酒を飲んでいる　度
酒とろりとろりと桜咲き揃う　甘平
語らない歴史に偉さ見た素顔　喜風
偉人伝少年のあす書いてない　宏子
偉い人はいつも聞いてた寺の鐘　美幸
老人会昔はみんな偉い人　作二郎
偉い人とうとう銅像になりました　雅士
偉い人ばかりで歯車回らない　真柳
　　重人

南海川柳会　飯田　悦郎報

入学をすればガリ勉それっきり　恒明
入学日お礼参りの絵馬おさめ　度
入学の裏を知らない青い空　喜風
職務上二人の仲を問いつめる　柳伸
きついこと言わねばならぬのも職務　庸佑
事件勃発早速飛んで行く職務　文秋
生涯はへいたい蟻という職務　甘平
職務上のことは家庭に持ち込まぬ　眉水
うっかりと職務をこえた印を押し　真柳
後任も決まりゆっくり飲むとする　柳宏子
後任の事で持ち切る社の人事　凡子
後任がいちもく置いた古参株　しんじ
いぶし銀後任たてるお人柄　憲太郎
後任のうわさの人を料理する　花仔

後任が美人で空気うまくなる　文
お互いを許す会話がまだ続く　凡九郎
かけひきのいらぬ会話がある自然　しづ子
一人住み人恋う電話長くなり　志華子
声高の会話に秘密などはなし　覚然坊
エンジンと会話しているパイロット　東雲
菜の花の会話は蝶が聞きにくる　曲ん手
会話下手隅でちびりちびり聞く　正好
肝移植波紋をよんだ医師のわざ　信博
鯉はねて波紋崩れる五重の塔　勝美
波紋なくかすかに動く冬の川　悦郎
猿山のボスが決まらぬから波紋　作二郎
期待する海女が波紋の底にいる　二南
胸の波紋は決して見せぬ陰の人　真砂

富柳会　池森子報

今見頃じゃじゃ馬娘と夜の梅　昭水
見栄はって女したたか生きていく　花梢
痴漢には何度もあったことにする　美房
駄菓子屋で未練話を聞かされる　文次
旅好きの土産話が上がり込む　荘次
どこ見ても花の万博みな見頃　智久
丹精こめ見頃を待てば花盗人　(伊)勇
二人連れ見頃の桜背に語る　花子
見栄捨てて無心に雑草引いている　トシエ
餞別をしときゃよかった土産くる　(田)勇
真すぐに落ちる水なら今見頃　岳人
振り向いて振り向かないで乱れ髪　森子

サークル檸檬　大澤三四子報

腹の虫治めた顔もこんな顔　今日子

鍵かけて私の世界へ出かけます　千松
黄梅のつぼみがのぞく雪の下　恵峰
晩年の幸せ見付ける鍵さがす　光梅
夢の中出かける前に鍵掛ける　英楽
虚栄心スポットライトを浴びたくて　澄子
真実を吐き続けてる繭の中　美緒
堂内の光る目一つ立ちすくみ　雅子
ピカドンも歴史の上と済まされそう　三四子
樹の下に私好みの白い椅子　泰子
仕合わせの椅子が止って悪女めく　智恵子
七光りあとは自力で勝負する　千代女
くつろいだはずの座椅子になじめない　美子
お祈りがすんで一斉椅子の音　薫風

聴障川柳　稲田　豊作報

酌き足して妻は疲れたネジを巻く　豊作
全身を耳にして聞く聾の妻　たみ
同窓会指輪に負けた妻の愚痴　珍顔
負けて勝つ忍の一字の妻でした　文古
ボーナスの無い妻佗し暮れの街　和江
良き妻を持った仕合せ福禄寿　真女
家計簿に赤字を生まぬ苦労妻　進一
妻逝きて男手鍋の哀れさよ　行江
芝居上手な妻の涙に逆らわず　三香
何時からか頼み甲斐ある妻になり　みつる
春近し妻バーゲンの服で待つ　静子
教養が無くても素直な妻がよい　柳香
人の花は綺麗に見える世の習い　健太郎
難聴も妻の御蔭で無事平和　珍妙人
裸でもよいと貰った妻の出来　八恵子
靴底を引きずって行く歳になり　一晄
停年の気楽な靴と旅に出る　富子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

初ものをバイオとやらがおびやかす　恵美子
心まで白紙の前で固くなり　かつ子
故里へ戻れ戻れと風が呼ぶ　笑子
一旦は白紙に戻せという野党　ヒデ子
白紙にも染まりたくない色があり　好栄
これからを白紙に返す足の裏　聖子
一年を白紙にあずける墨をする　智重子
鬼よりも怖いよ白紙の多数決　はるみ
白紙にはコントラストの墨の色　歳栄
シクラメン気どったつもりはないけれど　民子
シクラメン負けまいバラには棘がある　鈴江
森の精出て来い星の冬木立　北斗
シクラメン冬の窓辺に春を編む　博利
勉強の部屋に一鉢シクラメン　世似
下駄箱もおしゃれしてますシクラメン　清泉
一年を白紙にかえす除夜の鐘　白汀

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

糸切歯ぷつんと切って祖母達者　杜的
会社との絆ポケットベルが鳴る　圭坊
切れかけた絆をつなぐ犬が来る　よし子
空振りの日が続いてるワンカップ　正坊
カップすれすれ芝の無情を知るボール　武庫坊
ご自慢のカップが並ぶ理髪店　(田)英子
ブラックに限るカップをまず温め　石舟
ゴルフカップ父の勲章かも知れぬ　(小)英子
春が動いて駅で待つこと多くなる　作二郎
赤ちゃんが動いていると触らせる　登志実
水動くおたまじゃくしの尾がとれた　きく子
動いたらすぐに互角が崩れ出す　しげお
よく動く赤ちゃん親のスキを突く　明光
山の村雪解け水に動き出す　紫香
言わされるから聞かんとこやめとこう　凡九郎
せせらぎの音ばかりです魚籠の中　博史
ある時は子のない夫婦がうらやまし　寿美子
花博花博きれいになった駅トイレ　萬的
内裏から一坊一条を双眼鏡　明吉
まだ見えぬ糸に行末きめられる　つえ子
終着駅わからないから生きられる　富子
内孫のなくて弾んだ出産祝　登代子
肩書を捨てた夫の散歩靴　とく子
日展で物知り顔のベレー帽　蕗児

駒つなぎ川柳会　里　小路報

代役の熱演好評を守る　英一
好評そういう時もあるけれど　凡九郎
めだたないおしゃれが匂う香袋　頂留子
せり合って油断も隙もないホープ　勝美
磨き合う良きライバルを得たホープ　庸佑
ご指名の無い夜のホープほっとする　覚然坊
運よりも礼束でする選挙戦　東雲
好評のワインそれ程旨くない　幸治
好評の切符枕に眠れない　柳石子
好評を信じたのに風向きを変え　悟郎
贅沢な白無垢ナースのおしゃれかも　善信
ホープにはホープとしての楽屋裏　冬葉
勝って泣き負けても泣いているホープ　柳影
そこはホープまず飲んでから考える　翠公
大穴を当てて運命狂い出し　文秋

もう誰も運にはふれぬ吹き溜まり　信治
処女作の好評すぎて胃にもたれ　度
紀子さんの笑顔ホープにしてしまう　笛生
成人式日本のホープ勢揃い　壮之助
自叙伝に運が稼いだとは書かぬ　千代三
横顔をそっと見ている妻の運　憲太郎
下手なのが好評だった隠し芸　射月芳
好評に酔うて明日を甘く見る　恒明
不運とはあなたの妻になったこと　外吉
運はどうあろうと感謝して生きる　浩一郎
宝くじ売場素通りするホープ　作二郎
期待されすぎたホープの自閉症　柳宏子
分譲地雨に並んで申し込み　重人
不運な女が急ぐ湯街の朝の下駄　萬的
七色の下着が知っているおしゃれ　柳伸

翠洋会　中西兼治郎報

家計簿にローンの利息幅をとり　兼治郎
子の巣立ちこんなに部屋が広いとは　結実
背に腹はかえられません高利でも　石舟
新芽出る利息つけたと春の声　絹子
孫が来て四角四面になった部屋　宣司
花博に世界の色を呼び寄せる　凡子
部屋割は煙草吸う人吸わぬ人　正雄
独り居の老いの佗しさ部屋に満ち　真
ファミコンの音がひねもす子供部屋　英一
碁敵の居て祖父の部屋石の音　すすむ
我が家にも治外法権子供部屋　恭昌
妻の留守部屋中探す認印　佳秋
嘘つけば針千本の利息くる　東雲
すばらしい恋をしてます海の青　さと美
面白く見せてピエロの裏の顔　為子
鍵かけた子どもの部屋が気にかかる　照子
落し穴ほって一日童心に　宏子
面白い男の背にある孤独　光子
掘炬燵居間兼書斎応接間　綾子
人生の利息多くの友がいる　みつ子
ゴソゴソと隣の部屋はまだ寝ない　登志実
物音がせぬと気になる母の部屋　正坊
いい部屋と思いちがいの蛸の知恵　いつを
さか立をすれば浮き世も面白い　鬼遊

むらくも川柳句会　藤井明朗報

結納を待つ母さんがそわそわと　正朗
仁王さんにっこりしたら気味悪い　芳子
雪解けの水に未練を断って春　秀子
にっこりとしているだけの見合席　文子
みんな芽が出るまで待とう春の鍬　一葉
鍋をかけ種火弱火のガス加減　林蔵
手から手へにっこり笑う孫を抱く　はる代
土壇場に来てあせらずに待つゆとり　義良
未練なくさくら吹雪は風のまに　幸夫
磨かれて艶ます鍋と夫婦仲　ヤス子
初対面にっこり笑顔いい印象　千里
さくら土手つくしのぼうや春を待つ　島子
はいはいでにっこり笑う初節句　常子
お隣りの鍋の底つき気にかかる　仲子
恋人へラブレターはペンネーム　幸子
老梅の香り豊かに春を告げ　三津江
公約に一票上げたい人ばかり　梅園
本名を知らず雅号のおつき合い　ゆき子
雅号でも郵便届くようになる　峰雪
本名より雅号の方で意気が合い　明朗

川柳塔社常任理事会（4月2日）

▽栞主幹・柳宏子氏から路郎句碑建立除幕式について報告、謝辞。
▽『川柳塔』発送事務の改善について審議。
▽6月号から隔月・1ページの「ひみこさろん」開設を決定。
▽常任理事の業務分担案について検討。
▽同人名簿を今秋、発行することを決定。
▽三輪通彦氏（岸和田市）の同人推薦を了承。

川柳阪南百号記念句会

とき　6月24日（日）　午後1時開場　午後2時締切
ところ　尾崎公民館
（南海尾崎駅浜側下車・難波寄り徒歩2分）
おはなし　野村太茂津氏
兼題・選者（各題2句）　投句拝辞
「鮮やか」　松原　寿子選
「感　激」　冨上　光代選
「反　応」　福本　英子選
「展　望」　牛尾　緑良選
「生い立ち」　堀端　三男選
※席題はありません。
会　費　500円
連絡先　〒599—02　泉南郡阪南町尾崎八五四
深日白光子

■各地句会だより

川柳サークル卯の花

辻　白渓子

卯の花が創立したのは昭和五十九年五月十六日ですので、今年はやっと六年目です。初代会長の若柳潮花氏が発足後間もない九月に他界されましたので、その時の事情もあり、五周年記念大会が終る年まで高杉鬼遊氏に会長の任に当たっていただきましたが、市側との打合せ事項（市主催の文化祭など）があり、市在住者との要請もあって、現在、私が担当しています。市の文化祭は毎年行われ、市協議会に籍を置く各文化サークルが盛大に展示を競い合います。川柳は、短冊・色紙など三百余点を掲示、また、他地区の句報紹介、個人句集の陳列のほか、川柳関係の資料を展示して好評を得ています。

定例句会は毎月第三木曜日、市民会館で開いています。出席者は四十名から五十名程度ですが、ベテランの応援もあり、内容のある句会だと自負しています。各題の出句は二句で中々入選しにくいですが、それだけに励みがつくのではないかと思っています。また、最近、各題ごとに初声賞（最初の入選句）を採り入れ、以前からのユーモア賞（自由吟から抜粋）とともに好評で、安緒しており、常に親しみやすい句会になるよう心掛けています。

さらに、集いをより深めるため、恒例の新年懇親会を開いていますが、ほぼ四十数名が参加し、賑やかな宴になり、カラオケの出番もあって特に婦人たちにも好評です。句会だけの集いでは味わえない好影響が得られ、今後も何とか続けて行きたいと思っています。

昨年五月の五周年記念大会は、日曜日の会場が取れず、出席を心配しましたが、平日にかかわらず一一九名の出席があり、大いに意を強くしました。選者もベテランぞろいで、当然と言えばそれまでですが、本当に嬉しい大会でした。大会を記念して設けた年間優秀賞（天位最多数）および優秀賞（入選句数多数順位五位まで）を今年一月に初めて表彰しましたが、高槻在住者が三名も選ばれたのは嬉しい限りです。今後ともベテランに並び、追い越してほしいと思います。

そしてこれからの目標は、各月五十名を超す出席数となるよう努力し、高槻文化協議会でのサークルに、より重要な存在を示したいと思いますのでよろしくご指導とご協力をお願いします。また、近い将来には月間賞（カップ持ち回り）なども設け、より競い合う楽しみが持てる句会にしたいと考えております。

そして今年は、九月が初代会長の七回忌に当たりますので、その追悼句会を開いて故人を偲び、盛大になった卯の花の現況をご報告したいと思いますので、できるだけ多く出席いただけるよう併せてお願いします。

高槻は史蹟ゆかりの地として知られ、西国街道や万葉の歌人が詠んだ三島江、天然記念物「富寿栄松」が最近まであった本照寺など、有名な古寺が多く、いつかは吟行も計画したいと思っています。

米澤暁明さんを悼む

月原宵明

川柳塔社参事・水郷川柳社会長米澤暁明氏は、アスベスト肺治療のため、喜多医師会病院入院中、例年より十日も早いという桜の開花が待ち切れずに、薬石効なく三月十三日、八十歳の生涯を閉じられました。誠に悲しい限りで、哀悼に堪えぬ次第であります。

翌十四日、菩提寺で葬儀が行われ、官民三百人以上の焼香の列が続き、地元周辺の柳人は勿論、県内柳人多数がお見送りいたしました。

川柳については戦前から手を染められ、故前田伍健師、故麻生路郎師に師事し、今川椋影、堀内暁風氏とともに、今の水郷川柳社を育てた一人であって、昭和49年、県川柳文化連盟再建以来、副会長として現会長仲川たけし氏を助け、資性重厚、人格誠実で衆望を集めていました。

水郷川柳社の育成と興隆に意を注ぎ、地域文化の向上に資し、昭和60年5月には有志により、大洲市中村の総社太明神社境内に句碑が建立されました。

生き場所がここにもあった屋根の草　暁明

暁明氏は、どちらかと言えば寡黙で、訥々として真随に触れるという感じで、突如として名言を呈し、ユーモアはたっぷりでした。特徴は極めて義理堅く、情にもろい人であって、柳人の吉兆禍福には万難を排して誠の限りを尽す、思いやりの深い人でありました。

また、愛媛師範学校卒業後、小学教育に心魂を傾け、数多くの学校の校長を歴任して定年退職せられたもので、発病のアスベスト肺は石綿から発するとのことですが、教育者であった暁明さんの永年の白墨からの浸潤ではなかろうかとも言われています。

昨年七月、川柳塔社勉強会が四国へ来られ、道後温泉に一泊の際、義理堅い暁明氏が姿を見せなかったのは、すでにその頃から病巣を抱いていたようでした。

私と同年輩であり、川雑時代からの柳友でお互いに励ましつつ、「人間陶冶の詩」を目ざして手を繋いでまいりましたが、淋しい限りです。長野文庫氏と併せ二人に替わって頑張ることを誓い、暁明さんに哀悼の誠を捧げます。

遺句

どん底で生きねばならぬ灯に出あう
寒椿の勘狂わせたぬくい冬
星キラキラ昔のままの故郷よ

法名　川柳院五山暁明居士位
享年八十歳。本名　米澤五郎

川柳ねやがわ
十五周年記念句会

とき　5月20日　正午開場・1時締切
ところ　秦公民館（寝屋川市駅からバス）
会費　1500円（懇親宴含む）
兼題（2句）
「半　端」　里　小路選
「順　調」　丹波三千子選
「ベテラン」　河内　天笑選
「応　える」　山本　礫選
「積　む」　住田英比古選
「節　目」　橘高　薫風選
投句　5月15日締切

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★川柳噴煙吟社の田口麦彦氏は『週刊時事』（時事通信社刊）の4月7日号から「田口麦彦の時事川柳教室」また、『週刊小説』（実業之日本社）の4月13日号から「川柳とあそぶ」（エッセイ）を連載している。

★第20回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は5月13日、神戸市立福祉センターで開かれる。特別課題（1句）は石井冬魚選「妻」で、兼題と選者（各2句）次のとおり。

「ペン」　中村　酔虎
「抱く」　赤松　隆男
「野」　山本　翠公
「握る」　浜野　奇童
「虫」　橋高　薫風
「人間」　小松原爽介
講演＝紋太の川柳・ふあうすとの川柳　田中　好啓

★川柳研究社創立60周年記念川柳大会は7月15日、東京都・半蔵門会館ホールで開かれる。宿題と選者（各2句）は次のとおり。

「先頭」　渡邊　蓮夫
「中心」　礒野いさむ
「幸運」　神田仙之助
「明日」　尾藤　三柳
「協力」　吉岡　龍城
「長い」　越郷　黙朗
「光」　宮崎　慶子
「積む」　志水　剣人
「覚悟」　佐藤　正敏
「宴」　恒松　叮紅
「一つ」　渡辺　独歩
「ギリギリ」　両川　洋々
「勝算」　奥谷　弘朗
「夢」　八木　千代
「譲る」　但見石花菜
「ハンドル」　土橋　螢

★NHK学園近畿川柳大会（2月18日・河内長野市）で大会大賞に池森子、市文化連盟会長賞に山本玉恵、NHK大阪放送局長賞に河内天笑の各氏が受賞した。

★小西雄々川柳句集『松露』発刊記念川柳大会は9月24日（休日）午前10時からJR米子駅前の米吾ステーションビルで開かれる。兼題と選者は次のとおり。

「吉報」　西尾　栞
「松」　黒川　紫香
「多才」　久家代仕男

★兵庫県川柳協会は役員改選にあたり当社関係で次の同人諸氏が就任した。

常任理事＝植村客遊子
理事＝辻文平・遠山可住・保西岳詩・春城武庫坊

★兵庫県主催の平成2年度ふれあいの祭典川柳祭は、11月3日、姫路市花の北市民ホールで開催に決定した。

★都大路川柳社はこのほど今年度の役員を決定した。代表は田中秀果、主幹は奥山晴生、編集部長は角田辰男の各氏。

★豊中もくせい川柳会は結成以来、会長をつとめてきた安藤寿美子さんが退任、後任に田中正坊氏を選任。

★川柳泉尾は初代会長の池田淑子さんが退任、新会長に田中弘子、副会長に勢理客トミ子、会計に中井文子の三氏を選任。

▼訃　報▲

■石垣花子さん（米子市・本社参事）の夫君が去る2月5日、急逝された。

▽お便り△

■山内静水氏（竹原市・参事）再度入院、放射線治療を続けることになりました。

■垂井千寿子氏（和歌山市・理事）「川柳塔」碑に故葵水も仲間に加えて頂いてありがとうございます。

■長野南氏（今治市・故長野文庫氏ご遺族）川柳塔四月号に東野大八先生の筆で「長野文庫」を掲載していただきありがたく心よりお礼申し上げます。早速仏前に供えましたが、故人の喜ぶ顔が目に見えるようでした。

▼お詫び▲

■4月号8P・西村早苗さんの県名は**島根**、29P・稚江清芳は「**椎**江」、64P・根本敬は「根**来**」、71P・堀芳江は「**良**江」、72P・中西兼次郎は「兼**治**郎」、80P・俊子は「俊**路**」、82P・青江鉄治は「青**枝**」、同・高田博子は「**信本**博子」の誤りでしたので、訂正してお詫びします。

▽訂　正△

■4月号・4P上段6行目せめへも→せめ**て**も、6P上段21行目ゆるよう→ゆる**そ**う、8P上段5行目合槌→**相**槌、14P下段3行目春華私実→春華**秋**実、22P上段20行目鳥→**烏**、75P上段10行目母よりも→**女**よりもと訂正します。

新同人紹介

三輪　通（ひとし）　彦

―武助・狸村・冨士子推薦

5月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
堺川柳会	6日(日)午後1時から 大きい・帯・汚す・拝む	堺勤労会館第3会議室　阪堺線宿院下車 〒593 堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑 会費 1,000円　投句料 310円　**各題2句**
八尾市民川柳会	10日(木)午後6時から 遠足・若葉・条件・当る	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141　飯田悦郎
尼崎いくしま	11日(金)午後1時から 闇・波紋・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔まつえ	12日(土)午後1時半から 名物・別荘・矢印	松江市雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔わかやま	13日(日)午後1時から 海苔・野太い・登る	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口川柳会	14日(月)午後1時から 彫刻・池・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
富柳会	17日(木)午後1時から 名刺・女々しい・名優	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4－1　池森子
高槻川柳サークル卯の花	17日(木)　正午から 缶詰・番組・迷惑・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1－7－7－905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
南海川柳会	18日(金)午後6時から 疑問・小言・丸腰・仲間	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
南大阪川柳会	19日(土)午後6時から 安易・果報・才女・体面	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
川柳ねやがわ	20日(日)　正午から ベテラン・積む・順調 半端・節目・応える	泰公民館　京阪寝屋川市駅からバス又は徒歩 〒572 寝屋川市春日町6－9　高田博泉 句会費 1,500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
もくせい川柳会	21日(月)午後1時から 針・早い・止まる・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
岸和田川柳会	24日(木)午後6時半から 紹介・境・月末	岸和田市上町町会館　南海線岸和田駅東南徒歩10分 〒596 岸和田市上町7－36　植山武助
川柳東大阪	29日(火)午後6時から 猫・公園・ピンチ・許す	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

編集後記

☆五月と言えば、四日は須崎豆秋さんのご命日である。豆秋さんと言えば、川柳界の一茶とも言われた作家で句集『ふるさと』を開いて見ると、どの句を見ても私たちをユーモアの境地に誘ってくれる。

「口髭を生やして猫の子が生れ」「院長があかんと言うてる独逸語で」など川柳の本筋を歩かれた。だが彼も他の一面で「阿呆なこと言うてしもうて淋しけれ」など、詩人の淋しさをも十分に味わえる人であった。

☆去る四月十五日、土居耕花さんの追悼句会に列席しユーモアあふれる生前の句境に触れ、改めて感心させられた。川柳の大衆化とともに句会などの機会が増えてくると、言葉の遊びに似た句が溢れてきて川柳本来のこころが忘れられてしまったのではないかと疑いたくなるのは私一人だろうか。

☆さて星空を眺めていると数ある星の中には地球と同じような生物がいるような気がして地球外生命（E・T）探査「オズマ計画」が試みられ、アメリカ、ソ連やカナダ、オーストラリアなどで観測が行われたが、すべて空振りに終っている。しかし何億年と言う宇宙時間の中で、高々百年に過ぎない研究で結論が得られるはずもあるまい。何しろ太陽系の属する銀河系だけでも、星は数億個もあるのだから。こんな研究を専門学者たちの知的なお遊びと言っては失礼かも知れないが、私たちの作品も天文学的数字の中から見れば五右衛門の言葉じゃないが〝小せえ小せえ〟ですね。（萬）

▼詩人の北村太郎氏は、テレビなしの生活を十数年もしていると聴く。とくに主義・主張があってのことでなく、テレビがきらいだからでもないらしい。詩人の真似ではないが、わたしもテレビのない生活をしたい。

▼そんな時にNHKの受信料値上げが決った。先方の都合もあってのことと思うが、民放だけでこと足りている。「NHKは、あなたの受信料で支えられています」と、甘い言葉で囁かれても、見もしない大河ドラマや衛星打上げのための値上げなどご免をこうむりたい。ハイ・テクの現在NHKだけ写らないテレビが出来ても不思議はないが。

▼NHKの受信料は、受信機を設置した世帯が分担する「公的負担金」だから大河ドラマを見ても見なくても受信料を払わないわけにはいかない。どちらにしても消費者に分が悪い。

▼日米摩擦、為替や株の乱調、土地の高騰、税金や物価など不満だらけだが、ときどき腹を立てる以外に手立てはないらしい。文句を言えば選挙者側の責任にされるが、誰もこんな政治を望んでいるとは思えない。不平・不満を国政に反映させる制度に、総理府に国政モニター、公正取引委員会に消費者モニターなど、各省庁に独自のモニター制度があるが、有効に作用されてはいない。「真面目に働くから家が持てない」と不動産屋が言う。（き）

★外来語の表記のしかたを検討してきた第十八期の国語審議会では三月一日の総会で「外来語の表記（案）」を発表した。その内容は、関心のある方はすでにご承知のことと思うが、従来の国語を書き表す百のカナのほかに、外来語に由来する三十三のカナを新しく認知したことで、例えば「セパード」は「シェパード」という表記が一般的となる。

★もともと外国語からとり入れた外来語をカナで表記することは、昔、私のような劣等中学生が英語のリーダーにカナを振って教師の目をごまかしたように、初めから無理がある。どこまでも外国語の原音にこだわる人は、表記は表記として原語で発音するか、アルファベットで書けばよい。とにかく「ベネチア」に四通りもの書き方を示すのは、混乱を招くもとになる。

★そして肝心の「カタカナ語のはんらん」をどうするか、については結論を出せず、「望ましくない」「自然に陶汰される」という両論併記にとどまった。これでも分かるように、この審議会には新旧両様の意見を持つ委員がおり、妥協の産物として報告や答申が提出されるのだが、それが時により右に左にゆれる。

★勝手にせえーと言いたいところだが、物を書く人間としては全く無視できないので困る。そこで私たちの先輩はこんな句を作っている。

「ギョーテとは俺のことかとゲーテ言い　緑雨」

（正）

本社5月句会

日時　5月2日（水）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　藤井一二三
兼題「地獄」　榎本吐来選
「垢」　堀端三男選
「飲む」　高須賀金太選
「粉」　高杉鬼遊選
「歩く」　西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内厳守
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）一葉に一句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社6月句会　7日（木）

兼題　「火事」「雫」「拝む」「自転車」「寝る」

作品募集

7月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）八木千代選

課題吟（3句）
「仏」小林由多香選
「送る」林荒介選
「童謡」西出楓楽選

初歩教室「先走り」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

8月号課題吟「清い」「立つ」「平和」

同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へお願いします。
〒581 八尾市中田2―302
振替口座　大阪 8―33368
誌代　半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

NHK川柳作品募集

課題「迷う」　橘高薫風選
ハガキに3句　5月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　5月27日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「先生」　橘高薫風選
ハガキに3句　5月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
平成二年四月二十五日印刷
平成二年五月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六二一―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二年四月二十五日 印刷
平成二年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七五六号 川柳塔 五月号
定価 六百円（送料 五十円）

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社 大エスケー
〒540 大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941) 8 0 1 5

KIRIN
21世紀へ乾杯

本格派。
旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ。

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

雑誌 05703－5